宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第215集

都農町所在

木戸平（きとのひら）第２遺跡

東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書７

２０１２

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第215集

都農町所在

木戸平（きとのひら）第２遺跡

東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書７

２０１２

宮崎県埋蔵文化財センター

木戸平第２遺跡の立地と環境

－遺跡東側から尾鈴山地を望む－

巻頭図版２　　調査地と弥生時代の遺構

河岸段丘面にある遺跡　　－都農川（北）より荒崎山山裾方向（南）を望む－

突出壁を持つ間仕切り住居　－３号竪穴建物跡遺物・炭化材検出状況－

張り出しを持つ４号竪穴建物跡と２号竪穴建物跡

４号竪穴建物跡断面（南壁）

４号竪穴建物跡断面（西壁）

巻頭図版４　出土遺物

木戸平第２遺跡の弥生時代遺物

序

宮崎県教育委員会では、平成20年度より東九州自動車道（日向～都農間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を実施しております。本書は、その発掘調査報告書であります。

本書に掲載した木戸平第２遺跡は、平成20～22年度にかけて発掘調査を行い、後期旧石器時代から弥生時代に至るまでの様々な遺構や遺物を確認することができました。特に弥生時代終末期～古墳時代前期の調査では、都農町内で初めてとなる、南九州地域で特徴的な間仕切り壁を有した竪穴建物跡や焼失した建物跡が検出され、当地域での弥生時代集落の一面を明らかにすることができました。また、出土した土器、石器、鉄器などの様々な遺物は、郷土の歴史を解明するうえで大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して厚くお礼申し上げます。

平成24年２月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　森　隆茂

例　　言

1　本書は、東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴い、平成20年度から平成22年度に実施した都農町所在の木戸平第２遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、西日本高速道路株式会社九州支社の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

3　現地での実測・写真撮影等の記録は、主に徳留洋志・結城修・米森祐太が行った。

4　整理作業は、遺物洗浄・注記・接合を整理作業員が行った。業務委託分を除く実測やトレースは整理作業員の補助を得て徳留が行った。石器の実測及びトレースについては大半を株式会社パスコに業務委託した。また、石器類の分類や石材同定は松田清孝・松本茂の助言を得て徳留が行った。なお、本書で使用した遺物写真は、今塩屋毅行が撮影した。

5　次の業務はそれぞれ業者に委託した。

測量　　：（有）河野測量設計事務所

空中写真撮影：第３次調査　九州航空（株）　　第４次調査　（有）ふじた

自然科学分析：（株）古環境研究所

6　本書で使用した周辺遺跡位置図は、国土地理院発行の25,000分の１図をもとに、周辺地形図等は、西日本高速道路株式会社九州支社延岡高速道路事務所から提供された1,000分の１図をもとに作成した。

7　国土座標は旧平面直角座標系Ⅱ、日本測地系を使用したが、諸般の事情により座標値は世界測地系に変換していない。なお、本書で使用した方位は座標北（G.N.）であり、「M.N.」と記載しているものは磁北（磁針方位は西偏約6.0°）で、標高は海抜絶対高である。

8　本書で使用した土層断面・土器等の土色・色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』による。

9　本書で使用した主な略号は以下のとおりである。

ＳＡ…竪穴建物跡　ＳＣ…土坑　ＳＤ…土坑墓　ＳＥ…溝状遺構　ＳＩ…礫群　AT…姶良Tn火山灰　K-Ah鬼界アカホヤ火山灰

10　本書の遺構および遺物実測図の縮尺は明記しているが、一部を除き基本的な縮尺は次のとおりである。

竪穴建物跡1/50　礫群1/30　土坑墓1/20　土坑1/20　石器2/3　縄文土器1/3　弥生土器1/4
陶磁器1/3　金属製品1/2

11　土器実測図で赤色顔料が付着した部分は　　で示している。
石器の節理面は一点鎖線で、いわゆるガジリは黒塗で表現した。

12　本文中「尾鈴山溶結凝灰岩」としたものは、「尾鈴山酸性岩類」の主体をなす溶結凝灰岩（WT1・WT2）を指す。遺跡で認められる「尾鈴山酸性岩類」には他に花崗閃緑斑岩・火山角礫岩などが含まれるが、遺物や遺構の一部として「尾鈴山酸性岩類」が利用される場合、厳密な岩石名の特定が困難なことも多い。このため、本文中「尾鈴山溶結凝灰岩」と記した資料には溶結凝灰岩を主体としつつも他の「尾鈴山酸性岩類」を含む可能性がある。

13　本書の執筆は、第Ⅰ章・第Ⅲ章～第Ⅳ章第３節は徳留、第Ⅱ章・第Ⅳ章第４～７節は今塩屋、第Ⅵ章を徳留、今塩屋が共同で担当し、第Ⅴ章及び、全体的な編集は徳留が行った。

14　出土遺物、その他の諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに
　第１節　調査に至る経偉……1
　第２節　調査の組織……1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境……2
　第２節　歴史的環境……2
第Ⅲ章　調査の方法と経過
　第１節　調査の概要……4
　第２節　整理作業及び報告書作成……6
　第３節　教育普及活動……6
第Ⅳ章　調査の記録
　第１節　遺跡の基本層序……6
　第２節　石材分類について……7
　第３節　後期旧石器時代の遺構と遺物……8
　第４節　縄文時代の遺物……26
　第５節　弥生～古墳時代の遺構と遺物……32
　第６節　遺物包含層等の遺物……52
　第７節　その他の時代の遺構と遺物……52
第Ⅴ章　自然科学分析の結果
　第１節　放射性炭素年代測定……58
　第２節　炭化材の樹種同定……59
　第３節　炭化種実同定……60
第Ⅵ章　総括……64

報告書抄録……巻末

挿図目次

第１図　木戸平第２遺跡と周辺遺跡位置図……3
第２図　トレンチ配置図……4
第３図　周辺地形・区割り図……5
第４図　第３・４次調査区グリッド配置図……5
第５図　F1区土層断面図……8
第６図　第３次調査区土層断面図……9～10
第７図　後期旧石器時代Ⅰ期遺構分布図・実測図……11
第８図　後期旧石器時代Ⅰ期石器分布図（１）……13
第９図　後期旧石器時代Ⅰ期石器分布図（２）……15
第10図　後期旧石器時代Ⅰ期接合資料分布図……16
第11図　後期旧石器時代Ⅰ期石器実測図（１）……17
第12図　後期旧石器時代Ⅰ期石器実測図（２）……18
第13図　後期旧石器時代Ⅰ期石器実測図（３）……19
第14図　後期旧石器時代Ⅰ期石器実測図（４）……20
第15図　後期旧石器時代Ⅰ期石器実測図（５）……21
第16図　後期旧石器時代Ⅰ期石器実測図（６）……22
第17図　後期旧石器時代Ⅰ期石器実測図（７）……23
第18図　後期旧石器時代Ⅰ期石器実測図（８）……24
第19図　後期旧石器時代Ⅱ期石器分布図……25
第20図　後期旧石器時代Ⅱ期石器実測図……25

第21図　縄文時代早期石器分布図(1) …… 26
第22図　縄文時代早期石器分布図(2) …… 27
第23図　縄文時代早期土器・石器実測図(1) …… 27
第24図　縄文時代早期石器分布図(3) …… 28
第25図　縄文時代早期石器実測図(2) …… 28
第26図　縄文時代晩期土器実測図…… 29
第27図　弥生～古墳時代遺構分布図…… 32
第28図　1号竪穴建物跡実測図 …… 33
第29図　1号竪穴建物跡出土遺物実測図(1) …… 34
第30図　1号竪穴建物跡出土遺物実測図(2) …… 35
第31図　F1区遺構分布図 …… 37
第32図　2号竪穴建物跡実測図 …… 38
第33図　2号竪穴建物跡出土遺物実測図(1) …… 39
第34図　2号竪穴建物跡出土遺物実測図(2) …… 40
第35図　3号竪穴建物跡実測図 …… 41
第36図　3号竪穴建物跡出土遺物実測図(1) …… 42
第37図　3号竪穴建物跡出土遺物実測図(2) …… 43
第38図　4号竪穴建物跡実測図 …… 45
第39図　4号竪穴建物跡出土遺物実測図(1) …… 46
第40図　4号竪穴建物跡出土遺物実測図(2) …… 47
第41図　F3区遺構分布図 …… 48
第42図　5号竪穴建物跡出土遺物実測図 …… 49
第43図　土坑・土坑墓実測図…… 50
第44図　1号土坑墓出土遺物実測図 …… 51
第45図　1号溝状遺構出土遺物(弥生時代)実測図 … 53
第46図　遺物包含層出土遺物実測図…… 53
第47図　Ⅱ層出土遺物実測図(1) …… 53
第48図　Ⅱ層出土遺物実測図(2) …… 54
第49図　採集遺物実測図…… 54
第50図　1号溝状遺構遺物(近世～近代)実測図 …… 54
第51図　暦年較正結果…… 62
第52図　炭化材・炭化種実…… 63

表　目　次

第１表　基本層序…… 7
第２表　後期旧石器時代Ⅰ期礫群計測表…… 12
第３表　後期旧石器時代Ⅰ期石器計測表(1) …… 30
第４表　後期旧石器時代Ⅰ期石器計測表(2) …… 31
第５表　後期旧石器時代Ⅱ期石器計測表…… 31
第６表　縄文時代早期土器観察表…… 31
第７表　縄文時代早期石器計測表…… 31
第８表　縄文時代晩期土器観察表…… 31
第９表　弥生～古墳時代土坑観察表…… 52
第10表　弥生～古墳時代竪穴建物跡観察表…… 52
第11表　弥生～古墳時代土坑墓観察表…… 52
第12表　弥生土器観察表(1) …… 55
第13表　弥生土器観察表(2) …… 56
第14表　弥生土器観察表(3) …… 57
第15表　弥生～古墳時代石器計測表…… 57
第16表　弥生～古墳時代鉄器計測表…… 57
第17表　陶磁器観察表…… 57
第18表　測定試料詳細…… 61
第19表　放射性炭素年代測定結果…… 61
第20表　樹種同定結果…… 61
第21表　炭化種実同定結果…… 62

図　版　目　次

巻頭図版１　木戸平第２遺跡の立地と環境
巻頭図版２　調査地と弥生時代の遺構
巻頭図版３　弥生時代の遺構
巻頭図版４　出土遺物
図版１　木戸平第２遺跡調査地遠景…… 69
図版２　後期旧石器時代の遺構…… 70
図版３　弥生～古墳時代の遺構(１)…… 71
図版４　弥生～古墳時代の遺構(２)…… 72
図版５　弥生～古墳時代の遺構(３)…… 73
図版６　弥生～古墳時代の遺構(４)…… 74
図版７　後期旧石器時代の遺物…… 75
図版８　後期旧石器時代・縄文時代早期の遺物…… 76
図版９　１号竪穴建物跡出土遺物…… 77
図版10　２号・３号竪穴建物跡出土遺物(１)…… 78
図版11　２号・３号竪穴建物跡出土遺物(２)…… 79
図版12　３号・４号竪穴建物跡出土遺物…… 80
図版13　５号竪穴建物跡出土遺物…… 81
図版14　土坑・土坑墓・その他の遺構出土遺物…… 82

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

東九州自動車道（日向～都農間）19.7Kmについて宮崎県文化財課は、平成17年度、32遺跡306,700㎡の分布調査結果を提示した。その後、当該区間は平成17年度末までに関係市町との設計協議等が終了し、平成18年度末には用地買収に着手している。この間、当区間の平成26年度供用開始が公表され、用地取得及びそれに続く埋蔵文化財調査にとって時間的に厳しい状況となった。また、平成19年11月には暫定2車線261,400㎡と見直しがなされ、調査対象面積が減っている。

平成20年7月1日、東九州自動車道関連としては初の『埋蔵文化財発掘調査協定書』が西日本高速道路株式会社九州支社長と宮崎県知事との間で締結された。この協定書では全体の実施計画、発掘調査の範囲や体制、費用の概算額等が提示された。その後、用地の取得状況が進展しないながらも同年10月17日付けで『埋蔵文化財発掘調査委託契約』を結び、調査出来る可能性がある10遺跡3,350㎡の発掘調査に着手した。平成21年1月には、用地取得や文化財調査の進展を条件に平成25年度の供用開始が努力目標となったが、関係者の努力により平成23年11月末現在、32遺跡中25遺跡は完全に調査を終了、未着手は３遺跡を残すのみとなっている。

木戸平第２遺跡は用地引き渡しの終了した部分から平成20年度に第1次調査（40㎡）を開始した。その後、平成21年度に第2次調査（760㎡）・第3次調査（1,280㎡）を実施し、平成22年度の第４次調査（800㎡）で東九州自動車道建設に伴う調査を終了した。

第２節　調査の組織

木戸平第２遺跡の発掘調査・整理報告は次の組織で実施した。

【調査主体】 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所　長

福永　展幸（平成20・21年度）

森　　隆茂（平成22・23年度）

副所長

加藤　悟朗（平成20年度）

北郷　泰道（平成22・23年度）

副所長兼総務課長

長友　英詞（平成20・21年度）

総務課長

矢野　雅紀（平成22年度）

坂上　恒俊（平成23年度）

同課主幹兼総務担当リーダー

髙山　正信（平成20・21年度）

同課副主幹兼総務担当リーダー

長友　由美子（平成22･23年度）

調査第一課長

長津　宗重（平成20 ～23年度）

同課主幹兼調査第二担当リーダー

菅付　和樹（平成20 ～23年度）

【第1次調査】

調査第一課調査第二担当

主　査　　安藤　利光（平成20年度）

主　査　　土屋　雄毅（平成20年度）

主　事　　田中　達也（平成20年度）

【第2次・第3次調査】

調査第一課調査第二担当

主任主事　徳留　洋志（平成21年度）

主　事　　米森　祐太（平成21年度）

【第4次調査】

調査第一課調査第一担当

主　査　　結城　修　（平成22年度）

調査第一課調査第二担当

主任主事　徳留　洋志（平成22年度）

【整理・報告書担当】

調査第一課調査第二担当

主任主事　徳留　洋志（平成21 ～23年度）

主任主事　今塩屋毅行（平成22・23年度）

〔調査協力〕

都農町教育委員会

宮崎県東九州自動車道用地事務所

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

木戸平第２遺跡の所在する都農町は、宮崎県東部に位置し宮崎平野の北縁部にあたる。

その地勢は、町西部の尾鈴山系から派生する山塊や丘陵が東の海岸部に向けて展開しており、西側より山岳部、山麓部と平野部に区分できる。その尾鈴山系から発する名貫川・都農川・心見(征矢原)川の３河川は、山麓部や平野部を南北に分断する地形を形成する。

日向灘に面する海岸部は、南北に直線的な海浜がひろがり、沖積層に尾鈴山溶結凝灰岩の円礫が堆積する。

木戸平第２遺跡は、都農町西部に広がる尾鈴山山系の一つ、荒崎山の北麓に位置する。遺跡の北側は、荒崎山と戸矢山山塊を分かつように東流する都農川に面している。遺跡より東側は急に開けた地形となり、緩やかな下り勾配のまま都農町中心部の沖積地に至る。

遺跡周辺の地質的特徴は、開析扇状地と河岸段丘面の織りなす重層さである。遺跡の位置する荒崎山山麓には、開析谷による扇状地が点在しており、扇状地が河川によってさらに開析され数段の河岸段丘面が形成されている。こうした扇状地末端の湧水点付近や河岸段丘面上に遺跡は立地している。

第２節　歴史的環境

木戸平第１・２遺跡では、弥生時代後期末葉を中心とする甕と壺が明治44年に出土したという。出土場所と詳細は不明だが、遺物は都農神社に保管されており、都農町教育委員会によって図化・公表されている。

木戸平第２遺跡を含めて、昭和62年度に都農町教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査により多くの遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地となっている（第１図)。ただ、表面採集資料と数箇所の発掘調査に留まっていたため、各遺跡の具体的な詳細は不明な部分が多い。

平成20年度から始まった東九州自動車道建設に伴う面的な発掘調査により、路線部分に限定されるにせよ、遺跡の調査とその成果は着実に増えている。

今回の調査では、後期旧石器時代・縄文時代早期・弥生時代後期の遺構と遺物が確認された。ここで関連する周辺の遺跡について簡単であるがまとめておく。

後期旧石器時代

東九州自動車道建設に伴う発掘調査によって調査例が飛躍的に増加している。木戸平第２遺跡の南側、約３kmに位置する俵石第１遺跡では、ＡＴ下位と上位からナイフ形石器や剥片尖頭器と礫群が多数確認された。細石刃文化期の存在も確認されている。その周辺にある立野第５遺跡では、ＡＴ直下より環状ブロック群の可能性のある遺物集中区の検出例が報告された。

縄文時代早期

標高20m以上を測る開析谷を形成する河川や、その支流に面した台地上に立地する傾向がある。都農町内の代表的な遺跡として、竜ヶ平第１遺跡、舟川中原遺跡、黒石遺跡、白水遺跡などがあり、押型文・貝殻条痕文土器や打製石鏃と集石遺構が調査されている。近年では、朝草原遺跡や尾立第２遺跡等で尖底の無文土器の出土例が増加している。

弥生時代後期

都農町内では、後期初頭の又猪原遺跡や森遺跡、後期後半の境ヶ谷第１遺跡、後期後半～古墳時代初頭の新別府下原遺跡や尾立第２遺跡が挙げられる。

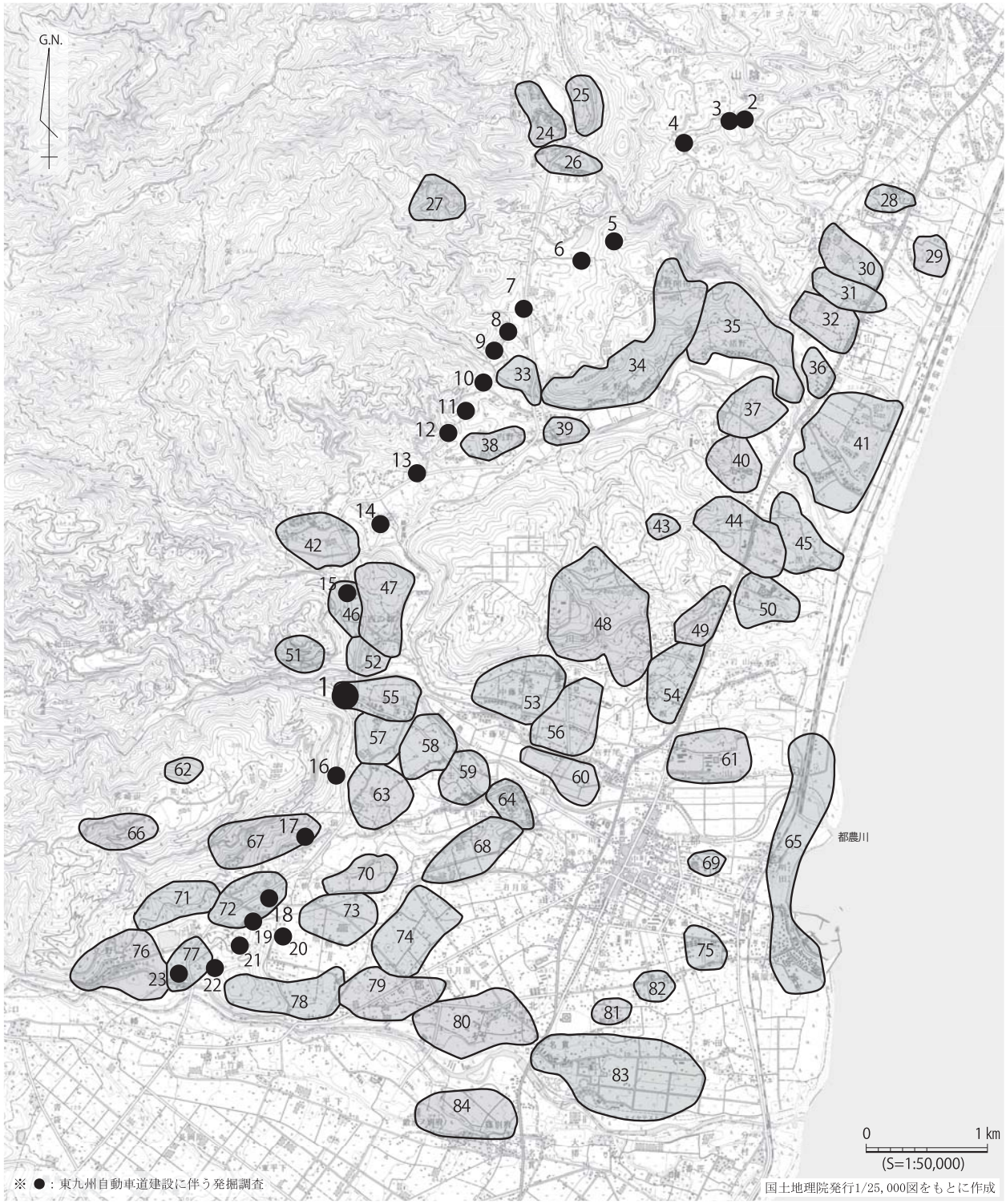
森遺跡では、竪穴建物跡に伴って須玖式系壺や瀬戸内系高坏が出土しており、往時の交流の一端が伺える。

境ヶ谷第１遺跡では竪穴建物跡２軒と周溝状遺構１基が検出され、鉄器も出土した。新別府下原遺跡では、竪穴建物跡７軒と周溝状遺構３基および土坑４基が調査され、遺構群中から集落の一単位が認定された。

尾立第２遺跡では「水穴」の可能性がある陥没坑に一括投棄された弥生土器の甕と壺が調査されている。

【引用参考文献】

都農町教育委員会1983『都農町遺跡詳細分布調査報告書』
都農町1990『都農町史 通史編』
宮崎県埋蔵文化財センター2007「立野第2・第5遺跡」
『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第156集
宮崎県埋蔵文化財センター2008「尾立第２遺跡」
『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第169集
宮崎県埋蔵文化財センター2011「俵石第１遺跡」
『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第200集



1．木戸平第２遺跡　2．向原中尾第１遺跡　3．向原中尾第２遺跡　4．向原中尾第４遺跡　5．長野遺跡　6．舟川第２遺跡　7．舟川第３遺跡
8．舟川中原遺跡第１地点　9．舟川中原第２地点　10．内野々遺跡　11．内野々第２遺跡　12．内野々第３遺跡　13．内野々第４遺跡　14．平山下原遺跡
15．西ノ郡第２遺跡　16．木戸平第１遺跡　17．俵石第２遺跡　18．俵石第１遺跡　19．尾立第２遺跡　20．朝草原遺跡　21．尾立第３遺跡
22．立野第５遺跡　23．立野第２遺跡　24．上征矢原遺跡　25．東平遺跡　26．下征矢原遺跡　27．舟川尾立遺跡　28．中村遺跡
29．寺迫下原遺跡　30．宮川遺跡　31．山末大原第２遺跡　32．山末大原第１遺跡　33．舟川中原遺跡　34．長野遺跡　35．又猪野原遺跡
36．心見住還上遺跡　37．旧牧跡第２遺跡　38．内野遺跡　39．内野下原遺跡　40．旧牧跡第１遺跡　41．心見遺跡　42．平山遺跡
43．白石第２遺跡　44．白石第１遺跡　45．上黒萩遺跡　46．西ノ郡第２遺跡　47．西ノ郡第１遺跡　48．白水遺跡　49．境ヶ谷第２遺跡
50．久次牟田遺跡　51．井手ヶ平遺跡　52．川神田遺跡　53．京塚遺跡　54．境ヶ谷第１遺跡　55．木戸平第２遺跡　56．黒石遺跡
57．木戸平第１遺跡　58．上苽生遺跡　59．鹿牟田遺跡　60．師匠田遺跡　61．中原遺跡　62．苽生尾立第２遺跡　63．馬場口遺跡
64．鍛冶屋敷遺跡　65．都農古墳群　66．苽生尾立第１遺跡　67．俵石第２遺跡　68．中河原遺跡　69．森遺跡　70．湯牟田遺跡
71．尾立遺跡　72．俵石第１遺跡　73．朝草原遺跡　74．榎土手遺跡　75．福原尾遺跡　76．立野遺跡　77．竜ヶ平第２遺跡
78．竜ヶ平第１遺跡　79．下原遺跡　80．新別府川原遺跡　81．新別府遺跡　82．新別府肥遺跡　83．新別府下原遺跡　84．篠別府遺跡

第１図　　木戸平第２遺跡と周辺遺跡位置図

第Ⅲ章　調査の方法と経過

第１節　調査の概要

木戸平第２遺跡は、調査対象面積11,300㎡を測る。本センターは平成20年度から平成22年度までに第１次調査から第４次調査までを行い、東九州自動車道建設に伴う発掘調査を終了した。調査は用地の引渡しが終了した箇所からA～F区に区分し行った（第3図）。

第１次調査　平成21年1月6日～1月14日にA1区・B1区・F3区の一部、面積2,170㎡を対象にトレンチ調査（第２図）を人力で行った。この結果、A1区では遺構や遺物は確認されず、B1区でも遺物包含層は確認できなかった。F3区では遺構は検出されなかったものの土器片が多数出土した。また、隣接する北側の水田においても土器片が多く採集され、Ｆ3区は改めて調査をする必要が生じた。

第２次調査　平成21年7月13日～９月２日に遺跡南側部分A2区・B2区C・D・E区の面積8,200㎡を対象に760㎡のトレンチ調査を実施した。

A2区では、15箇所にトレンチを設定し掘削した。この調査ではⅠ層～Ⅳ層で遺構や遺物は確認されなかった。しかし直下のⅤ層～Ⅶ層で北側のトレンチを中心に、後期旧石器時代のナイフ形石器やスクレイパー、縄文時代早期の土器片などの遺物が出土した。

B2区では14箇所にトレンチを設定し調査を実施した。B2区の西側では直径30㎝以上の礫を含む厚い造成土がⅧ・Ⅸ層上面までを覆い、大幅な地形の改変を受けていた。一方東側では広い範囲でK-Ahを確認する事が出来、この上面で１号溝状遺構（SE1）が検出された（第３図）。この遺構はB区の中央付近を北側から南側へ向かい、中央付近で東へ折れて調査区端部近くで終束していた。SE1からは多数の弥生土器片が出土した。しかし、明治時代の銅板転写茶碗や瓦も出土した。このことから近代の遺構であると考えられる。

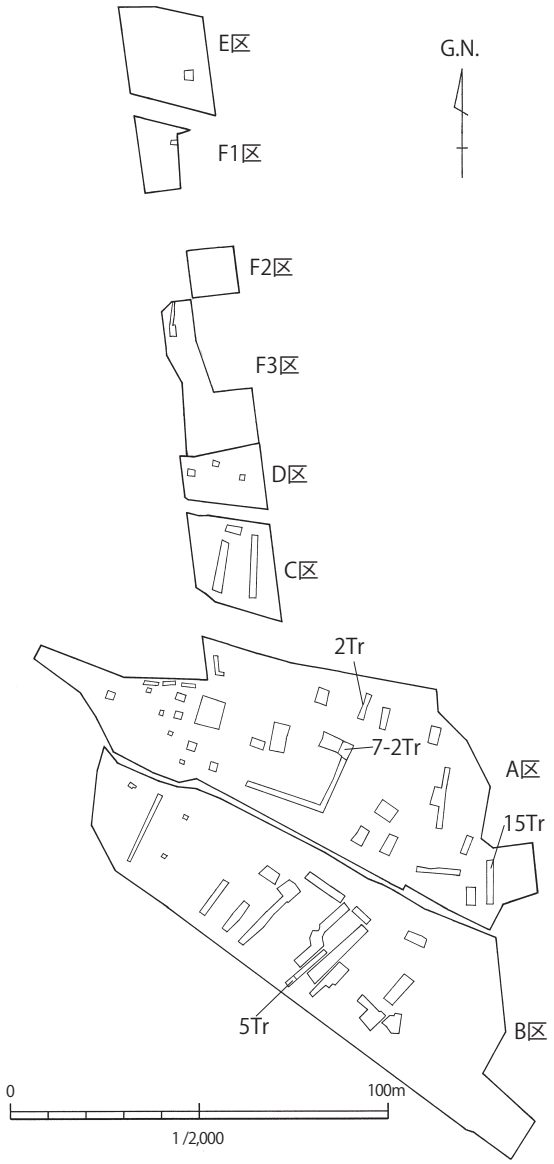
Ｃ～E区は、橋脚及び工事用道路削平部分についてトレンチ調査を行った。しかし、遺構や遺物を確認する事は出来なかった。

第２次調査の結果、A2区の北側部分は、改めて調査をする必要が生じた。

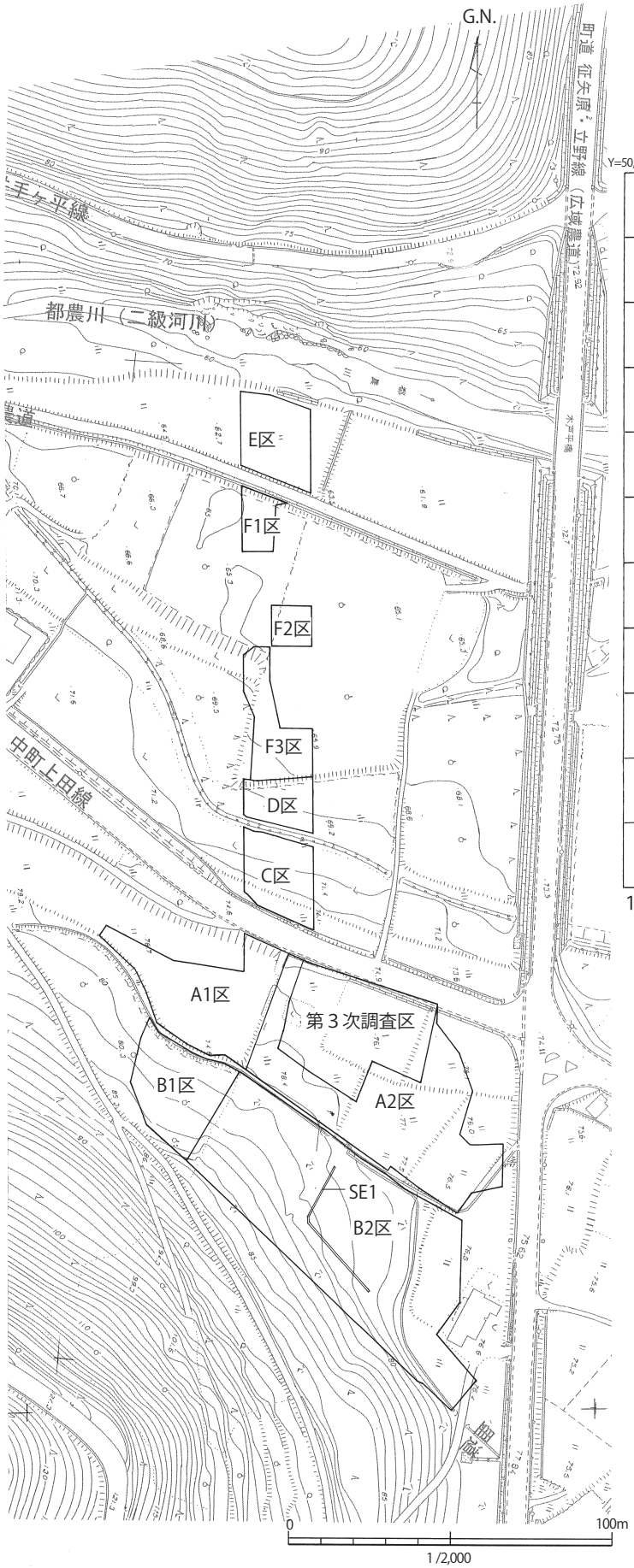
第３次調査　A2区の一部1,280㎡を平成21年10月13日～平成22年１月18日に行った。グリッド杭は国土座標を基準とし10m間隔で設置した（第4-2図）。

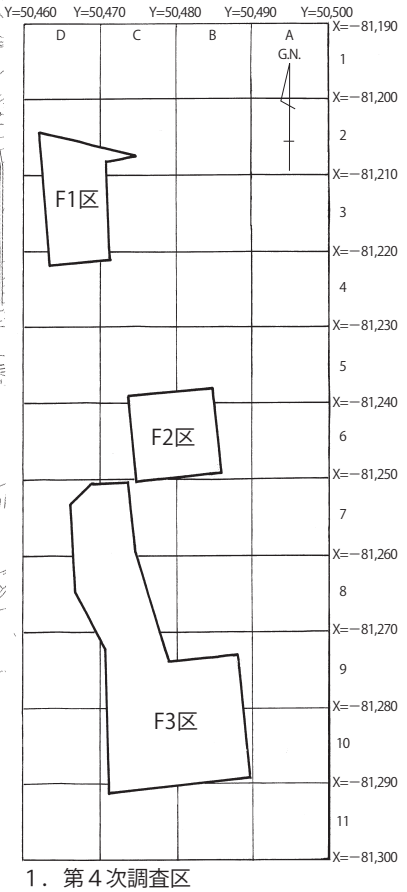
調査では重機を用いて表土除去を行った。この後、Ⅴ層上面を精査し遺構検出を行ったところ、竪穴建物跡１軒を検出した。その後、Ⅴ層からⅦ層まで掘削を行った。この結果、後期旧石器時代から縄文時代早期の遺物が出土し、また、後期旧石器時代の礫群を４基検出した。

第４次調査　平成22年10月18日～平成23年1月31日までの間、遺跡北側部分のF区800㎡を対象に行った。

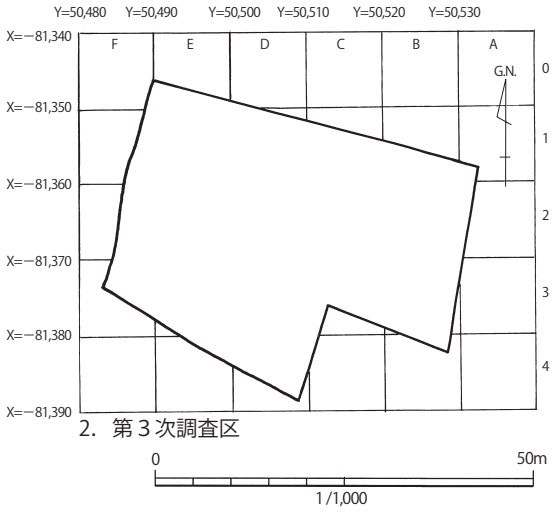


第２図　　トレンチ配置図





1．第４次調査区



2．第３次調査区

第３図　　周辺地形・区割り図

第４図　　第３・４次調査区グリッド配置図

F区は橋脚及び工事用道路による削平部分にあたり、現況は平坦な水田と果樹園、それより約4m高い段丘面からなっていた。調査地が３区分されていることから、北側からF1・F2・F3区とし、グリッド杭は国土座標を基準に10m間隔で設置した（第4-1図）。

F2区全体とF3区の平坦部分と斜面部分では圃場整備に伴う大きな地形の改変が行われており、遺構の検出は出来なかった。このためF1区とF3区の段丘面を中心に調査を行った。この調査で縄文時代の遺物をはじめ、弥生時代の竪穴建物跡４軒と土坑墓１基、土坑５基を検出し、これらに伴う遺物が多数出土した。また、F2・F3区の造成土の中には旧石器時代から弥生時代までの遺物が含まれており、多数回収するに至った。

遺構等の記録は、現地において実測図と写真で行った。また一部の遺物は光波トランシットで位置と標高を記録した。遺構実測図は1/10・1/20を基本に作成した。写真は中判カメラ（6×7㎜）と35㎜カメラでモノクロームとリバーサルの２種類のフィルムによる記録を中心に行い、随時デジタルカメラを併用して発掘作業細部の記録ができるよう努めた。また、遺跡の地理的状況や周辺自然環境を記録するため、空中写真撮影も実施した。

第２節　整理作業及び報告書作成

整理作業は埋蔵文化財センター本館で実施した。第１次～第３次調査分は平成22年２月～７月に、第４次調査分は平成23年２月～11月に行った。水洗・注記・計測・接合・実測・製図を経て平成23年11月に終了した。また、石器の実測については、剥離、調整が細かいもの、図化・製図に時間を要するものについては外部委託した。

第３節　教育普及活動

東九州自動車道建設に伴う発掘調査では、地域の貴重な埋蔵文化財を広く地域住民に還元するという観点から教育普及活動を行っている。本遺跡では平成22年11月11日（木）に宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校第１学年40名の発掘体験活動を行った。

第Ⅳ章　調査の記録

第１節　遺跡の基本層序

調査区は、南から北へ緩やかに傾斜する地形に位置し、標高差は約30m、延長は約300mの長い地形である。土層堆積状況は、調査区毎に細かい違いが見られたが、本遺跡の基本層序はおおむね第１表のとおりである。

土層図作成箇所は第５図に示したF1区の東西壁・南北壁、第６図に示した第３次調査区の東西壁・南北壁である。

遺跡全体は近年まで畑・水田・果樹園に利用されておりⅠ層は全体的にしまりのない表土・耕作土である。

Ⅱ層は造成土である。A2区では水田を造成する際に南側の高い箇所から、北側の低い箇所に向けてⅣ層を切り取り、盛り土を行ったとみられる箇所があった。F1区においても同様に水田を造成してありⅡ層でアカホヤ火山灰（K-Ah）が多く混じる造成土が確認された。

Ⅲ層はクロボクに相当する黒色土層で遺物包含層である。F1区では良好に堆積していた。

Ⅳ層はアカホヤ火山灰（K-Ａｈ）層である。A1･2区、B2区、C・D区、F1・F3区で堆積がみられた。第３次調査区とF1区では特に良好な堆積で70㎝を測る箇所もあった。

Ⅴ層は黒褐色土層で遺物包含層である。堆積状況に違いがあった為３つに細分した。Ⅳ層が残存している箇所の殆どで確認できた。

Ⅵ層は暗褐色土層で遺物包含層である。調査区全体でみると感触に違いがあり細分が必要となった。

Ⅶ層は暗褐色土層である。主にA2区で確認した。第３次調査区では遺物包含層である。

Ⅷ層は黒褐色土層でしまりのある層である。

Ⅸa層はAT（姶良Tn火山灰）層である。A2区のほぼ中央にあたる位置から僅かな面積で検出され、遺跡全体には堆積が確認されなかった。

Ⅸb層はATの混じる層である。

Ⅹ層はしまりの強い粘質土でMB2相当層である。

Ⅺ層は水分を多く含む粘性の強い層である。

Ⅻ層は50㎜以上の礫を多く含む層で地山となる。

第１表　基本層序

№.	特　　徴
Ⅰ	表土および現代の耕作土
Ⅱ	造成土
Ⅲ	黒色土層（10YR1/2）　遺物包含層 クロボク相当層　しまりが弱くサラサラとした細粒砂質土
Ⅳ	橙色土層（7.5YR6/8） 粘性なし　アカホヤ火山灰(K-Ah)堆積
Ⅴa	黒色土層（10YR1.7/1）　遺物包含層 しまりがやや弱い粘質土　MB0相当層
Ⅴb	黒褐色土層（10YR2/2）　遺物包含層 砂質土　しまりあり 1㎜程の小粒を僅かに含む MB0相当層
Ⅴc	黒褐色土層（10YR2/2）　遺物包含層 砂質土　しまりあり1㎜以下の白粒が混じる MB0相当層
Ⅵa	暗褐色土層（7.5YR3/3）　遺物包含層 粘質土　しまりが強く、ぼそぼそした感触
Ⅵb	暗褐色土層（7.5YR3/3）　遺物包含層 粘質土　Ⅵaよりしまりが弱く、粘性が強い
Ⅵc	暗褐色土層（10YR3/3）　遺物包含層 粘質土　しまりあり　１～2㎜の橙色ブロックを含む
Ⅶa	暗赤褐色土層（5YR3/3）　遺物包含層 粘質土　ブロック状に黒褐色土を含む
Ⅶb	褐色土層（7.5YR4/5）　遺物包含層 粘質土　しまりあり　3㎜程度のAT粒を含む
Ⅷ	黒褐色土層（10YR2/3） 砂質土　しまりあり１㎜以下の白色粒を含む ML2相当層
Ⅸa	黄褐色土層（10YR5/8） 姶良Tn火山灰（AT）相当層　１㎜程度の白色粒を含む
Ⅸb	にぶい黄褐色土層（10YR5/4） ATの混じる層　粘質土　しまりあり
Ⅹ	黒色土層（10YR 2/1） 粘質土　しまりが強い　MB2相当層
Ⅺ	明赤褐色土層（5YR5/6） 強い粘質土　15㎜程度の礫を含む
Ⅻ	明黄褐色土層（10YR6/8） 強い粘質土　50㎜以上の礫を含む地山

※東九州自動車道（都農～西都間）の調査では、宮崎平野部で認められるテフラやローム層、黒色帯に共通の略称を用いている。MB0やML2・MB2がこの略称にあたる。

第２節　石材分類について

出土した石器は表面の色調・手触り・風化の状況等から肉眼で分類した。粒子の相違などで、さらに細分出来るものもあるが10種類に分類した。石材の名称は以下のとおりである。

火成岩系

流紋岩　流紋岩は大まかに２つの種類がある。
黒褐色を呈し、縞模様が入る表面が緻密なもの。
灰白色を呈し、縞模様の入る表面が滑らかなもの。
新鮮面は黒色緻密である。

黒曜石　黒曜石は大まかに３つの種類がある。
黒色を呈し、気泡が見られるもの。日東産相当。
やや飴色を呈し、僅かに気泡が見られるもの。
上記に類さないもの。

安山岩　風化して灰白色を呈す。新鮮面は黒色緻密である。サヌカイトに類するものもある。

尾鈴山溶結凝灰岩　灰色、灰褐色を呈す。表面は１～２㎜の粒子で構成され手触りは粗い。おもに石英の粒を多く含むもの。

堆積岩系

頁岩　黒灰色を呈し、層状に剥離をするもの。ホルンフェルス化しているものもある。

珪質頁岩　黒褐色を呈し、表面は滑らかで緻密。縞模様が入るものもある。

チャート　微粒珪質堆積岩で様々な色がある。木戸平第２遺跡では主に白色系、黒色系、赤色系、緑色系があり無光沢のものも見られた。

水晶　石英の中で無色透明のもの。僅か１点の出土であったが石鏃に利用されていた。

砂岩　灰色を呈し、砂粒が含まれる砕屑性堆積岩。細粒のものもみられる。

変成岩系

ホルンフェルス　おおまかに２種類がある。
茶色を呈し、稜線も摩滅する程風化が著しく、手で触ると粉が付く状態のもの。
灰色から黒色を呈し、やや風化したもので表面が滑らかなもの。

第３節　後期旧石器時代の遺構と遺物

１　調査の概要

後期旧石器時代の遺構・遺物は第３次調査区を中心にⅥ層～Ⅶ層で確認した。第３次調査区は遺跡の南側にあり緩やかな斜面に位置し面積は1,280㎡を測る。遺構はⅦ層より礫群が４基検出された。礫群の他に遺構は検出されなかった。遺物はナイフ形石器、スクレイパー、剥片尖頭器、細石刃、細石刃核、石核、掻器、石刃、敲石、剥片である。

発掘調査中の遺物取り上げについては層位を認識して個別に取り上げたが、明確な基準でなく土質によるもので客観的材料ではない。このため報告書では、遺物の出土状況や特徴を考慮し後期旧石器時代を次のとおり２期に時代区分した。

Ⅰ期　ナイフ形石器を有する後期旧石器時代

Ⅱ期　細石刃石器を有する後期旧石器時代

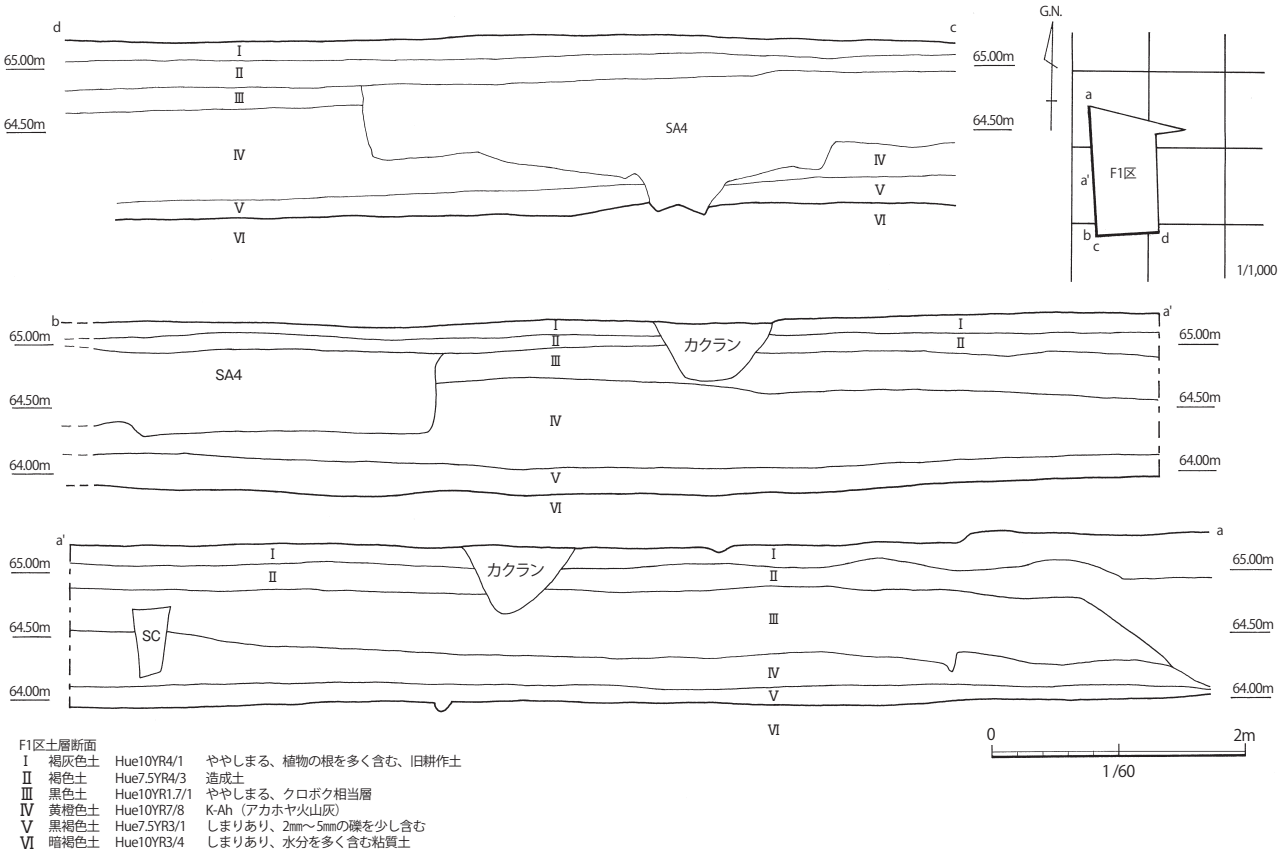
なお、調査中Ⅶ層の遺物として取り上げたものの中には整理作業中に細石刃､細石刃核としたものがあり、これらはⅡ期の時代として報告する。

２ 後期旧石器時代Ⅰ期の遺構

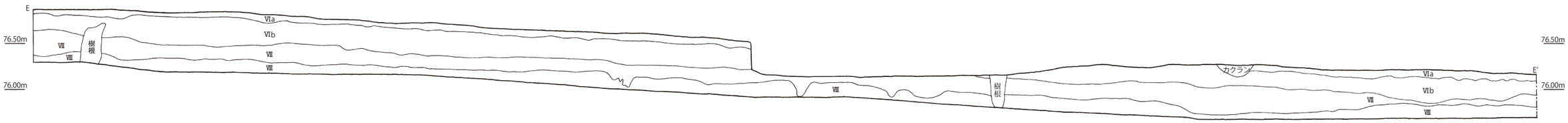
礫群（ＳⅠ）概要（第7図）

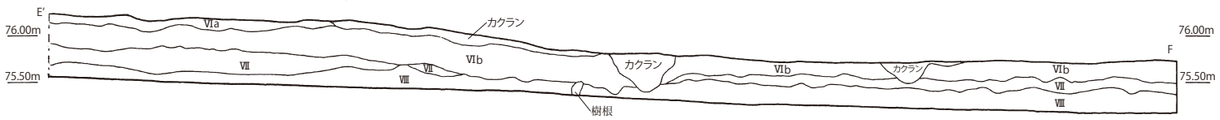
第３次調査区において、礫群が４基（ＳⅠ１～４）検出された。いずれも検出面はⅦ層である。分布は、Ａ区の南西側に集中しており、４基とも共通して、ほぼ平坦面に形成されており、掘り込みはみられない。礫の石材は尾鈴山溶結凝灰岩であり、配置は散漫である。また、大半の礫は赤化していたが、炭化材などはみられなかった。礫群の総重量は、14,000gであり、礫群単位点数は、５～11点であった。

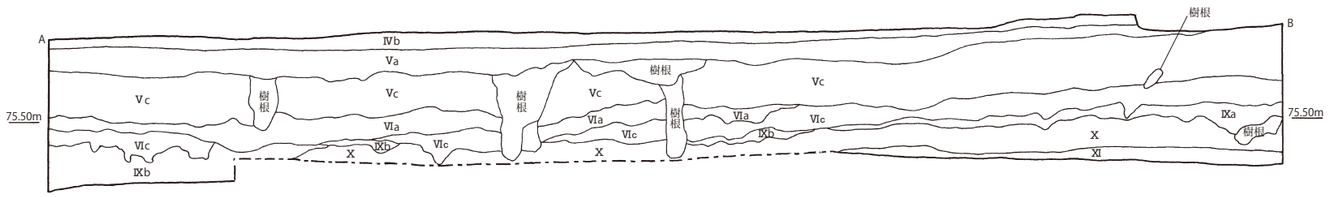
ＳⅠ１（第7-1図）　第３次調査区のほぼ中央部、やや南側に位置する。検出面はⅦ層であり、石材はすべて尾鈴山溶結凝灰岩である。検出時の地形において、尾根地形に該当する地点から検出された。礫は10㎝前後の大きさのものが５点と非常に少なく、そのうち４点は分布範囲北側から比較的まとまって検出され、そこから0.5mほど南側に離れた位置で１点が検出されている。礫の総重量は2,205gを測り、礫１点あたり

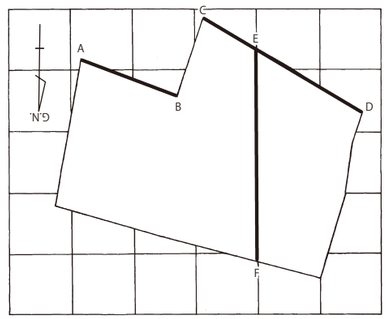


第５図　　F1区土層断面図



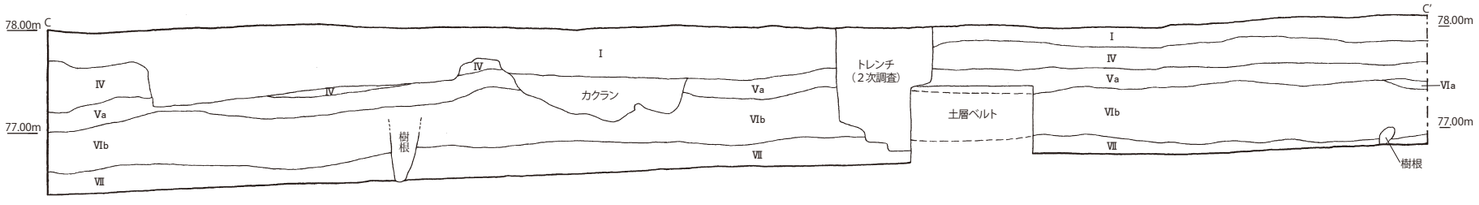


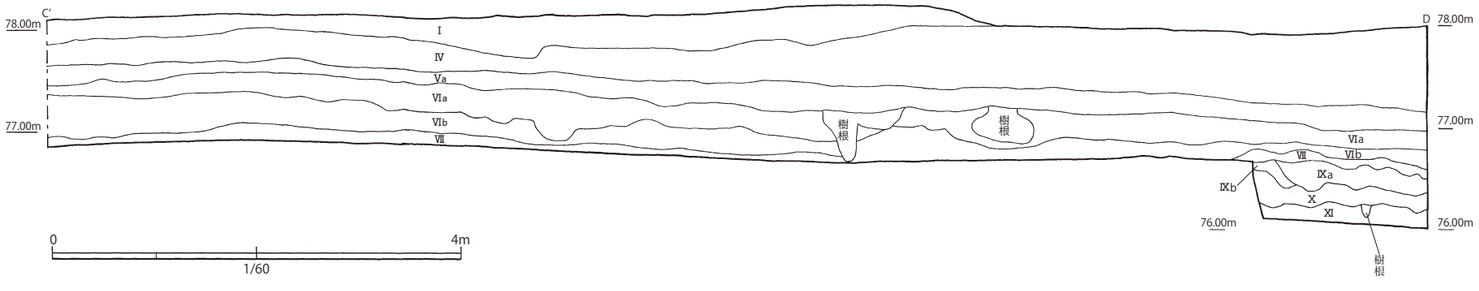




第 3 次調査区　南北土層断面 E ～ F

VIa	暗褐色土	Hue7.5YR3/3	しまり強い、粘質土。ぼそぼそした感触
VIb	暗褐色土	Hue7.5YR3/3	VIa よりしまりが弱く、粘性強い。
VII	暗赤褐色土	Hue5YR3/3	ブロック状に黒褐色土を含む。5mm 以下の角塊状構造。
VIII	黒褐色土	Hue10YR2/3	しまりあり、1mm 以下の白粒を含む砂質土

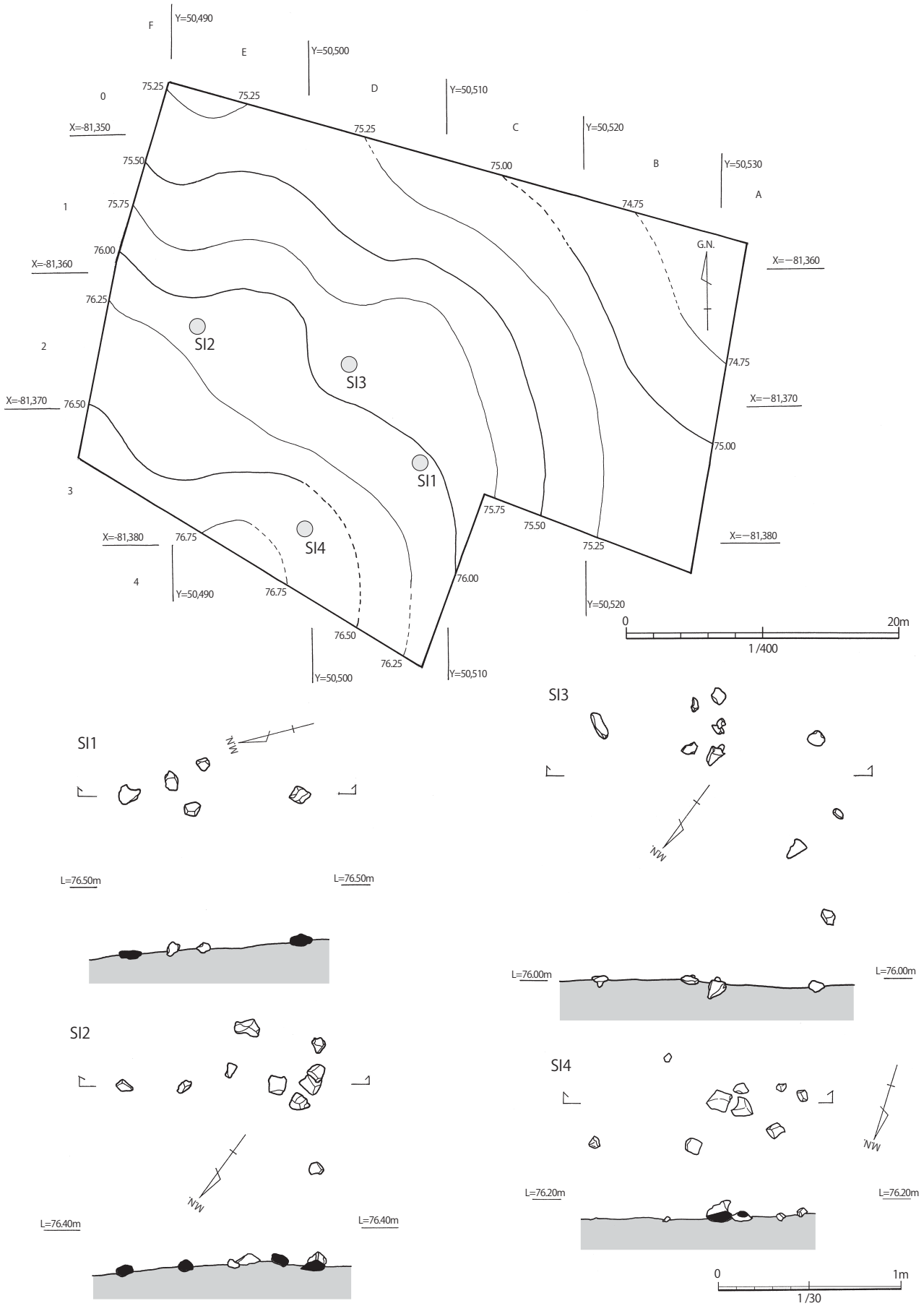




第 3 次調査区土層断面 A ～ B・C ～ D

I	表土		
IVb	明褐色	Hue7.5YR5/8	50% 程 Va 層が混じる、K-Ah 相当層。
Va	黒色土	Hue10YR1.7/1	しまり弱い、砂質土、MB0 相当層。
Vc	黒褐色土	Hue10YR2/2	しまりあり、1mm 以下の白粒が混じる、MB0 相当層。
VIa	暗褐色土	Hue7.5YR3/3	しまり強い、粘質土。
VIb	暗褐色土	Hue7.5YR3/3	VIa よりしまり弱い、粘質土
VIc	暗褐色土	Hue10YR3/3	しまりあり、1 ～ 2mm の橙色ブロックを含む。
IXa	黄褐色土	Hue10YR5/8	しまり弱い、1mm 程度の白粒を含む、AT 相当層。
IXb	にぶい黄褐色土	Hue10YR5/4	しまりあり、粘質土、AT 混じる層
X	黒色土	Hue10YR2/1	しまり強い、粘質土。
XI	明赤褐色土	Hue5YR5/6	強い粘質土、15mm 程度の礫を含む。
XII	明黄褐色土	Hue10YR6/8	強い粘質土、50mm 程度の礫を含む。

第６図　　第３次調査区土層断面図



第７図　　後期旧石器時代Ⅰ期遺構分布図・実測図

の平均重量は440gである。礫の分布範囲は、長径約1.1m、短径約0.4m、分布状況は疎である。礫５点は全て赤化している。また、礫群内からの遺物は確認されなかった。礫群周辺からは剥片が数点見られたが礫群に伴う遺物であるかは不明である。

ＳＩ２（第7-2図） 第３次調査区の西側に位置する。検出面はⅦ層であり、礫石材はすべて尾鈴山溶結凝灰岩である。ＳＩ１と同様に、検出時の地形において、尾根に該当する地点から検出された。10㎝前後の礫10点で構成されており、分布範囲南西側に４点が密集し、そこから北東に向けて５点、北西に向けて１点が点在している。礫の総重量は4,990gを測り、礫１点当たりの平均重量は500gである。礫の分布範囲は、長径約1.2m、短径約0.9mであり、分布状況は疎である。礫は10点すべて赤化しているが、掘り込み、炭化物、遺物は確認されなかった。

ＳＩ３（第7-3図） 第３次調査区のほぼ中央部やや西側から検出され、ＳＩ１・ＳＩ２の間に位置する。検出面はⅦ層であり、礫石材はすべて尾鈴山溶結凝灰岩である。10㎝前後の礫11点で構成されているが、個々の礫の大きさはＳＩ１・ＳＩ２よりも一回り小さい。分布範囲中央付近に６点が密集しており、そこから西に向けて４点、北東に向けて１点が点在している。礫の総重量は3,365gを測り、礫１点当たりの平均重量は335gである。範囲は長径1.4m、短径1.3mで、分布状況は疎である。遺構内で比較的離れた位置にある２点の礫に接合関係がみられた。礫は11点すべてが赤化しているが、掘り込み、炭化物、遺物は確認されなかった。

ＳＩ４（第7-4図） 第３次調査区の南側から検出され、ＳＩ３の南側に位置する。検出面はⅦ層であり、礫石材はすべて尾鈴山溶結凝灰岩である。ＳＩ１・ＳＩ２と同様に、検出時の地形において、尾根に該当する地点から検出された。10㎝前後の礫９点で構成されているが、個々の礫の大きさにばらつきが多い。分布範囲中央の直径10㎝を超える大きさの礫２点を中心として、周辺に小さな礫が分布している。礫の総重量は3,445gを測り、礫１点当たりの平均重量は380gである。範囲は長径約0.9m、短径約0.6mで、分布状況は疎である。礫は７点が赤化しており、いずれも小型であった。また、他の礫群と同様、掘り込み、炭化物、遺物は確認されなかった。赤化していない２点の礫は赤化したものと比較して大型である。

第2表　後期旧石器時代Ⅰ期礫群計測表

No.	遺構	検出面	出土位置	礫群範囲（m）長径	× 短径	礫密度	石材	礫重量（kg）	礫個数
1	SI1	Ⅶ	D3Gr	1.1	0.4	疎	尾鈴山溶結凝灰岩	2.20	5
2	SI2	Ⅶ	E2Gr	1.2	0.9	疎	尾鈴山溶結凝灰岩	4.99	10
3	SI3	Ⅶ	D2Gr	1.4	1.3	疎	尾鈴山溶結凝灰岩	3.36	11
4	SI4	Ⅶ	E3Gr	0.9	0.6	疎	尾鈴山溶結凝灰岩	3.45	9

３　後期旧石器時代Ⅰ期の遺物

(a)石器出土状況

後期旧石器時代Ⅰ期の石器の出土点数は405 点である。石材毎の出土状況は次のとおりである。一部個別取り上げしていない遺物は分布図に反映していない。

流紋岩（第8図）

流紋岩製の石器が一番多く184点で、全体の45.4％出土した。調査区全体で出土しているが、D3グリッド（以下Gr）で集中箇所がみられC2・E2Gr周辺で多く出土している。接合資料が7点、ナイフ形石器が7点あり、石核は3点、石刃、掻器はそれぞれ1点出土した。

チャート（第9－1図）

チャート製の石器は35点で、全体の8.6％を占める。出土位置は比較的遺跡の南側であるが、分布密度は疎である。接合資料が２点、ナイフ形石器１点、スクレイパーが２点である。

ホルンフェルス（第9－2図）

ホルンフェルス製の石器は52点で、全体の12.8％を占める。剥片尖頭器が１点、スクレイパーが２点、石核が２点である。集中区や接合資料は無い。

頁岩（第9－3図）

頁岩製の石器は49点で、全体の12.1％を占める。接合資料が１点。C3Grの集中する箇所を中心に出土した。接合資料が１点、石核が１点である。

珪質頁岩（第9－4図）

珪質頁岩製の石器は38点で全体の9.4％を占める。主に遺跡の西側に分布している。接合資料は１点、製品はナイフ形石器４点、石核２点である。

黒曜石（第9－5図）

黒曜石製の石器は18点、全体の4.4％を占め、調査区中央付近を中心に出土しており分布密度は疎である。産地別では、日東産が４点、その他の南九州産と思われるものが８点、産地不明のものが６点である。ナイフ形石器１点が出土した。

その他（第9－6図）

尾鈴山溶結凝灰岩の石器は全体の5.2％、21点が出土した。敲石が６点出土した。砂岩と安山岩（サヌカイト）は、それぞれが全体の１％、４点ずつ出土した。砂岩では敲石が２点出土した。

(b)接合資料分布状況　（第10図）

接合資料は全部で11点である。主に、第３次調査区の中央から東にかけてのD3Gr、C2Gr周辺の比較的遺物量が多い箇所に分布している。接合点数は最大11点から最小２点までである。石材では流紋岩が７点で最も多く、チャートが２点、頁岩と珪質頁岩が１点ずつである。スクレイパーや掻器などの製品に接合したものもある。なお、遺跡内で出土し接合したものの中で、剥離以外の折れ接合は資料に含めなかった。接合資料11点は全て図化し第14～17図に掲載した。

(c)後期旧石器時代Ⅰ期の石器と内容（第11～18図）

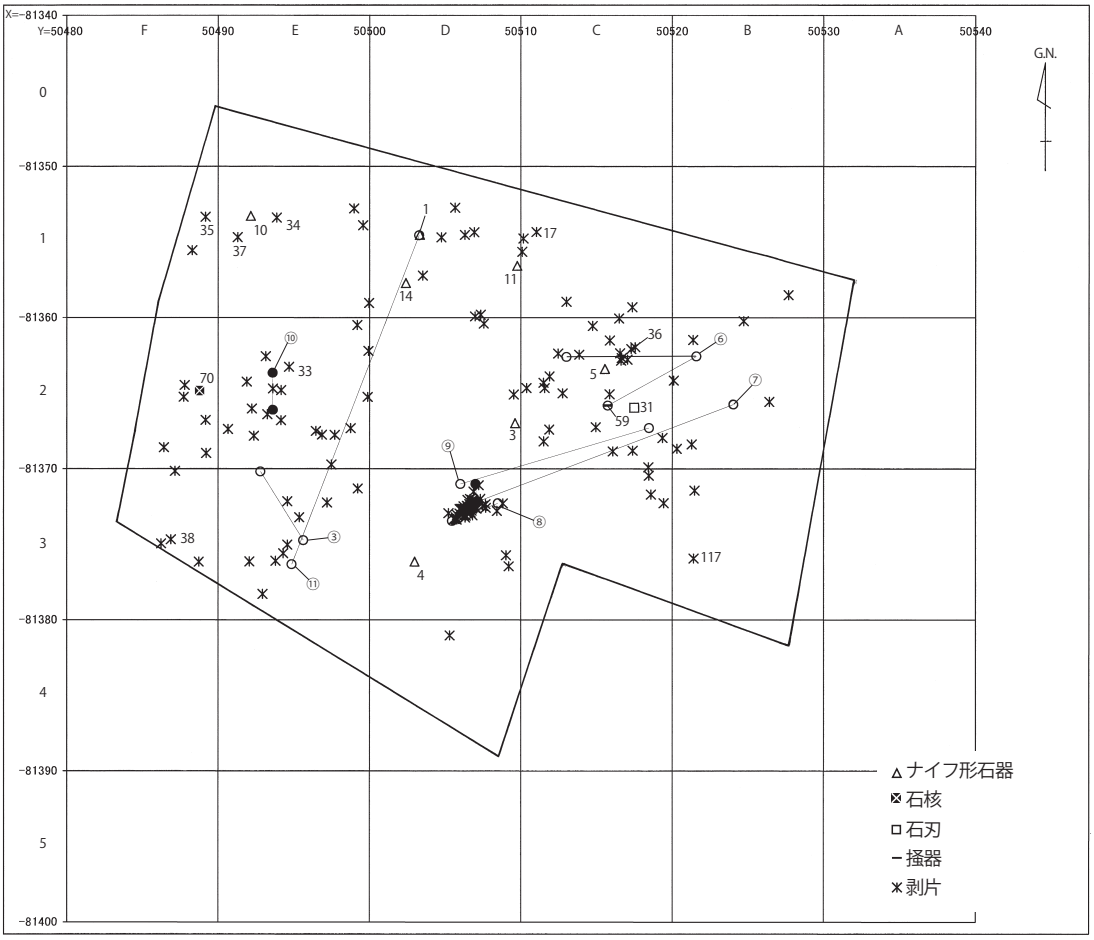
後期旧石器時代Ⅰ期から出土した遺物はナイフ形石器14点、剥片尖頭器１点、スクレイパー５点、石核８点、敲石10点、掻器１点、石刃３点、有底剥片６点、剥片364点である。

ナイフ形石器（第11図１～14）

ナイフ形石器は14点が出土し、全て図化した。これらは、製作方法の違いによって分類した。

１　１～５は一側縁加工ナイフ形石器である。４は右上半部を部分的に加工し、５は分厚い素材の左側面を大ぶりに加工したものである。

２　６～10は縦長剥片素材の、二側面にブランディングを施したもので二側縁加工ナイフ形石器である。



流紋岩

0　20m
1/500

第８図　　後期旧石器時代Ⅰ期石器分布図（１）

3　11・12は基部付近の両側縁にブランディングを施したもので基部加工ナイフ形石器である。

4　13・14は大きく欠損しており分類が困難である。

剥片尖頭器（第11図15）

1点が出土した。ホルンフェルス製で縦長剥片を利用している。基部調整を僅かに残すが風化が著しい。

スクレイパー（第12図16・18　第16図56）

4点が出土し3点を図化した。16、18の石材はホルンフェルスであり、特に16は風化が著しい。接合資料⑤の56はチャート製のスクレイパーである。

剥片（第12図17・19～23、 第13図24～29）

剥片は358点出土し、このうち12点を図化した。17は流紋岩製である。19・20は尾鈴山溶結凝灰岩製である。21は珪質頁岩製である。22・23はチャート製である。24は砂岩製である。Ⅵ層で取り上げたため後期旧石器時代の遺物として報告するが、粗製剥片石器であるので縄文時代の遺物である可能性が高い。25はホルンフェルス製であり風化が著しい。26～28はサヌカイト製である。29は黒曜石製である。折れた剥片2点が接合したものである。

石刃（第13図30～32）

3点出土したものを全て図化した。30・31は流紋岩、32は頁岩でいずれも縦長剥片素材の石刃である。

有底剥片（第13図33～38）

33～38は流紋岩製の有底剥片である。

接合資料①（第14図、第15図45～49）

剥片と石核が11点接合したものである。本遺跡の中で1番多く接合した。頁岩の礫を素材としており、一部自然面を残す。中央部分に空間があり、遺跡から出土していない。この部分に製作目的の剥片が存在した可能性が高い。風化が著しく石材同定が困難である。頁岩として報告するが、流紋岩である可能性もある。

接合資料②（第15図50・51）

石核と打面再生剥片の2点が接合したものである。石核の観察から51の剥片の剥離を含め3回の打面転移を行っている。珪質頁岩製で一部自然面を残す。

接合資料③（第15図52・53）

石核と剥片の2点が接合したものである。53は石核から目的とする剥片を得る為に、複数回剥離した中の1つである。流紋岩製である。

接合資料④（第16図54・55）

二次加工剥片と剥片が接合したものである。資料からは55を剥離した他に、2回の剥離を行っていることがわかる。チャート製である。

接合資料⑤（第16図56～57）

スクレイパーと頭部調整剥片2点が接合したものである。56は2点の折れ接合で形成されている。スクレイパーエッジを作製する工程で折れた可能性がある。チャート製である。

接合資料⑥（第16図59～61）

掻器と調整剥片2点が接合したものである。掻器に接合した2点の剥片はいずれも背面から剥離されている。流紋岩製である。

接合資料⑦（第16図62～64）

石核調整剥片の可能性がある剥片3点が接合した。62は有底剥片の可能性もある。流紋岩製である。

接合資料⑧（第16図65・66）

二次加工剥片に剥片が1点接合したものである。接合資料からは3回の剥片剥離を行っており、その最後に65を剥離したものである。66に二次加工を施した理由は不明である。流紋岩製である。

接合資料⑨（第17図67）

剥片2点が接合したものである。流紋岩製である。

接合資料⑩（第17図68）

有底剥片の可能性が高い2点が接合したものである。流紋岩製である。

接合資料⑪（第17図69）

石核に剥片が接合したものである。流紋岩製である。

石核（第17図70・71、第18図72）

70～72は石核である。70は流紋岩製、71はホルンフェルス製、72は珪質頁岩製である。

二次加工剥片（第18図73・74）

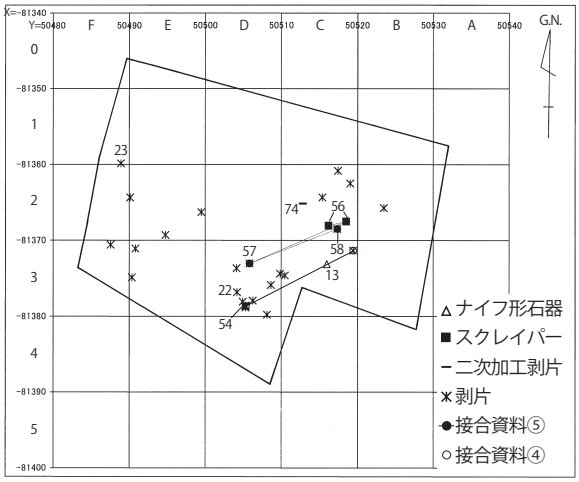
73は珪質頁岩製の二次加工剥片である。74はチャート製である。断面は三角形で一部礫面を残す。

敲石（第18図76～79）

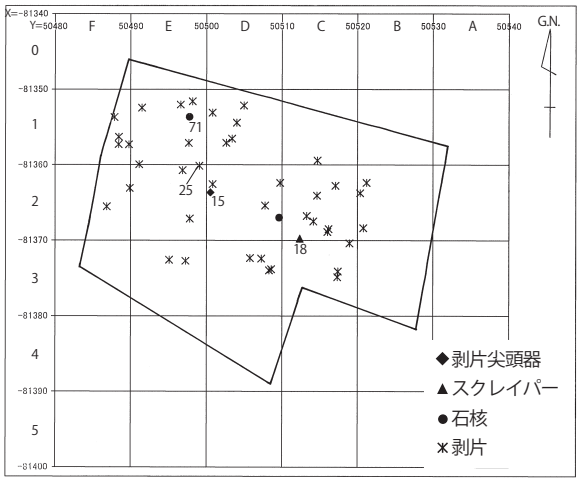
敲石は10点出土した。このうち4点を図化掲載した。76～79は敲石である。76・77・79の石材は尾鈴山溶結凝灰岩で、78は砂岩である。

包含層以外の遺物（第18図75）

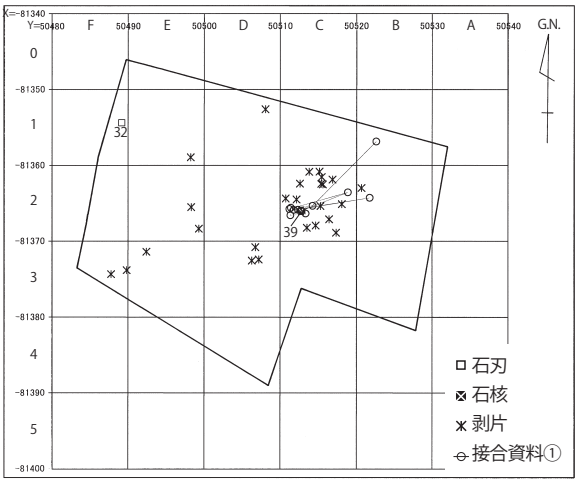
75はホルンフェルス製のスクレイパーである。



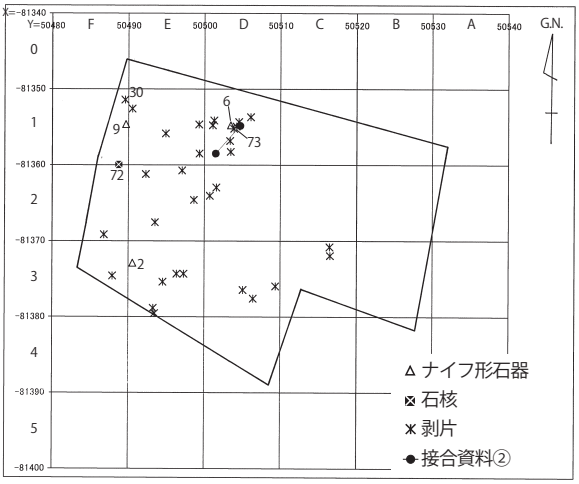
1　チャート



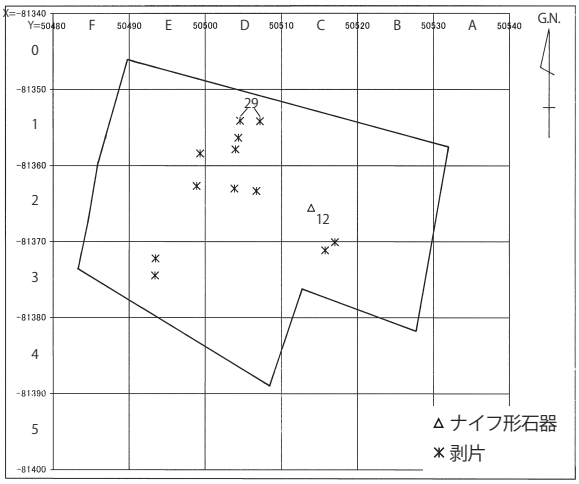
2　ホルンフェルス



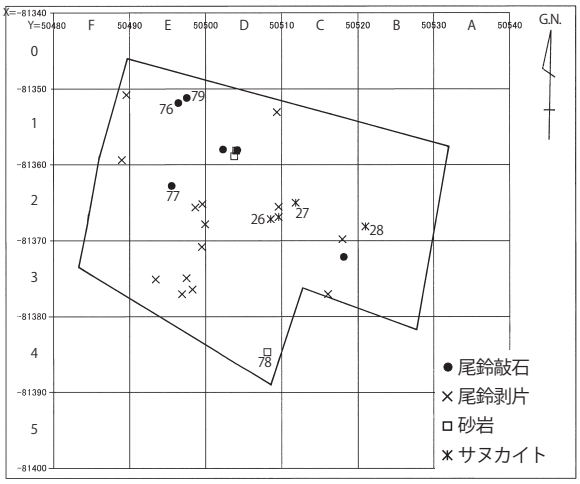
3　頁岩



4　珪質頁岩



5　黒曜石

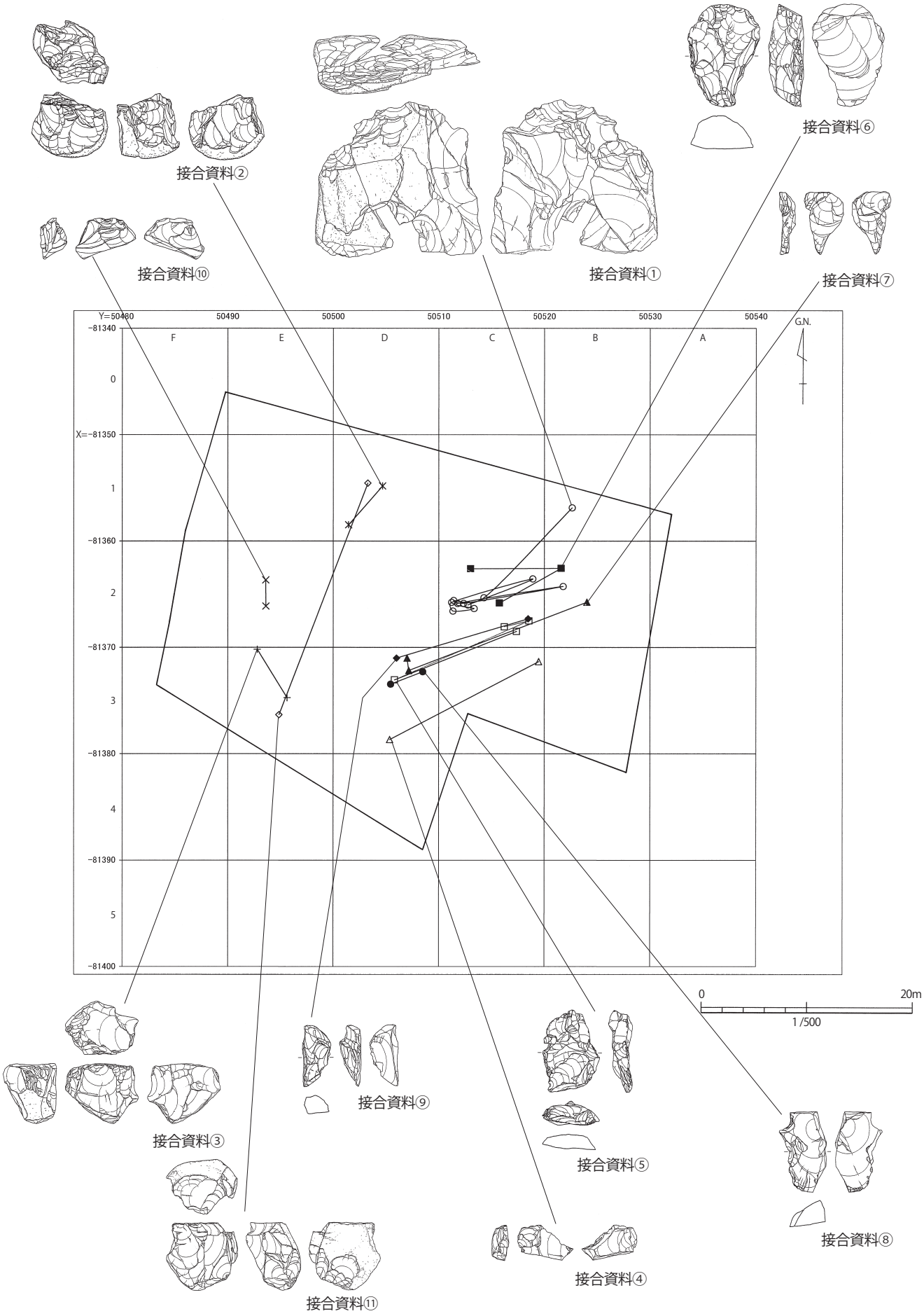


6　その他

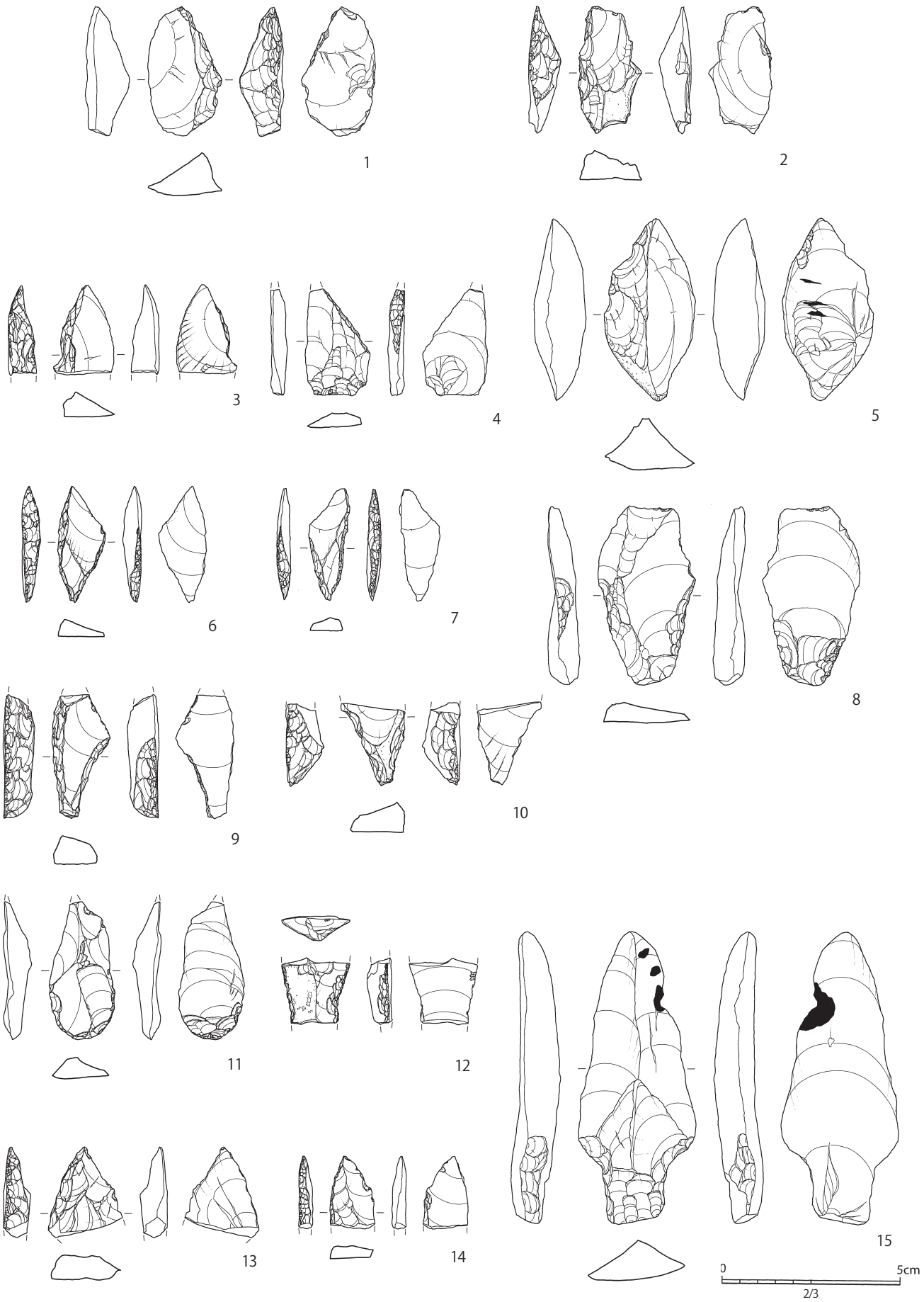
0　50m

1/1,000

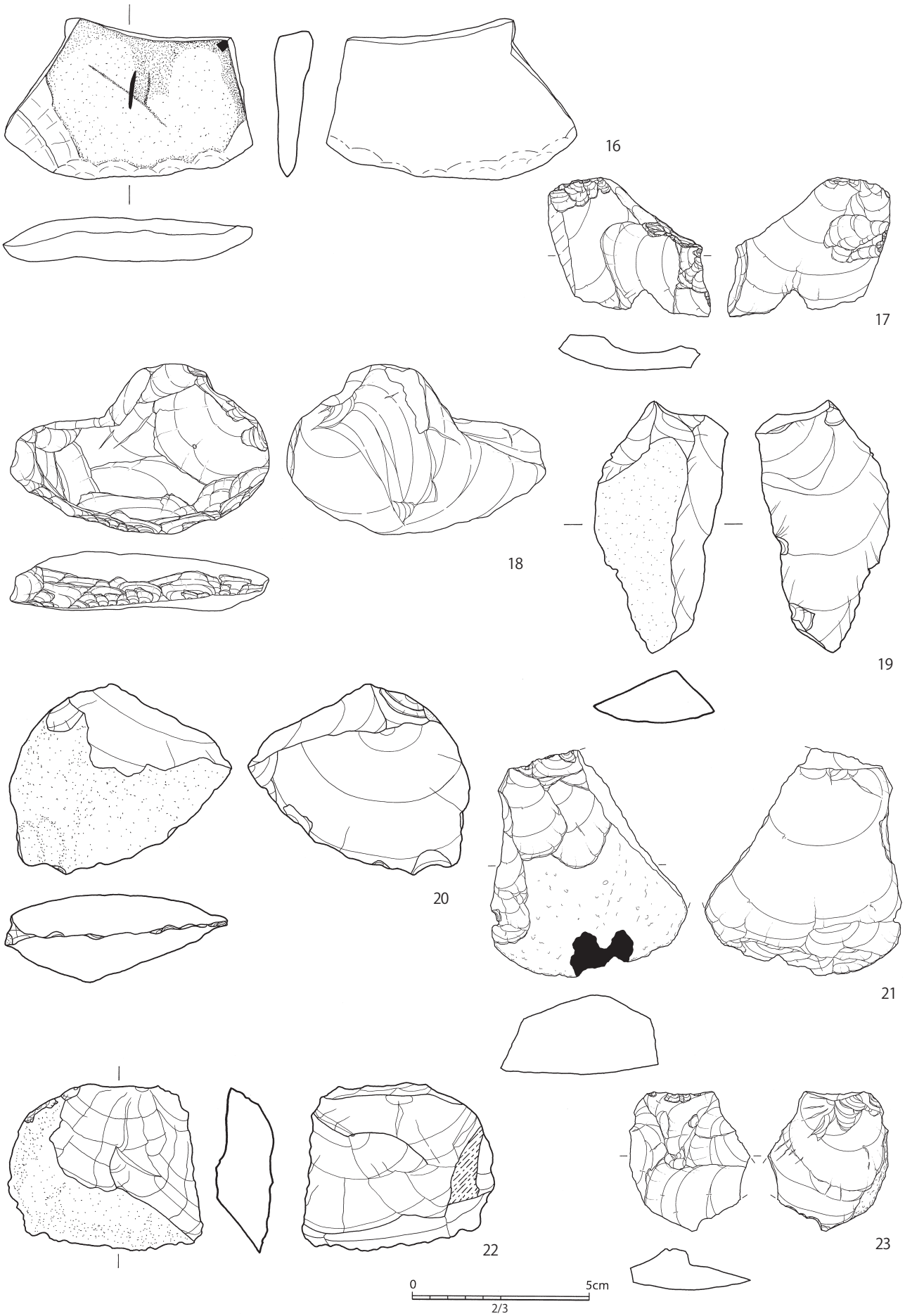
第９図　　後期旧石器時代Ｉ期石器分布図（２）



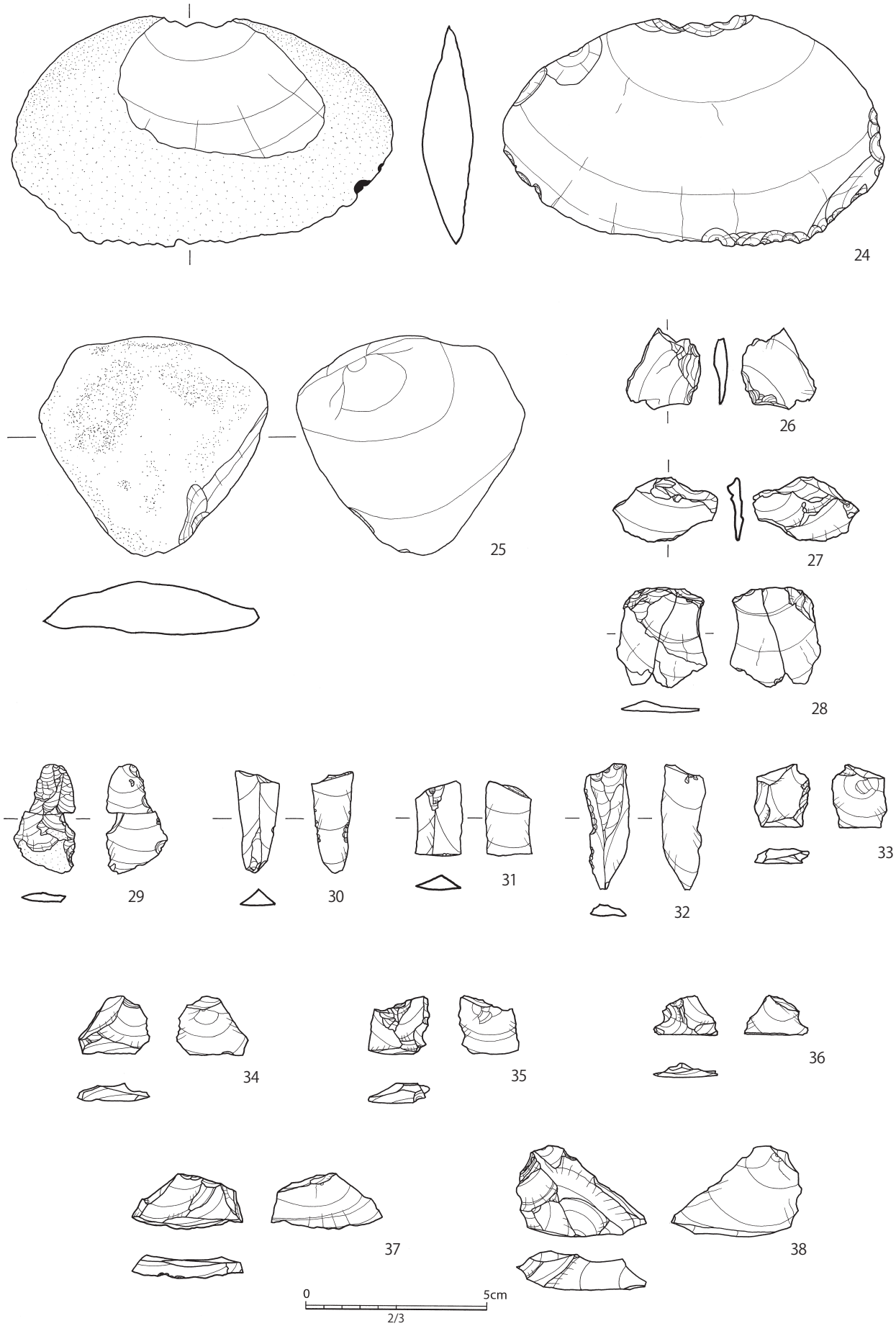
第10図　　後期旧石器時代Ⅰ期接合資料分布図



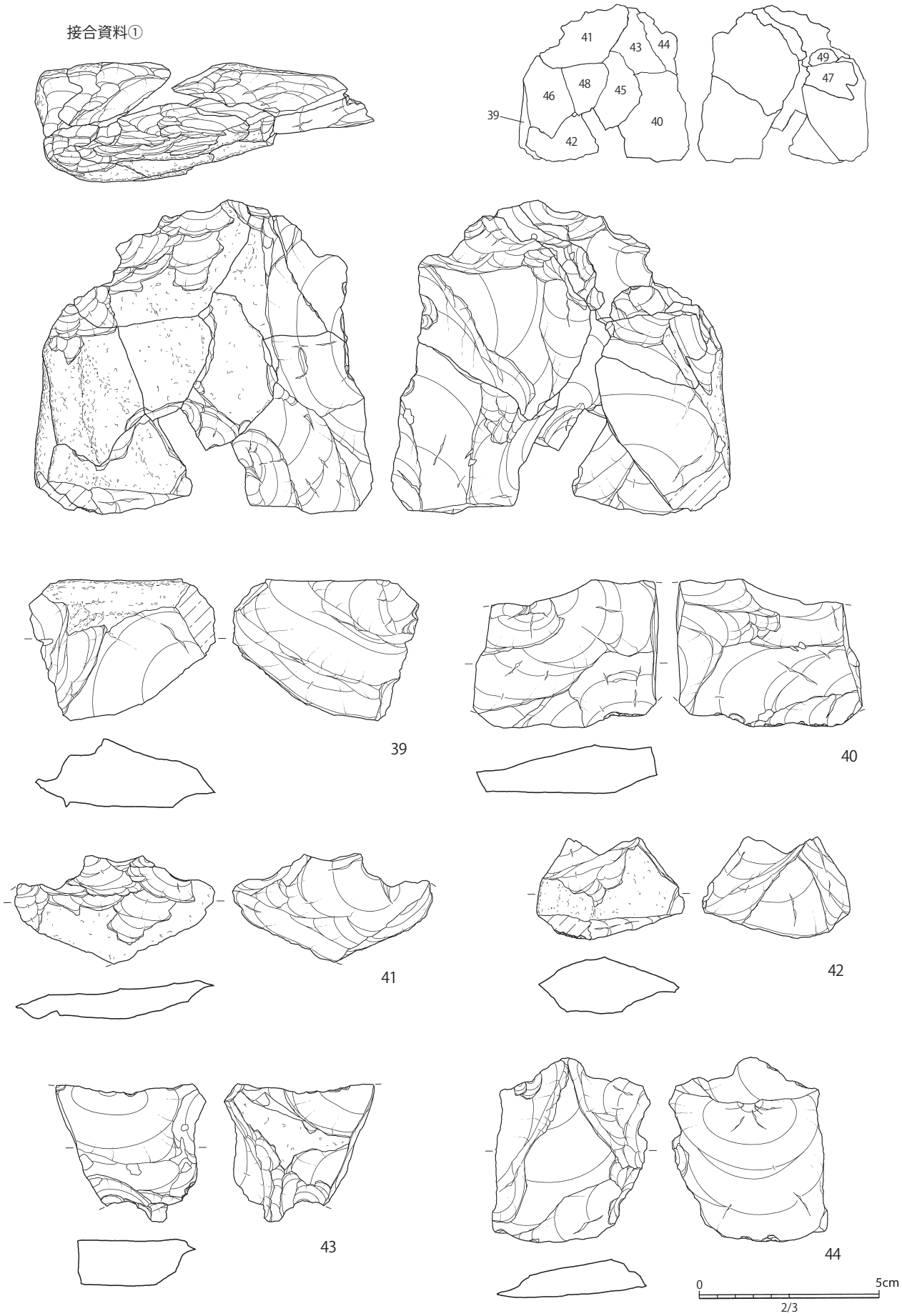
第11図　　後期旧石器時代Ⅰ期石器実測図（1）



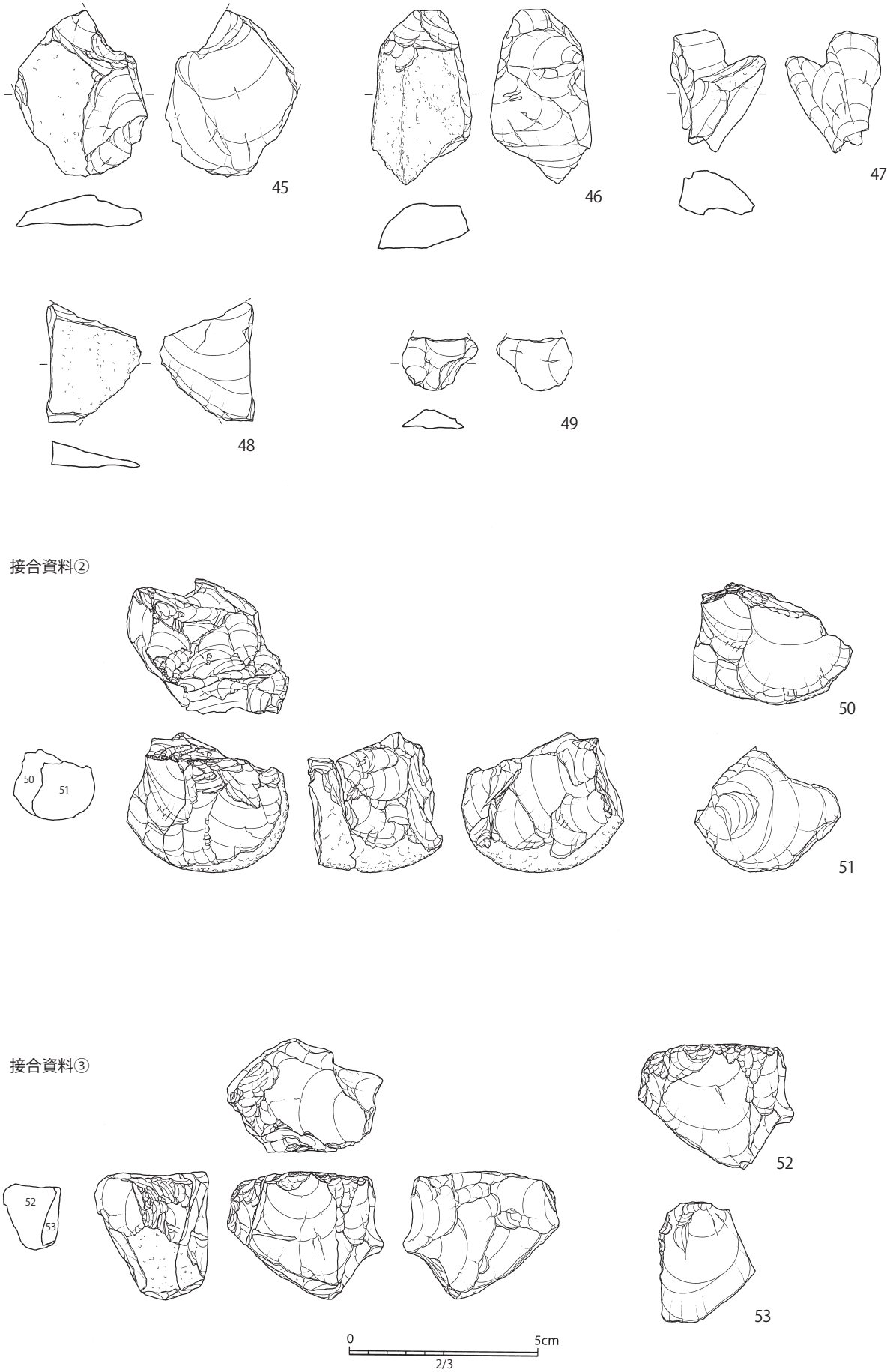
第12図　　後期旧石器時代Ⅰ期石器実測図（2）



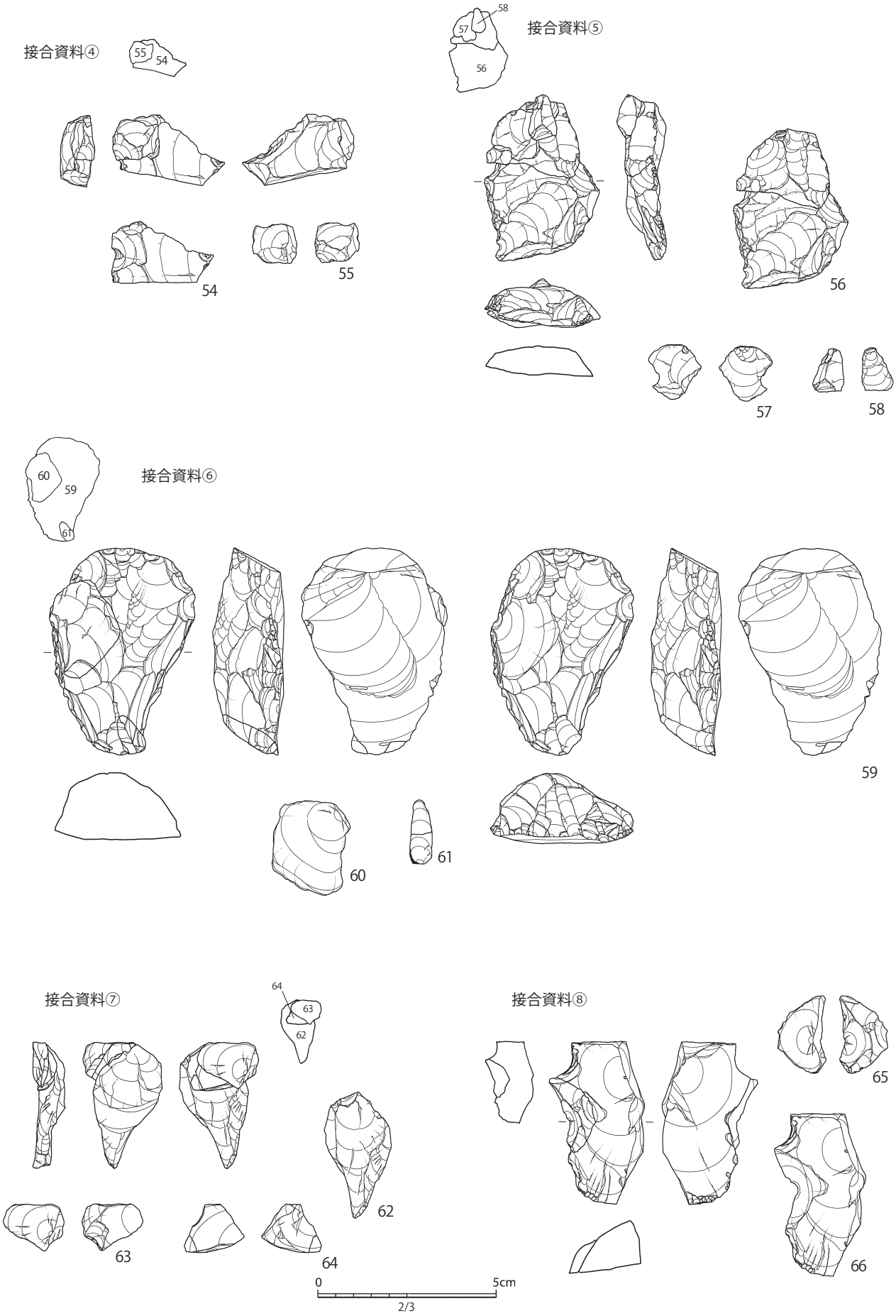
第13図　　後期旧石器時代Ⅰ期石器実測図（3）



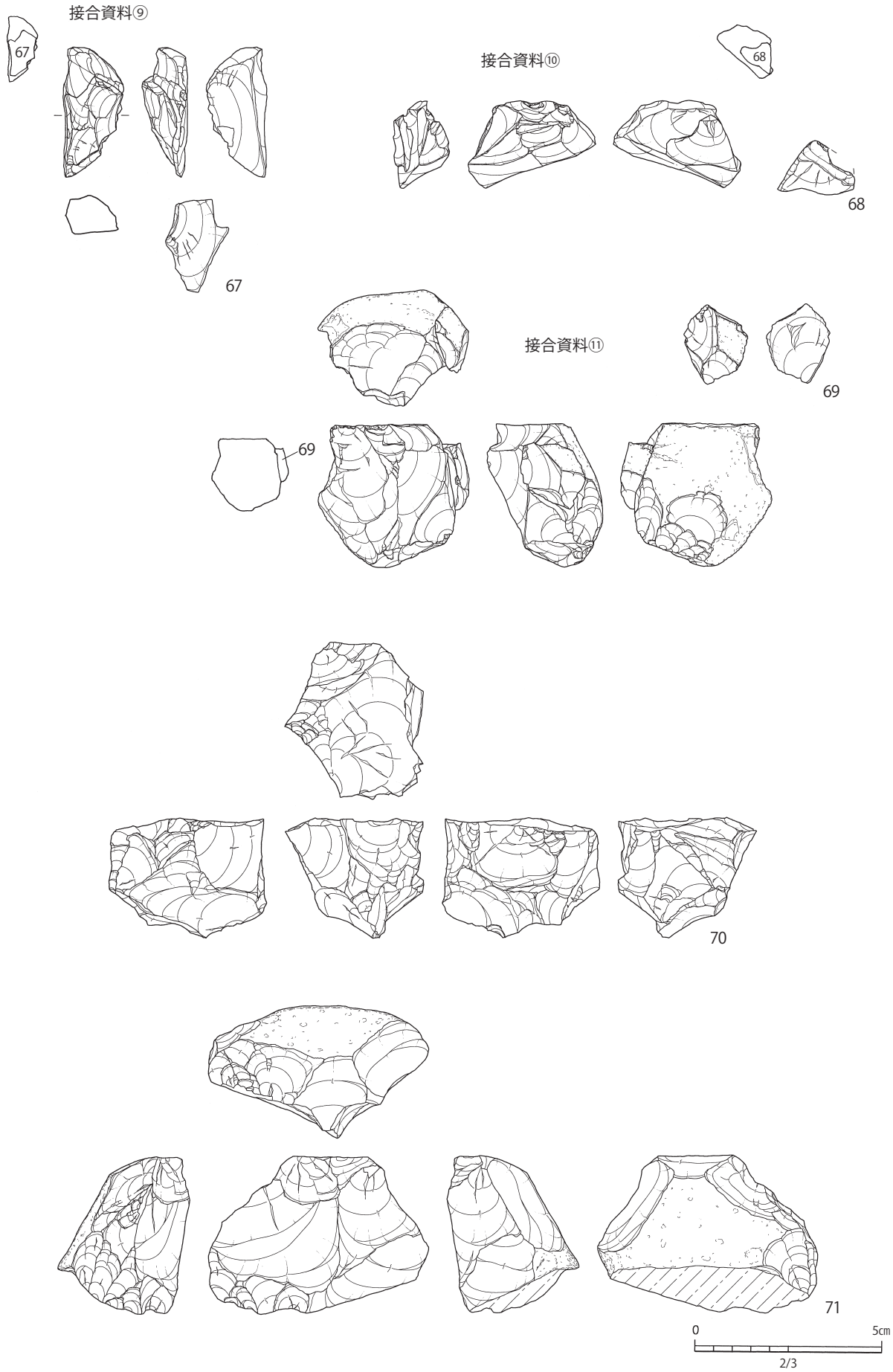
第14図　　後期旧石器時代Ⅰ期石器実測図（4）



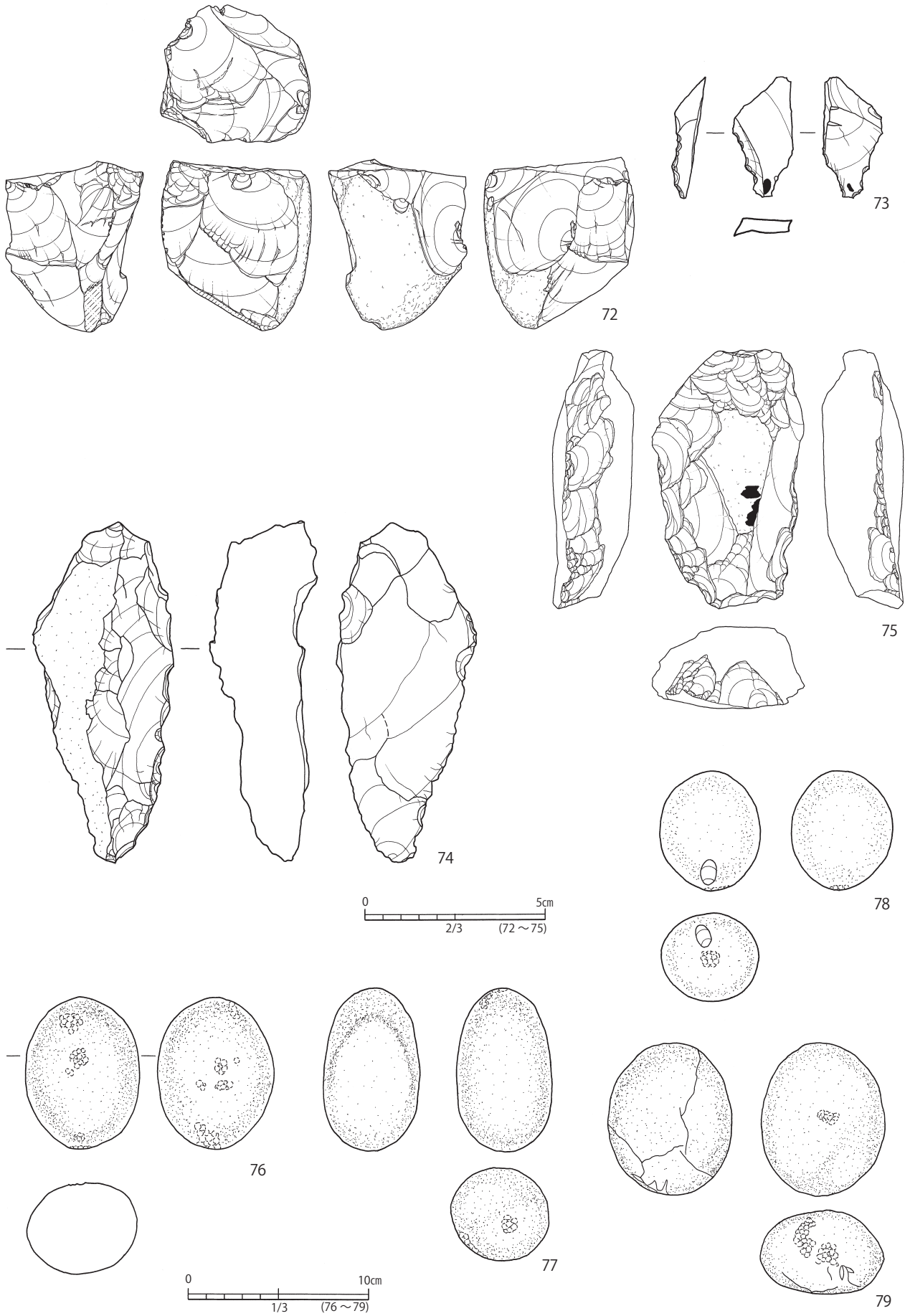
第15図　　後期旧石器時代Ⅰ期石器実測図（5）



第16図　　後期旧石器時代Ⅰ期石器実測図（6）



第17図　　後期旧石器時代Ⅰ期石器実測図（7）



第18図　　後期旧石器時代Ⅰ期石器実測図（8）

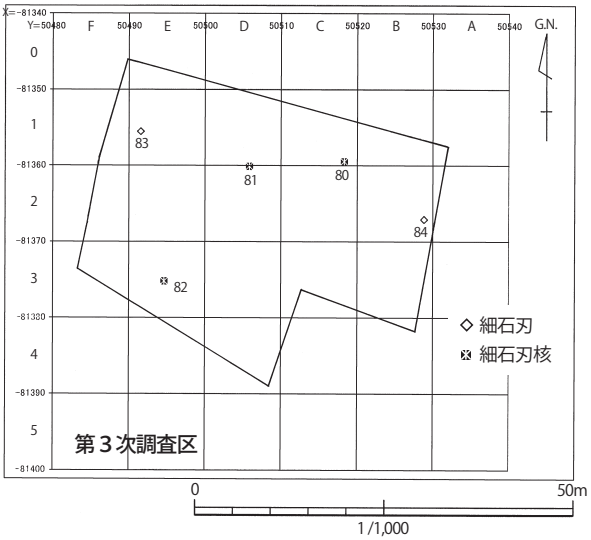
4　後期旧石器時代Ⅱ期の遺物

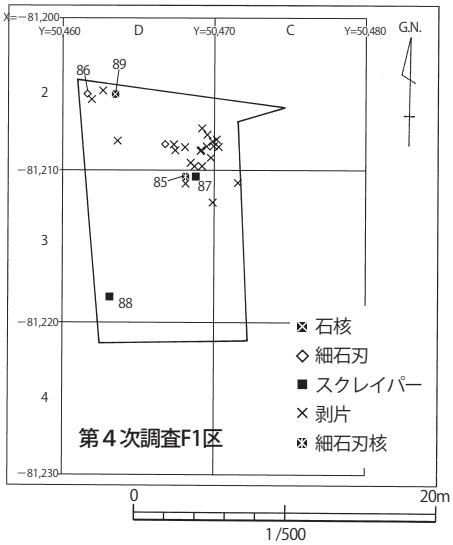
細石刃・細石刃核に伴う遺物を後期旧石器時代Ⅱ期として報告する。この時代の遺構は検出されなかった。また、第４次調査区のⅥ層から出土した黒曜石製の剥片・砕片は細石刃と同じ石材であり、出土状況や分布状況から後期旧石器時代Ⅱ期の遺物として報告する。

遺物は、第３次調査区から５点、第４次調査区から28点の合計33点が出土した。第３次調査区では細石刃と細石刃核が、第４次調査区では細石刃、細石刃核、スクレイパーが出土した。

(a)石器出土状況（第19図）

第３次調査区の遺物は細石刃１点、細石刃と思われるもの１点、細石刃核３点の５点である。





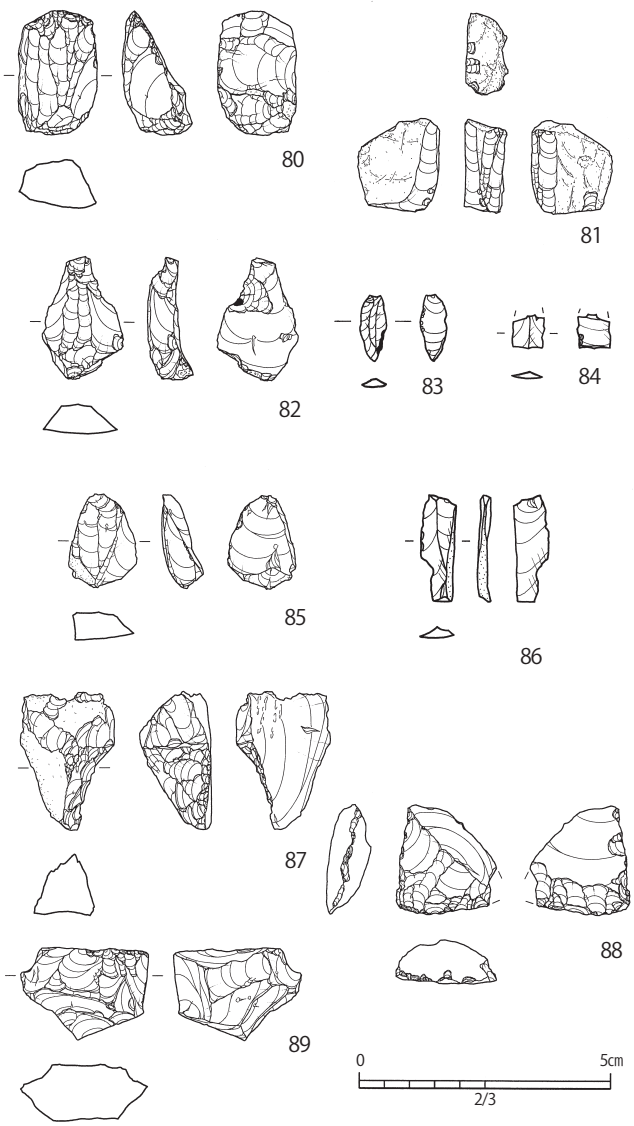
第19図　　後期旧石器時代Ⅱ期石器分布図

第４次調査F1区では細石刃２点、細石刃核１点、剥片・砕片22点、石核１点が出土した。出土状況は、細石刃核が出土した周辺で、集中して剥片・砕片が出土している。また、調査区北側と南側では、スクレイパー２点が出土している。

(b)遺物とその内容（第20図80～89）

80～84は第3次調査区出土遺物である。80～82は細石刃核で、石材は黒曜石である。83は細石刃で、石材は黒曜石である。84は縦長剥片の上部が欠損しているもので細石刃の可能性がある。石材は流紋岩である。

85～89は第4次調査区出土遺物である。85は細石刃核、86は細石刃、87・88はスクレイパー、89は石核である。石材は全て黒曜石である。



第20図　　後期旧石器時代Ⅱ期石器実測図

第４節　縄文時代の遺物

１　調査の概要

縄文時代早期の調査は第Ⅴ層を対象として行った。第3次調査区、F1区の一部では遺物包含層が僅かに残存していた。どちらの調査区でも遺構は検出されず、遺物量は後期旧石器時代と比較すると少なかった。

２　縄文時代早期の遺物　（第23図）

(a) 土器　第３次調査区では土器片28点が出土している。しかし、ほとんどが細片であった。このうち４点を図化掲載した。90～93は深鉢の口縁部および胴部である。器面にはナデ調整がみられる。90は口縁部に刺突文帯があり、91・92は突帯と一部沈線が見られる。

第４次調査区では、結節縄文のある平栫式土器や無文土器の胴部等４点が出土したが図化はしなかった。

（b）石器出土状況

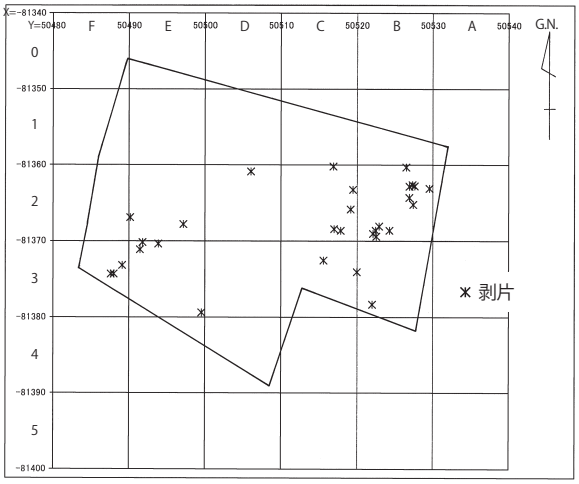
①**第３次調査区**では93点の石器が出土した。石材ごとの出土状況は次のとおりである。

流紋岩　（第21-1図）

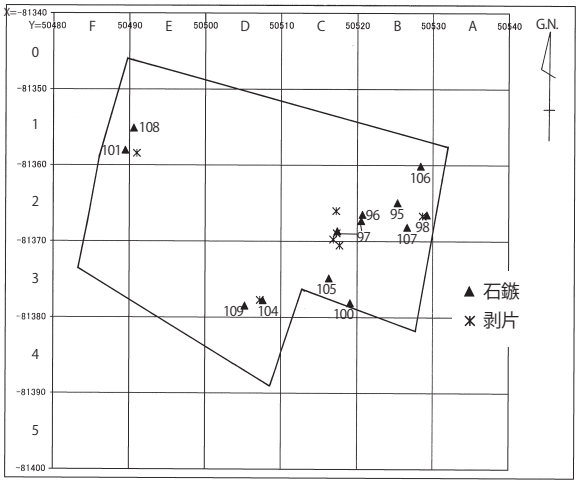
流紋岩は、剥片30点が出土している。B2・C2Grで比較的多く出土している。また、西側のE3Gr周辺でもまとまりがみられ、大きくこの２箇所に分布する。

チャート　（第21-2図）

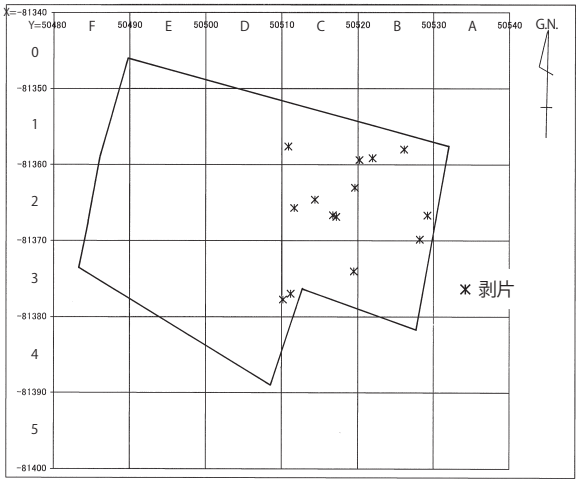
チャートは、主に調査区南東側に分布しており、20点が出土した。石鏃12点、剥片７点が出土した。



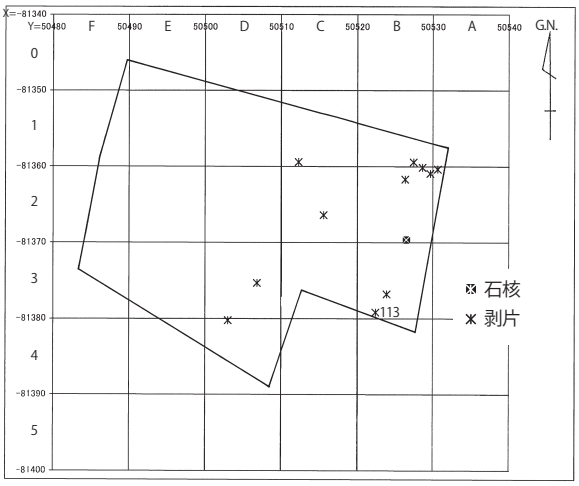
1　流紋岩



2　チャート



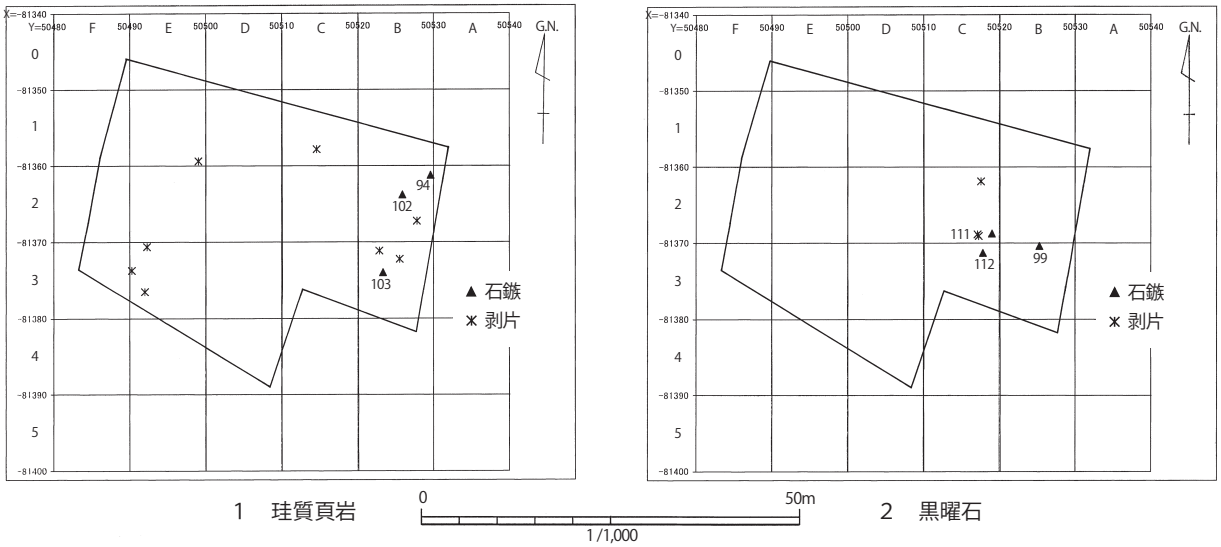
3　頁岩



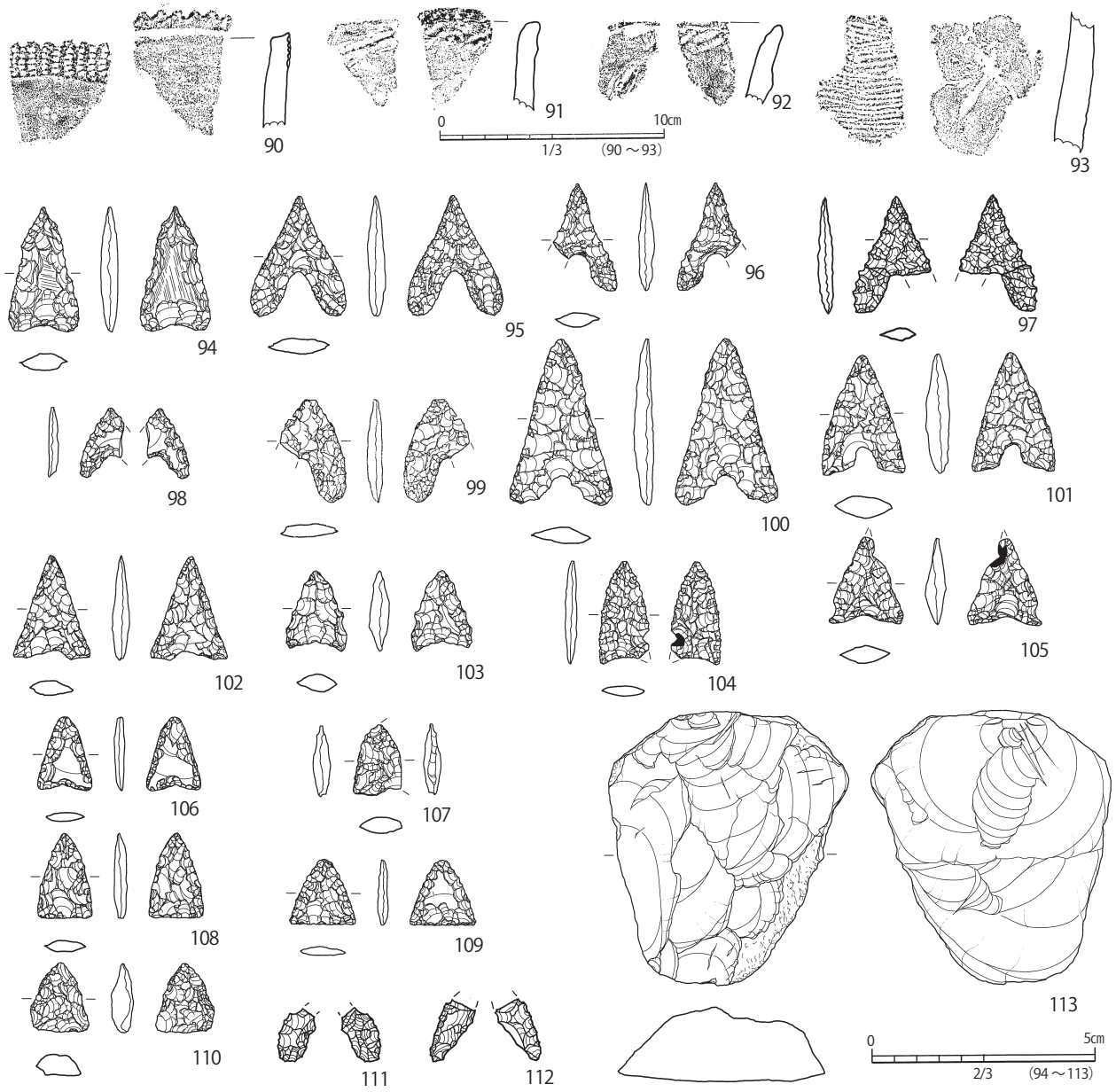
4　ホルンフェルス

0　50m
1/1,000

第21図　　縄文時代早期石器分布図（1）



第22図　　縄文時代早期石器分布図（2）



第23図　　縄文時代早期土器・石器遺物実測図（1）

頁岩　（第21-3図）

頁岩は、剥片が14点出土した。おもに調査区東半部で出土しているが、全体に遺物密度は疎である。

ホルンフェルス　（第21-4図）

ホルンフェルスは12点が出土しており、石核１点、剥片11点である。遺物密度は疎である。

珪質頁岩　（第22-1図）

珪質頁岩は11点出土した。石鏃３点が調査区の東側に分布しており、剥片が８点出土した。

黒曜石　（第22-2図）

黒曜石はC2Gr周辺で６点が出土した。石鏃が３点、剥片が３点である。

②第４次調査F1区では縄文時代早期の石器200点が出土した。石材はチャートで色調から２つに区分し分布状況を観察した。

チャート1（第24-1図）

チャート１は黒色系から緑色系のものを中心に67点が出土している。石鏃が２点、剥片・砕片が65点である。主に調査区北半で出土している。

チャート2　（第24-2図）

チャート2は白色系の透明度が低いもので133点出土している。石鏃１点、剥片・砕片が132点である。調査区北西側の石鏃が出土した地点に約120点の砕片の集中区がある。北東側にもまとまりが見られるが、南側では出土しない。

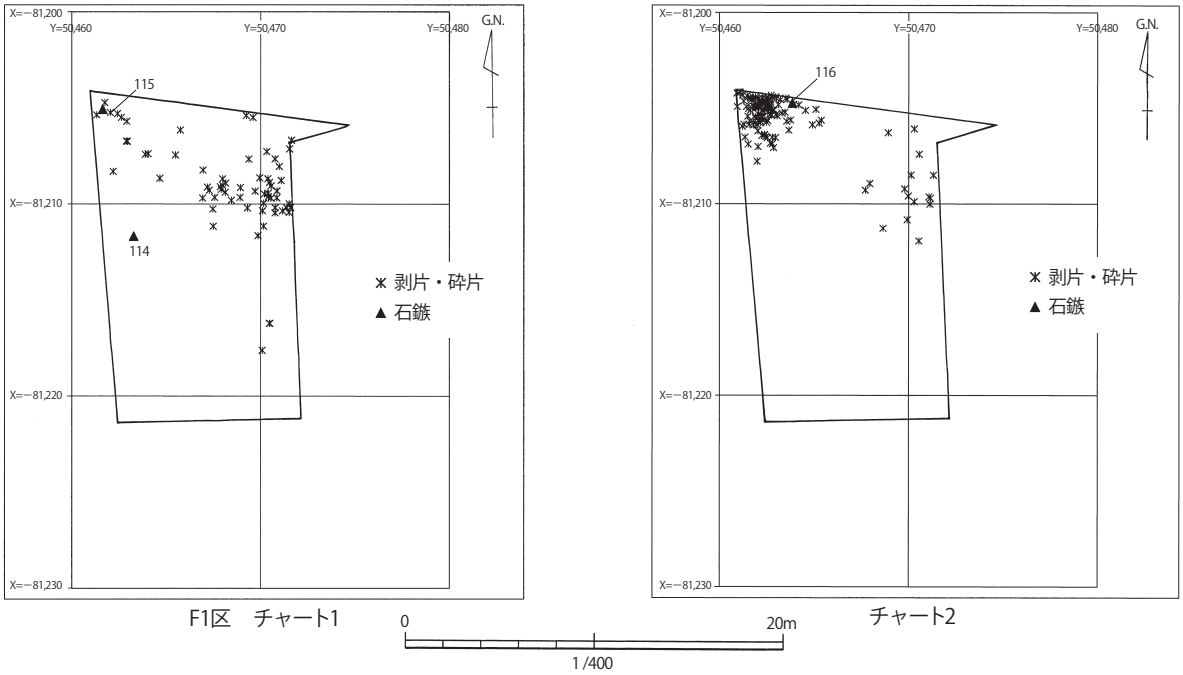
（c）縄文時代早期の石器とその内容（第23・25図）

第３次調査区では石鏃が19点、石核１点、剥片73点が出土した（第23図）。石鏃は製作方法や形から５つに分類した。

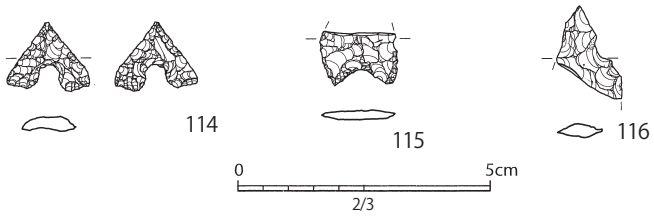
94は局部磨製石鏃で石材は珪質頁岩である。Ⅴ層では局部磨製石鏃はこの１点のみ出土した。

95～99は凹基無茎鏃で、抉り込みが深い鍬形鏃である。石材は95～98がチャート、99が黒曜石である。97は折れた２点が接合したものである。

100・101は凹基無茎鏃で、抉り込みがやや深いものである。２点とも石材はチャートである。



第24図　　縄文時代早期石器分布図（3）



第25図　　縄文時代早期石器実測図（2）

102～106は凹基無茎鏃で抉り込みの浅いものである。石材は102・103が珪質頁岩、104～106がチャートである。

107～110は平基無茎鏃である。石材は107・108がチャート、109は赤色系チャートである。赤色系チャート製の石器はこの石鏃１点のみ出土した。110は水晶製である。水晶石材もこの１点のみであった。

111・112は鍬形鏃の脚部である。石材は黒曜石である。113はホルンフェルス製の剥片である。

F1区では石鏃３点･剥片197点が出土した（第25図）。

114は凹基無茎鏃の抉り込みが独特の形をした鍬形鏃で、石材はチャートである。

115は凹基無茎鏃で抉り込みの浅いもので石材はチャートである。

116は石鏃である。砕片集中区から出土している事から周辺で加工・調整が施された可能性が高い。左脚部は大きく欠損している。

3　縄文時代晩期の遺物　（第26図）

縄文時代晩期の遺物は、弥生時代の遺物包含層（基本土層のⅢ層）や弥生時代の竪穴建物跡の埋土や貼床土内、造成土中から約30点出土した。

このうち９点の縄文土器を図化掲載した。

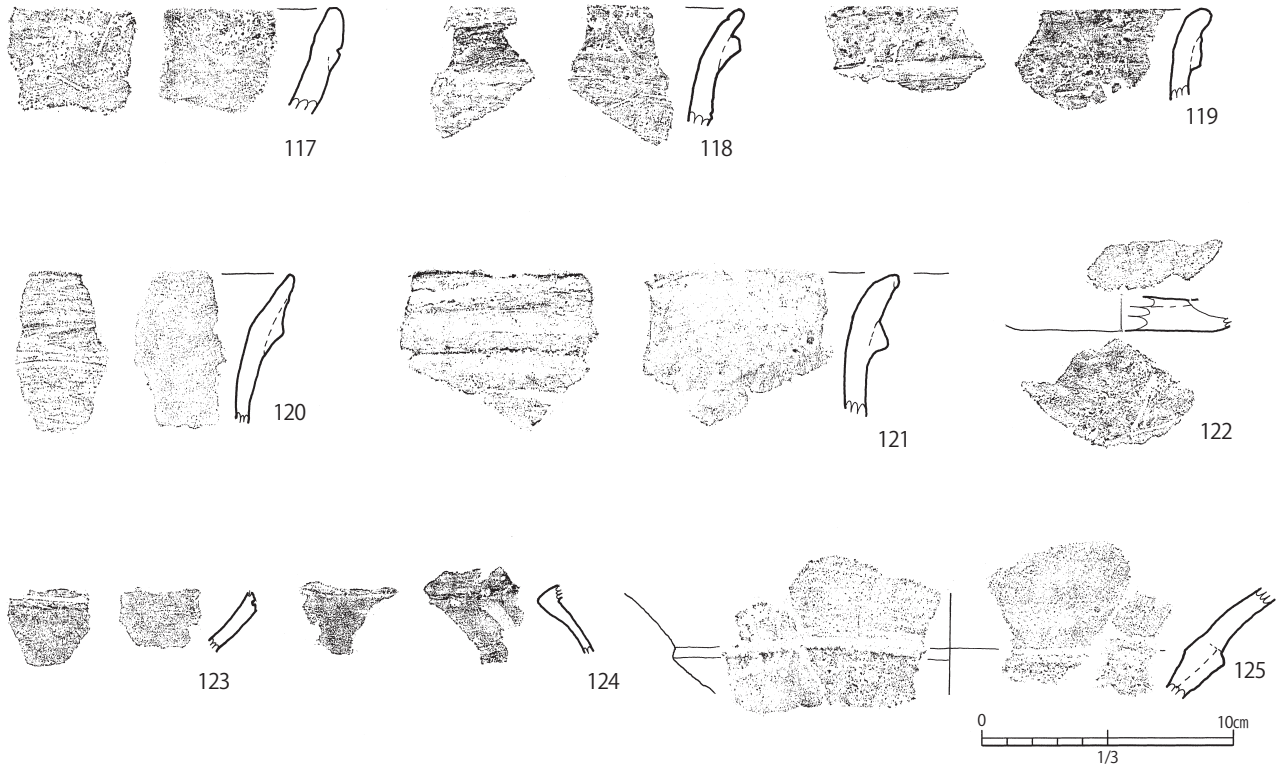
117～122は深鉢の口縁部および底部で、器面は粗いナデで仕上げられる。117は口縁部端部が丸くまとまる。118～121は口縁部外面に突帯が巡る一群である。突帯の断面形は三角形である。118は、突帯貼り付け時に下方から押しつけが強いためか、断面形状が不整な三角形となる。119は幅広の粘土帯を張り付けた形状に近くなる。120・121の突帯は、二等辺三角形や正三角形の断面形を呈する。123は内湾気味の口縁部の端部に一条の沈線が巡る浅鉢である。

124は浅鉢の頸部片である。外面に丁寧なヘラミガキが施される。精良な胎土で器壁も薄い。125は厚手の浅鉢で、口縁部は大きく開く。口縁部と胴部との境は段状となる。外面はヘラミガキが施されずに、粗いナデで仕上げられる。

118～121は口縁部の形状から黒川式土器でも新段階（宮地2008）と位置づけられる。浅鉢（124・125）も黒川式ないしそれ以前の土器型式に伴うと考えられる。

参考文献

宮地聡一郎2008「黒色磨研土器」小林達雄編『総覧 縄文土器』『総覧 縄文土器』刊行委員会



第26図　　縄文時代晩期土器実測図

第3表　後期旧石器時代Ⅰ期石器計測表（1）

掲載No.	器　種	石　材	調査区	出土地点（Gr）Trはトレンチ	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重　量(g)
1	ナイフ形石器	流紋岩	第3次	D1	36.0	20.8	12.0	6.8
2	ナイフ形石器	珪質頁岩	第3次	E3	35.4	17.2	8.8	4.5
3	ナイフ形石器	流紋岩	第3次	F2	24.6	16.4	7.5	2.5
4	ナイフ形石器	流紋岩	第3次	D3	29.8	18.2	4.2	2.5
5	ナイフ形石器	流紋岩	第3次	C2	50.9	25.2	14.6	14.1
6	ナイフ形石器	珪質頁岩	第3次	D1	31.9	12.8	4.8	1.7
7	ナイフ形石器	珪質頁岩	第3次	T1	28.2	10.8	3.8	1.2
8	ナイフ形石器	流紋岩	A2	7-2Tr	49.6	27.1	8.8	9.8
9	ナイフ形石器	珪質頁岩	第3次	F1	34.1	16.1	8.5	4.7
10	ナイフ形石器	流紋岩	第3次	E1	21.3	16.1	10.4	3.2
11	ナイフ形石器	流紋岩	第3次	D1	38.6	18.4	7.2	4.2
12	ナイフ形石器	黒曜石	第3次	C2	17.9	18.9	6.6	2.0
13	ナイフ形石器	チャート	第3次	C3	23.5	20.1	7.5	3.5
14	ナイフ形石器	流紋岩	第3次	D1	19.6	12.2	3.6	1.1
15	剥片尖頭器	ホルンフェルス	第3次	D3	81.5	32.8	11.4	25.9
16	スクレイパー	ホルンフェルス	A2	15Tr	4.6	7.1	1.1	42.4
17	剥片	流紋岩	第3次	C1	36.2	41.4	12.7	16.8
18	スクレイパー	ホルンフェルス	第3次	C2	48.0	72.9	16.3	60.6
19	剥片	尾鈴山溶結凝灰岩	第3次	B2	7.1	3.8	1.5	37.1
20	剥片	尾鈴山溶結凝灰岩	第3次	E2	5.4	6.2	2.5	61.0
21	剥片	珪質頁岩	第3次	C3	64.1	55.4	23.4	81.1
22	剥片	チャート	第3次	D3	4.8	5.5	1.5	53.4
23	剥片	チャート	第3次	E2	38.9	33.8	11.8	13.7
24	剥片	砂岩	第3次	B3	8.5	14.0	1.9	273.3
25	剥片	ホルンフェルス	第3次	E2	6.0	6.3	1.4	56.7
26	剥片	サヌカイト（安山岩）	第3次	D2	2.3	2.0	0.35	1.6
27	剥片	サヌカイト（安山岩）	第3次	C2	1.8	2.9	0.35	1.7
28	剥片	サヌカイト（安山岩）	第3次	B2	2.8	2.5	0.25	2.2
29	剥片	黒曜石	第3次	D1	3.0	1.7	0.25	1.3
30	石刃	流紋岩	第3次	F1	2.8	1.1	0.45	1.5
31	石刃	流紋岩	第3次	C2	1.5	1.2	0.4	1.4
32	石刃	頁岩	第3次	F1	3.5	1.2	0.3	1.5
33	有底剥片	流紋岩	第3次	E2	1.7	1.5	0.4	0.9
34	有底剥片	流紋岩	第3次	E1	1.6	1.9	0.5	1.3
35	有底剥片	流紋岩	第3次	F1	1.6	1.6	0.55	1.1
36	有底剥片	流紋岩	第3次	C2	1.1	1.8	0.4	0.6
37	有底剥片	流紋岩	第3次	E1	1.5	3.0	0.65	2.7
38	有底剥片	珪質頁岩	第3次	F3	2.5	3.6	1.1	7.1
	接合資料①	頁岩	第3次	-	83.3	94.2	32.9	184.3
39	①石核	頁岩	第3次	C2	39.2	51.4	19.7	38.7
40	①剥片	頁岩	第3次	C2	40.1	50.9	17.4	32.4
41	①剥片	頁岩	第3次	C2	28.6	55.3	11.3	11.9
42	①剥片	頁岩	第3次	C2	27.2	41	15.9	17.1
43	①剥片	頁岩	第3次	C2	37.3	41.2	14.1	18.8
44	①剥片	頁岩	第3次	C2	51.0	41.8	11.3	22.1
45	①剥片	頁岩	第3次	B2	44.0	33.6	9.2	12.0
46	①剥片	頁岩	第3次	C2	44.5	26.2	13.1	17.7
47	①剥片	頁岩	第3次	B1	31.4	25.2	12.5	7.1
48	①剥片	頁岩	第3次	C2	31.2	23.6	7.4	4.9
49	①剥片	頁岩	第3次	C2	13.7	19.4	5.4	1.2
	接合資料②	珪質頁岩	第3次	-	36.1	42.6	34.0	55.7
50	②石核	珪質頁岩	第3次	D1	29.8	41.6	25.7	43.0
51	②剥片	珪質頁岩	第3次	D1	33.0	38.5	9.7	12.7
	接合資料③	珪質頁岩	第3次	-	33.5	39.2	30.0	47.5
52	③石核	珪質頁岩	第3次	E3	33.1	39.2	29.1	41.8
53	③剥片	珪質頁岩	第3次	E2	31.6	25.3	6.8	5.7
	接合資料④	チャート	第3次	-	17.2	29.1	9.6	5.3
54	④剥片	チャート	第3次	D3	17.0	27.6	8.5	4.7
55	④剥片	チャート	第3次	C3	10.9	12.4	5.3	0.6
	接合資料⑤	チャート	第3次	-	44.5	31.6	13.5	14.6
56	スクレイパー	チャート	第3次	-	43.4	31.6	10.3	13.8
57	⑤剥片	チャート	第3次	D3	15.2	13.6	2.9	0.4
58	⑤剥片	チャート	第3次	C2	11.9	8.7	4.5	0.4
	接合資料⑥	流紋岩	第3次	-	57.8	40.7	19.7	49.1
59	掻器	流紋岩	第3次	C2	57.7	38.4	19.4	45.8
60	⑥剥片	流紋岩	A2	2Tr	25.9	20.8	5.6	3.0
61	⑥剥片	流紋岩	第3次	B2	17.8	6.2	2.9	0.3
	接合資料⑦	流紋岩	第3次	-	35.1	21.4	8.8	5.1
62	⑦剥片	流紋岩	A2	7-2Tr	35.0	18.3	7.2	3.7
63	⑦剥片	流紋岩	第3次	B2	12.7	16.9	4.8	0.8
64	⑦剥片	流紋岩	第3次	D3	13.3	15.4	3.3	0.6
	接合資料⑧	流紋岩	第3次	-	45.3	24.4	16.9	15.7
65	⑧剥片	流紋岩	第3次	D3	21.3	12.2	4.5	0.9
66	⑧剥片	流紋岩	第3次	D3	45.2	22.6	16.2	14.8
	接合資料⑨	流紋岩	第3次	-	34.2	16.0	11.9	5.9
67	⑨剥片	流紋岩	A2	7-2Tr	24.4	15.2	5.2	1.5
	接合資料⑩	流紋岩	第3次	-	20.5	31.0	14.6	8.0
68	⑩剥片	流紋岩	第3次	E2	17.0	16.2	4.2	0.7
	接合資料⑪	流紋岩	第3次	-	38.0	39.8	27.3	43.2
69	⑪剥片	流紋岩	第3次	D1	20.9	16.5	5.6	1.5
70	石核	流紋岩	第3次	F2	31.1	36.2	41.3	47.0
71	石核	ホルンフェルス	第3次	E1	41.6	58.4	32.0	72.5

第4表　後期旧石器時代Ⅰ期石器計測表（2）

掲載No.	器　種	石　材	調査区	出土地点（Gr）	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重　量(g)
72	石核	珪質頁岩	第3次	F1	44.7	41.5	37.5	81.4
73	二次加工剥片	珪質頁岩	第3次	D1	3.3	1.6	0.65	3.1
74	二次加工剥片	チャート	第3次	C2	9.4	3.9	3.0	81.8
75	スクレイパー	ホルンフェルス	F2	（Ⅱ層）	71.2	41.4	22.0	79.0
76	敲石	尾鈴山溶結凝灰岩	第3次	E1	8.3	6.4	5.1	360.0
77	敲石	尾鈴山溶結凝灰岩	第3次	E1	8.4	6.8	4.6	354.7
78	敲石	砂岩	第3次	E2	8.9	5.3	5.4	339.3
79	敲石	尾鈴山溶結凝灰岩	第3次	D3	6.7	5.4	4.8	232.0

第5表　後期旧石器時代Ⅱ期石器計測表

掲載No.	器　種	石　材	調査区	出土地点（Gr）	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重　量(g)
80	細石刃核	黒曜石	第3次	C1	24.6	15.6	11.9	4.5
81	細石刃核	黒曜石	第3次	C2	17.4	8.2	16.1	3.0
82	細石刃核	黒曜石	第3次	E3	23.8	15.9	6.8	2.1
83	細石刃	黒曜石	第3次	E1	1.3	0.5	0.15	0.1
84	細石刃か	流紋岩	第3次	B3	0.7	0.6	0.1	0.1
85	細石刃核	黒曜石	F1	D3	18.4	13.2	6.6	1.5
86	細石刃	黒曜石	F1	D2	1.4	0.45	0.2	0.1
87	スクレイパー	黒曜石	F1	D3	26.6	18.6	13.8	4.8
88	スクレイパー	黒曜石	F1	D3	21.4	19.2	8.0	2.7
89	石核	黒曜石	F1	D2	17.9	25.1	12.4	5.6
未掲載	細石刃	黒曜石	F1	D2	1.0	0.3	0.1	0.1

第6表　縄文時代早期土器観察表

掲載No.	器種	部位	出土地点	法量　cm（　）は推定 口径	底径	器高	手法・調整・文様 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考	焼成
90	深鉢	口縁部	A区 E2				口縁部刺突文帯 ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	2mm以下の白色粒を多く含む		良好
91	深鉢	口縁部	A区 B3				沈線　ナデ　微隆起突帯	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	2mm以下の白色粒を多く含む、1mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む		良好
92	深鉢	口縁部	A区 B2				口唇部押圧刻み ナデ 微隆起突帯	沈線　ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR5/4)	1mm以下の灰色粒を多く含む1mm以下の黒色光沢粒、微細な光沢粒をわずかに含む		良好
93	深鉢	胴部	A区 B2				貝殻条痕文	ミガキ	明赤褐 (5YR5/6)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	2mm以下の白色粒、1mm以下の黒色光沢粒を多く含む。1～2mmの赤色粒、1～3mmの黒色粒をわずかに含む。		良好

第7表　縄文時代早期石器計測表

掲載No.	器　種	石　材	調査区	出土地点（Gr）	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重　量(g)
94	石鏃（局部磨製）	珪質頁岩	第3次	B2	26.4	15.7	3.7	1.5
95	石鏃	チャート	第3次	B2	16.8	21.3	3.6	1.3
96	石鏃	チャート	第3次	B2	15.7	10.7	3.4	0.6
97	石鏃	チャート	第3次	B2	17.3	14.3	3.4	0.7
98	石鏃	チャート	第3次	B2	10.4	8.7	2.1	0.3
99	石鏃	黒曜石	第3次	B2	19.3	12.8	3.1	0.8
100	石鏃	チャート	第3次	C3	30.5	22.8	4.2	2.4
101	石鏃	チャート	第3次	F1	20.8	18.3	5.0	1.8
102	石鏃	珪質頁岩	第3次	B2	21.2	16.9	3.5	0.9
103	石鏃	珪質頁岩	第3次	B3	15.8	13.4	4.2	0.8
104	石鏃	チャート	第3次	D3	21.4	11.1	2.4	0.6
105	石鏃	チャート	第3次	C3	17.4	16.2	4.3	0.8
106	石鏃	チャート	第3次	B2	15.2	12.1	2.1	0.4
107	石鏃	チャート	第3次	B2	15.3	10.7	3.8	0.7
108	石鏃	チャート	第3次	E1	18.9	12.1	2.8	0.7
109	石鏃	チャート(赤色系)	第3次	D3	14.5	14.7	2.2	0.5
110	石鏃	水晶	第3次	C1	15.4	12.5	4.8	1.0
111	石鏃	黒曜石	第3次	C2	1.3	0.7	0.3	0.3
112	石鏃	黒曜石	第3次	C3	1.4	0.7	0.3	0.3
113	剥片	ホルンフェルス	第3次	B3	61.4	53.7	18.3	63.2
114	石鏃	チャート	第4次	D3	8.9	16.2	2.9	0.3
115	石鏃	チャート	第4次	D2	10.4	15.1	1.9	0.4
116	石鏃	チャート	第4次	D2	14.2	10.7	3.0	0.5

第8表　縄文時代晩期土器観察表

掲載No.	器種	部位	出土地点	法量　cm（　）は推定 口径	底径	器高	手法・調整・文様 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考	焼成
117	深鉢	口縁部	F3区				粗いナデ 横方向のナデ	ナデ	にぶい黄褐 (10YR4/3)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	2mm以下の灰白の粒を多く含む	傾き不明	良好
118	深鉢	口縁部	F1区				横方向のナデ 突帯	粗いナデ 横方向のナデ	にぶい赤褐 (5YR5/4)	黒褐 (2.5YR3/1)	1mm程の灰白の粒と微細な光沢粒を多く含む	傾き不明	良好
119	深鉢	口縁部	SA3				横方向のナデ 肥厚帯	ナデ	灰黄褐 (10YR4/2)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	6mm以下の灰白・灰の粒が多く含まれる	外・内面とも全体黒変	良好
120	深鉢	口縁部	SA3				横方向のナデ 肥厚帯	ナデ	にぶい黄橙 (10YR5/3)	黒 (10YR2/1)	1mm以下の灰白の粒を多く含む	外面一部ススト付着 内面全体黒変	良好
121	深鉢	口縁部	F区				横方向のナデ 突帯	横方向のナデ 砂粒の動きがみられる	にぶい赤褐 (2.5YR4/4)	にぶい赤褐 (2.5YR4/4)	3mm以下の粒を多く含む		良好
122	深鉢	底部	F1区		(7.8)		粗いナデ	ナデ	褐 (7.5YR4/6)	黒褐 (10YR3/2)	3mm以下の黒と灰白の粒を多く含む		良好
123	浅鉢	屈曲部	SA4				丁寧なナデ 沈線	ミガキ	黒褐 (2.5YR3/1)	黄灰 (2.5YR4/1)	1mm以下の灰白・無色透明の粒を含む		良好
124	浅鉢	頸部	F1区				ミガキ	ミガキ	灰黄 (2.5YR7/2)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	無色透明・黒の微細な光沢粒を含む	黒川式	良好
125	浅鉢	胴部	SA2				貝殻条痕文をナデ 強いナデ	横方向のナデ 粗いナデ	にぶい赤褐 (5YR5/4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	6mm以下の灰白・褐の粒を多く含む		良好

第５節　弥生～古墳時代の遺構と遺物

１　調査の概要

弥生～古墳時代の遺構は、竪穴建物跡（SA）５軒、土坑（SC）５基、土坑墓（SD）１基である。これらの遺構は、出土遺物から弥生時代後期後半～終末期（古墳時代初頭）の時期と考えられる。

特に、竪穴建物跡のうち２軒（SA3･4）では、屋根部分が焼失した痕跡が確認された。このSA3は遺構の平面形が花弁状となる南九州特有の竪穴建物である。

２　遺構の分布

遺構は大きく２つのグループに分布する。荒崎山の裾部斜面上（SA1:A2区）と都農川に形成された河岸段丘面（SA2～4･SC1～5:F1･F3区）上である（第３図）。このF1区とF3区の比高差は、約4.5mで大きな段差となる。なお、F1・F3区の遺構検出状況からF2区周辺にも遺構が分布する可能性が高いと考えられる(第27図)。

F1区では、都農川の川岸よりにSA3が位置し、南側に4.5m離れた箇所にSA2・4が位置する。SA4はSA2に切られている。SA2・3を結ぶラインより東側に土坑が４基（SC2～５）群在していた（第31図)。

F3区では、SA5とSC1およびSD1が検出された。SC1とSD1はSA5の埋没後に掘り込まれていた（第41図)。

３　遺構と遺物

１号竪穴建物跡（SA1）［第28～30図］

位置　A2区の北縁中央付近に位置する。SA1の北半部は町道で大きく削平されている。

規模　SA1の残存部分では２箇所の隅角部が認められた。本来、竪穴部は一辺約６mの方形プランと想定され、東側に方形の張り出し部を有すると考えられる。残存部分の総床面積は約12.5㎡である。

床面　検出面から竪穴部本体の床面までの深さは約0.3mを測る。張り出し部の床面は竪穴部本体よりも約0.1m高い。竪穴部本体の床面は貼床、張り出し部はV層を掘削して床面とする。貼床の層厚は約0.1mで、基本土層のV層までほぼ水平に掘削した後に暗褐色土（第28図８層）で均一に埋め戻されて床面とする。

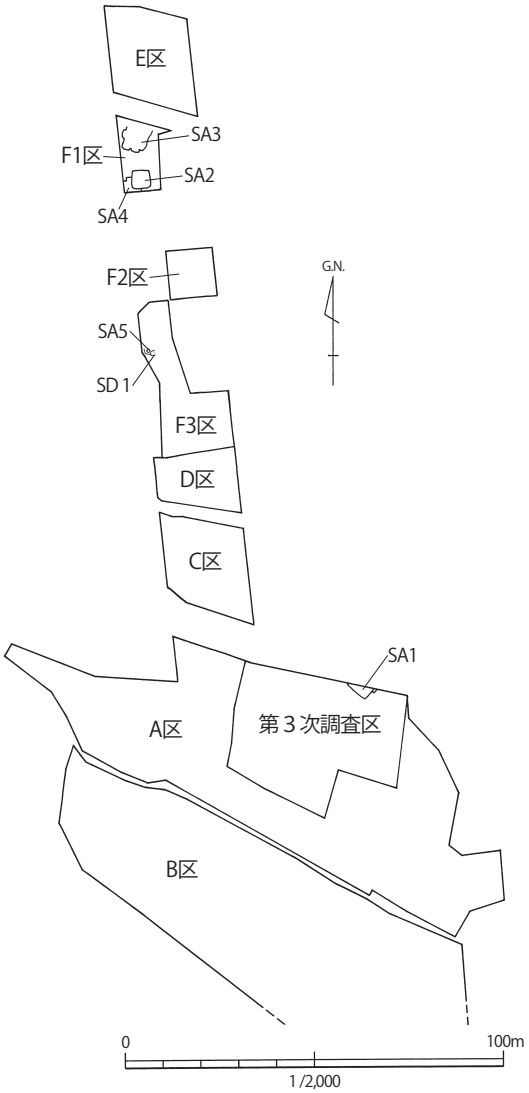
柱穴　主柱穴は２箇所検出された。直径約0.24mで深さは約1.3mを測る。削平部分を考慮すると、本来は４本柱と推定される。また、竪穴部の周壁沿いには直径0.1m･深さ0.05mの小穴列が巡る。小穴間の平均距離は約0.45mである。壁溝自体は検出されなかった。

この小穴列は、竪穴部の壁面との間に壁体が存在したことを示しており、SA1は壁立式もしくは周堤を巡らせる竪穴建物であったと考えられる。

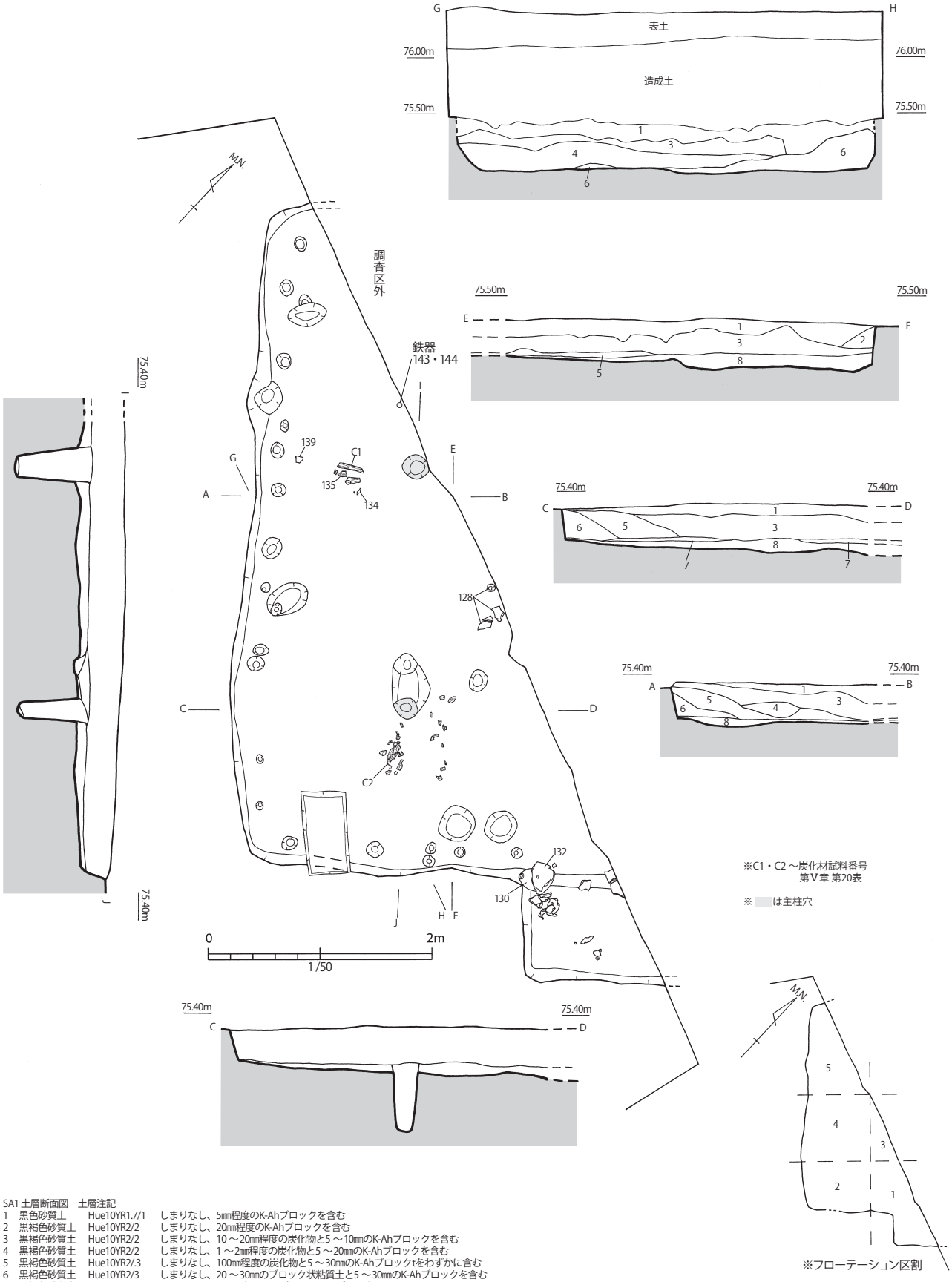
遺物の出土状況　竪穴部本体の埋土上・中層では弥生土器の細片が散漫に出土した。また、下層付近で炭化材が出土した。床面直上では、弥生土器の甕・壺・鉢･器台（128･134･135･139･141）が出土した（第29･30図)。

張り出し部分では弥生土器甕（127･130～133）が床面から浮いた状態で出土した（図版3)。出土状況から竪穴建物の廃絶後に一括投棄されたものと考えられる。

主柱穴の周辺では炭化材がまとまって床面より約0.1m浮いた状態で出土した。これらの炭化材は、竪穴建物の建築部材と考えられる。ただし、焼土塊や焼土粒の広がりは確認されなかった。



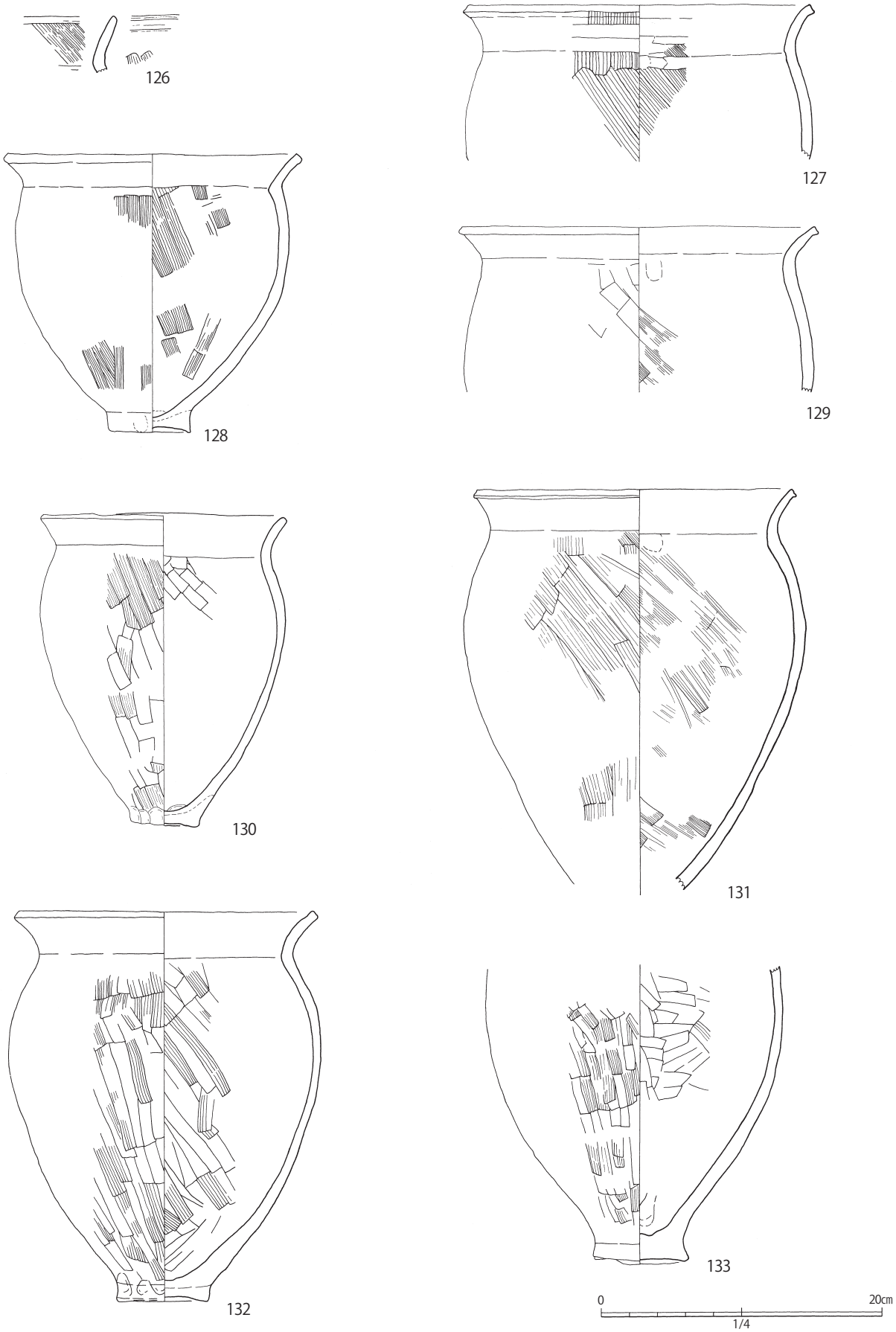
第27図　弥生～古墳時代遺構分布図



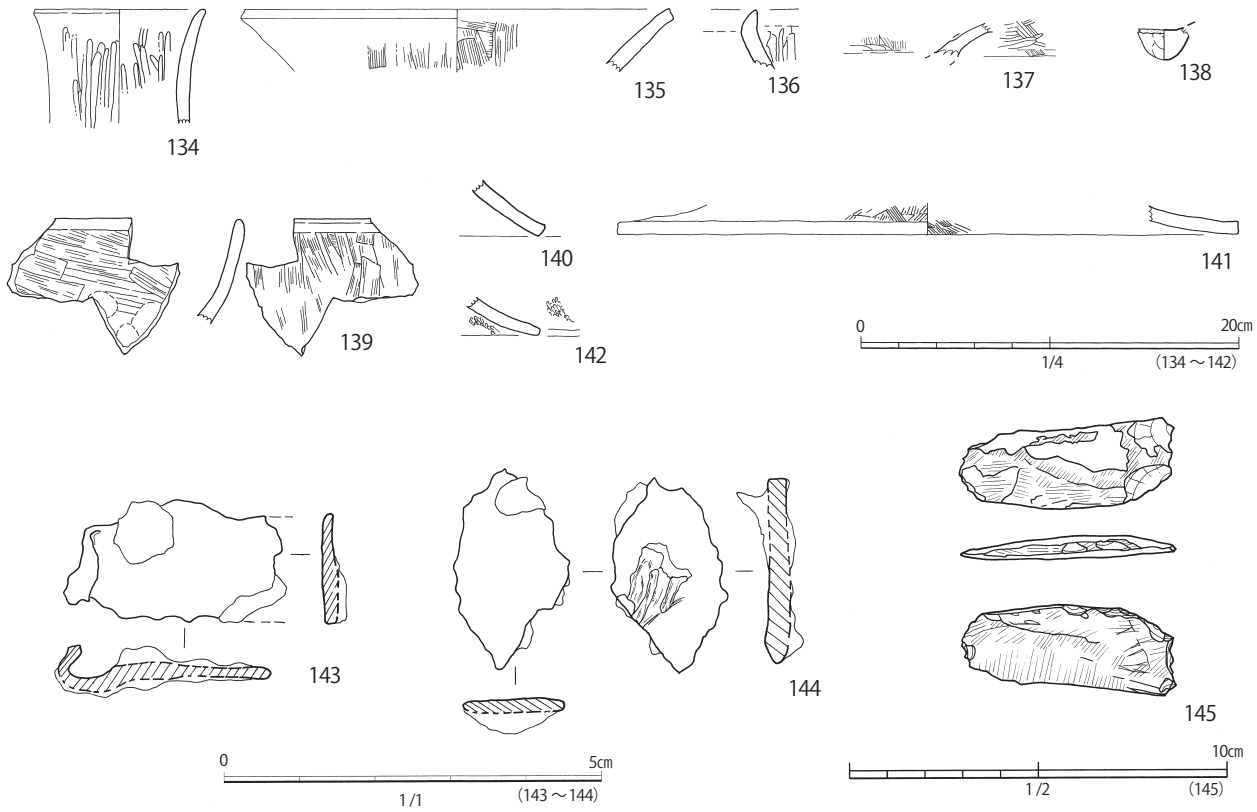
SA1 土層断面図　土層注記

1	黒色砂質土	Hue10YR1.7/1	しまりなし、5㎜程度のK-Ahブロックを含む
2	黒褐色砂質土	Hue10YR2/2	しまりなし、20㎜程度のK-Ahブロックを含む
3	黒褐色砂質土	Hue10YR2/2	しまりなし、10～20㎜程度の炭化物と5～10㎜のK-Ahブロックを含む
4	黒褐色砂質土	Hue10YR2/2	しまりなし、1～2㎜程度の炭化物と5～20㎜のK-Ahブロックを含む
5	黒褐色砂質土	Hue10YR2/.3	しまりなし、100㎜程度の炭化物と5～30㎜のK-Ahブロックtをわずかに含む
6	黒褐色砂質土	Hue10YR2/3	しまりなし、20～30㎜のブロック状粘質土と5～30㎜のK-Ahブロックを含む
7	黒褐色砂質土	Hue10YR3/1	しまりあり、5㎜程度のK-Ahブロックをわずかに含む
8	暗褐色粘質土	Hue10YR3/3	しまりあり、貼り床相当

第28図　　1号竪穴建物跡実測図



第29図　　1号竪穴建物跡出土遺物実測図（1）



第30図　　１号竪穴建物跡出土遺物実測図（2）

遺物　　SA1出土遺物の総重量は約8kgである。このうち図化掲載したのは21点である。弥生土器の甕（126～133）は大きく開く口縁部と円柱状の底部を有するのが特徴である。口縁部付け根内面の稜は、明瞭（128･132）と甘い（127・129～131）ものがある。底部は上げ底基調だが、133は平底で端部が外方へ突出する。134は細頸壺の口縁部、135・136は壺、138・140・142は高坏、139は鉢、141は器台の一部である。

鉄器のうち143は摘鎌で端部は折り返される。144は鉄鏃の鏃身とも考えられるが、断定できない。

石器は頁岩製の磨製石庖丁（145）がある。研ぎ減りによって、平面形が変形している。

自然科学分析（第Ⅴ章参照）　　SA1竪穴部出土の炭化材のうち２点（第28図のC1･C2）を樹種同定すると２点ともツブラジイとの結果が得られた。

また、甕（132）内で検出された炭化物にはコキンバイザサが存在していた。さらに、甕（130）内の炭化物をAMS年代測定したところ、AD1～90（90.8％確率）の暦年代が得られた。比較検証のために、炭化材（C1）もAMS年代測定を実施したが、同じ暦年代の結果（AD 1～90　89.1％確率）が得られた。

２号竪穴建物跡（SA2）［第31～33図］

位置　　F1区の南側に位置する。SA2がSA4を切る関係にある。

規模　　長軸約5.1m、短軸約4.9mを測る、方形プランを呈する。総床面積は約24.5㎡である。

床面　　検出面から床面までの深さは約0.5mを測る。主柱穴に囲まれた部分の床面は0.1m程度掘り込まれ、周囲は南側に開く「コ」の字形に１段高い。

床面は貼床が施される。貼床を除去すると四壁に沿った帯状の、中央部分は土坑状の掘削痕が認められた。基本土層のⅣ層を掘削した後にK-Ahブロックを含む黄褐色土で埋め戻されて床面とする。竪穴部の中央付近は基本土層のⅤ層まで掘削が及ぶ。

柱穴　　主柱穴は４本である。直径約0.25mで深さは約0.4mを測る。貼床後に主柱穴が穿たれていた。主柱穴間の距離は長軸約2.25m、短軸1.7mである。

一方、竪穴部の壁面に沿った外周に小穴列が検出された。基本土層のⅣ層の部分は検出できたが、南西側（SA4側）は黒色の遺構埋土となるので検出は困難であった。小穴列は、本来は竪穴部四壁の外周を巡ると考えられる。

小穴は直径約10㎝、深さ約8.5㎝を測る。小穴の間隔は広い場合は約1.55m、狭い場合は約0.45mである。小穴列と竪穴部の掘り込みラインとは約0.5mの空間がある。小穴の底面は先細り気味となるので、穴を掘り込んだというより木杭状のものが打ち込まれた穴と考えられる。穴の断面形は、検出面に対して垂直ないし、やや竪穴側に内傾していた。これら小穴列は、屋根ないし周堤と関係する遺構と考えられる。

焼土　床面が被熱により焼土化する箇所が大小あわせて６箇所検出された。多くは主柱穴の際付近に認められるので、対角線上の位置関係にある。

遺物の出土状況　埋土全体に土器片が含まれていた。埋土下層付近では鉄器類(176 ～179)が出土した。

床面直上では弥生土器の甕・壺・鉢等（146･149･150･152･153・159･161･169 ～171）や管玉（173 ～175）が出土した（第33･34 図)。弥生土器壺（153）は細片化しつつも竪穴部の南側にまとまって出土した。その付近では炭化材と炭化物の広がりが認められた。

貼床層内では、弥生土器の壺・高坏（154･156･164)、抉り入りの柱状片刃磨製石斧（172）が出土した。

遺物　SA2出土遺物の総重量は約23kgを測る。このうち、遺物の器種と器形が判明したものを選択して図化掲載したのは37点である。弥生土器は甕（146 ～152)、壺（153 ～163)、高坏（164)、鉢（165 ～171)がある。石器は抉り入りの石斧(172)と管玉(173 ～175)、鉄器には鉄鏃（176 ～179）がある。

弥生土器甕の特徴として、口縁部が長くて大きく直線的に開くもの（149）と､短くて緩く開くもの（150）が認められる。また､底部には小さな平底（148･150）や丸底に近い（152）形態がある。

中･大型の壺は単口縁（154･159）と複合口縁（153･155 ～157）がある。複合口縁壺は、二次口縁部が内側に屈曲する断面三角形の形態が主体で、一次口縁部と二次口縁部の接合部が垂下気味であるのが特徴である。二次口縁部が直立する（156）ものも見られる。

161は広口の小型壺、163は小型丸底壺である。

高坏（164）は、坏部の底面に丸くまとめた粘土塊を挿入して脚部と接合する痕跡が認められる。

鉢の外面にはヘラミガキが施されるのが特徴である。器形的には、口縁部が短い低平なもの（166）と大きく開く口縁部に丸みを帯びた胴部がつくもの（171)、コップ状のもの（169）の三者が認められる。

石斧（172）は頁岩製で、表面全体に敲打痕が残る。この石斧は母岩を打割して製作したというよりは、もともと石斧の完成形に近い棒状礫を選択して、柄の装着箇所と刃部を剥離調整し、全体を敲打・研磨して整えているように思われる。

管玉（173 ～175）は淡緑色の頁岩製と濃緑色の碧玉製で、全長1㎝と小さく細身である。表面はよく研磨されて、丁寧なつくりである。孔径は約２㎜で、端面の一方向から偏ることなく中心を貫いて穿たれている。

鉄鏃（176 ～179）のうち､179の鏃身部は柳葉形で、明確な関部を成さずに茎部に接続する。177は幅広の鏃身部と考えられる。

自然科学分析（第Ⅴ章参照）　SA2出土の炭化材のうち3点（第32図C3 ～ C5）の樹種はツブラジイとコナラ属クヌギ節との同定結果が得られた。ツブラジイは照葉樹でコナラ属は落葉樹である。また、竪穴建物跡床面の土を採取して水洗選別をした。その結果、竪穴建物跡の北側付近でイネの炭化種実２点が回収できた。

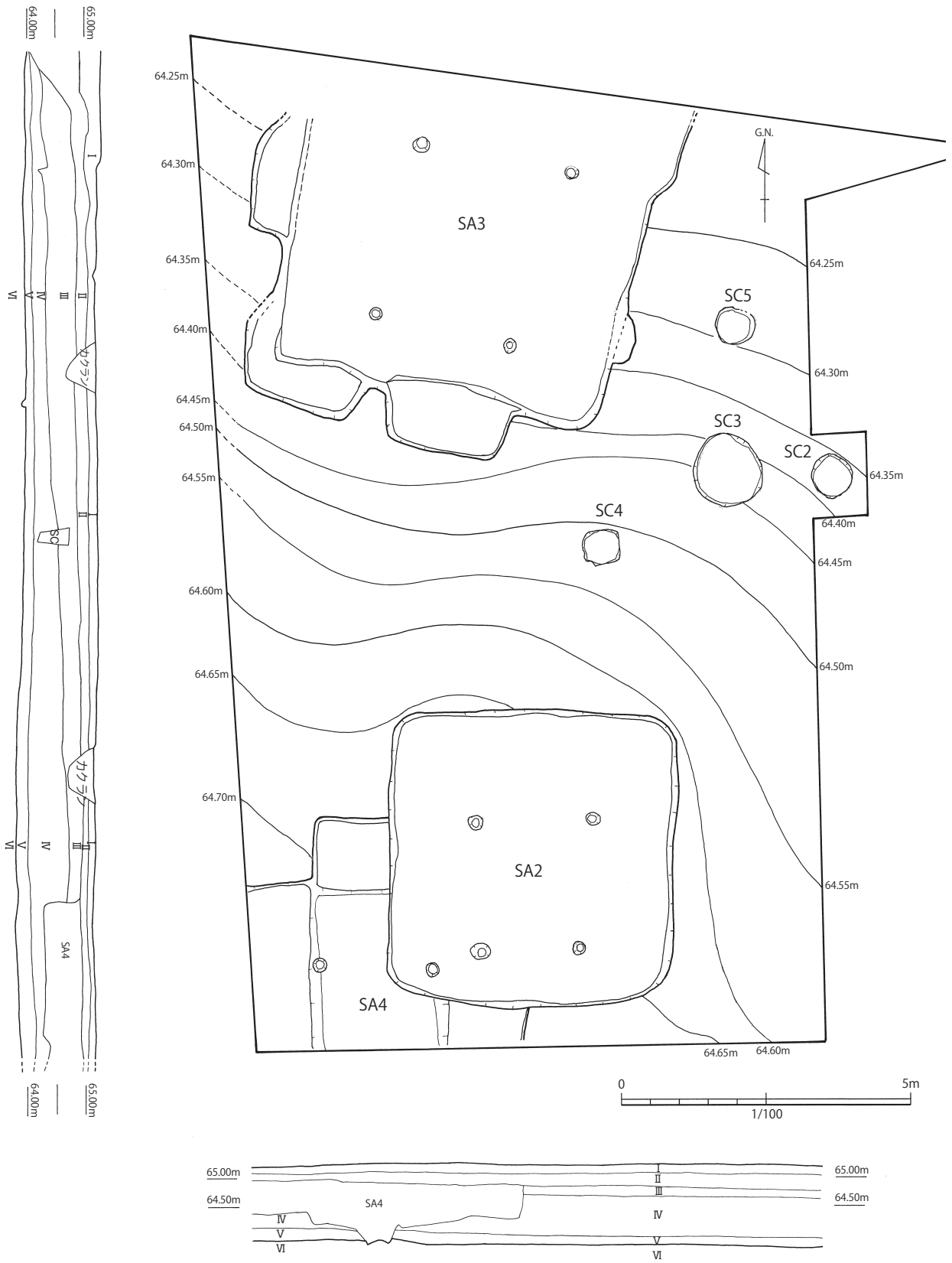
３号竪穴建物跡（SA3）［第35 ～37図］

位置と規模　F1区の北側に位置する。SA3の北側壁付近は削平されている。調査部分では、一辺約6mの方形基調の平面プランに３箇所の突出壁による間仕切りを有する構造で、床面全体の面積は約39.5㎡である。間仕切られた部分はベッド状となる。

SA3の東壁付近は半円形に落ち込む箇所が認められた。これは別遺構（土坑等）の切り合いによるものと考えられる。

床面　床面は竪穴部本体と間仕切り部分の２段構成である。検出面から竪穴建物の中央部床面までの深さは約0.5mを測る。間仕切り部分の床面は約0.14m高い。竪穴部本体床面は基本土層のⅥ層を水平に掘削して形成される。掘削による窪みは褐色粘質土と黒色土の混合土で丁寧に埋め戻されていた。間仕切り部分の床面は基本土層のⅣ層を平坦に掘削した後、K-Ahブロック土と黒色土の混合土で硬く叩き占められたような層厚約0.1mの貼床で形成される。

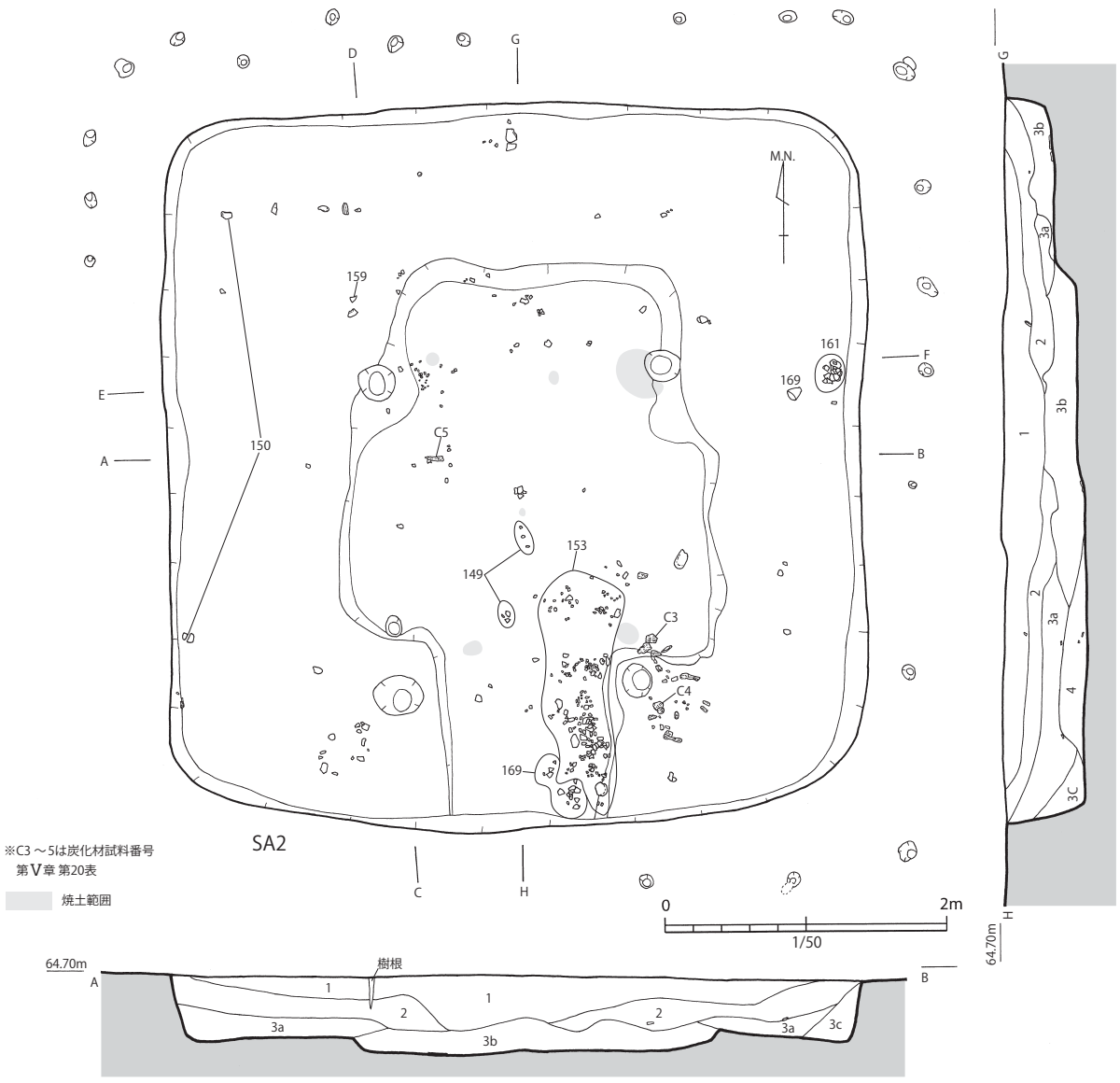
柱穴　主柱穴は４本あり直径約0.25m。深さは約



F1区土層注記

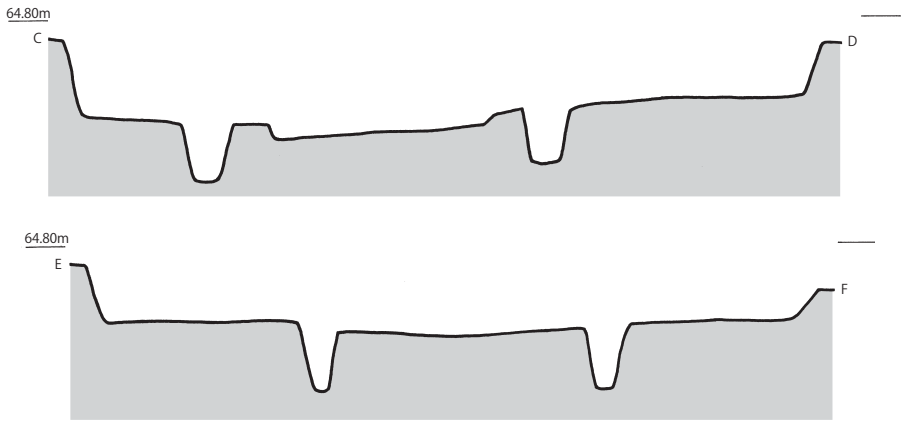
Ⅰ	褐灰色土	Hue10YR4/1	ややしまる、植物の根を多く含む、旧耕作土
Ⅱ	褐色土	Hue7.5YR4/3	造成土
Ⅲ	黒色土	Hue10YR1.7/1	ややしまる、クロボク相当層
Ⅳ	黄橙色土	Hue10YR7/8	K-Ah（アカホヤ火山灰）
Ⅴ	黒褐色土	Hue7.5YR3/1	しまりあり、2㎜～5㎜の礫を少し含む
Ⅵ	暗褐色土	Hue10YR3/4	しまりあり、水分を多く含む粘質土

第31図　　F1区遺構分布図

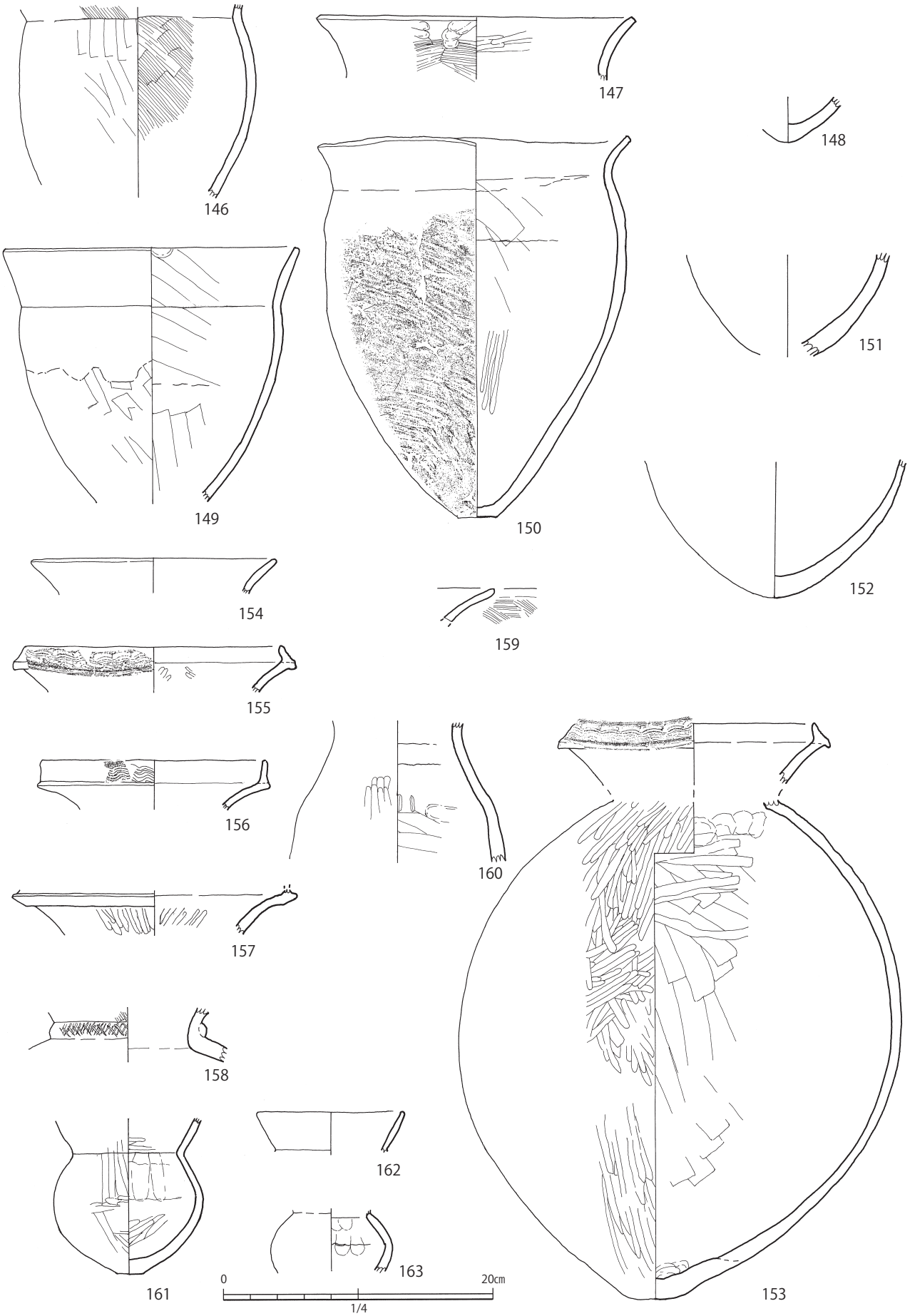


SA2埋土注記

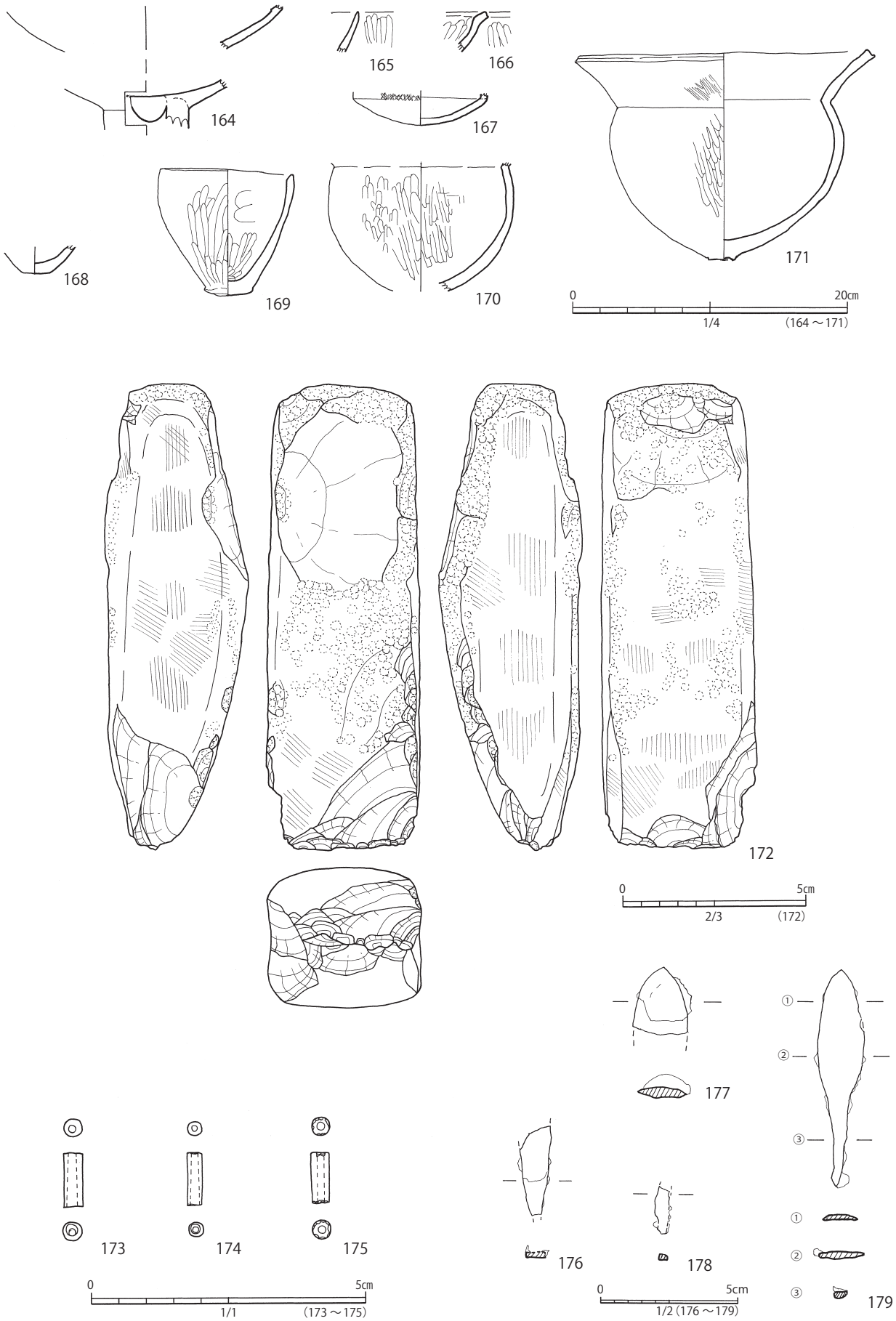
1	黒色土	Hue2.5YR2/1	つよくしまる、1～2㎜のK-Ah粒子をわずかに含む、2～5㎜の炭化物を少し含む
2	黒褐色土	Hue2.5Y3/1	つよくしまる、5～10㎜のK-Ahブロックを含む、K-Ahの微粒子を全体に含む、2～5㎜の炭化物を少し含む
3a	黄橙色土	Hue10YR7/8	つよくしまる、10㎜～50㎜のK-Ahブロックに黒色土が混じる、5㎜～10㎜の炭化物を少し含む
3b	黄橙色土	Hue10YR7/8	3aよりしまりなし、20㎜～50㎜のK-Ahブロックに黒色土が多く混じる
3c	黄橙色土	Hue10YR7/8	つよくしまる、20㎜～50㎜のK-Ahブロックに黒色土が少しまじる、2㎜～3㎜の炭化物を少しふくむ
4	黄橙色土	Hue10YR7/8	つよくしまる、20㎜～50㎜のK-Ahブロックに黒色土が少しまじる、2㎜～10㎜の炭化物を多くふくむ



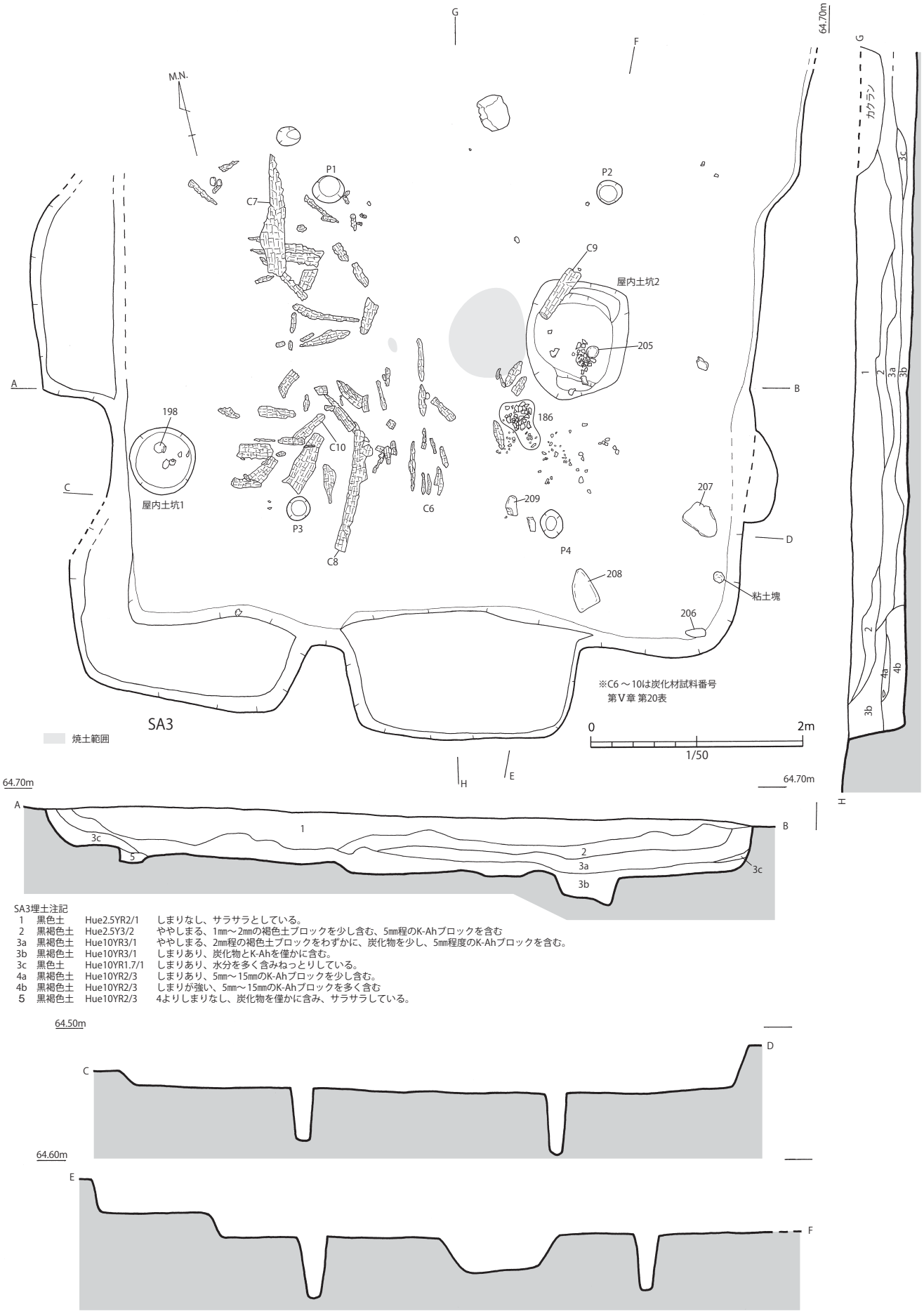
第32図　　２号竪穴建物跡実測図



第33図　　２号竪穴建物跡出土遺物実測図（1）



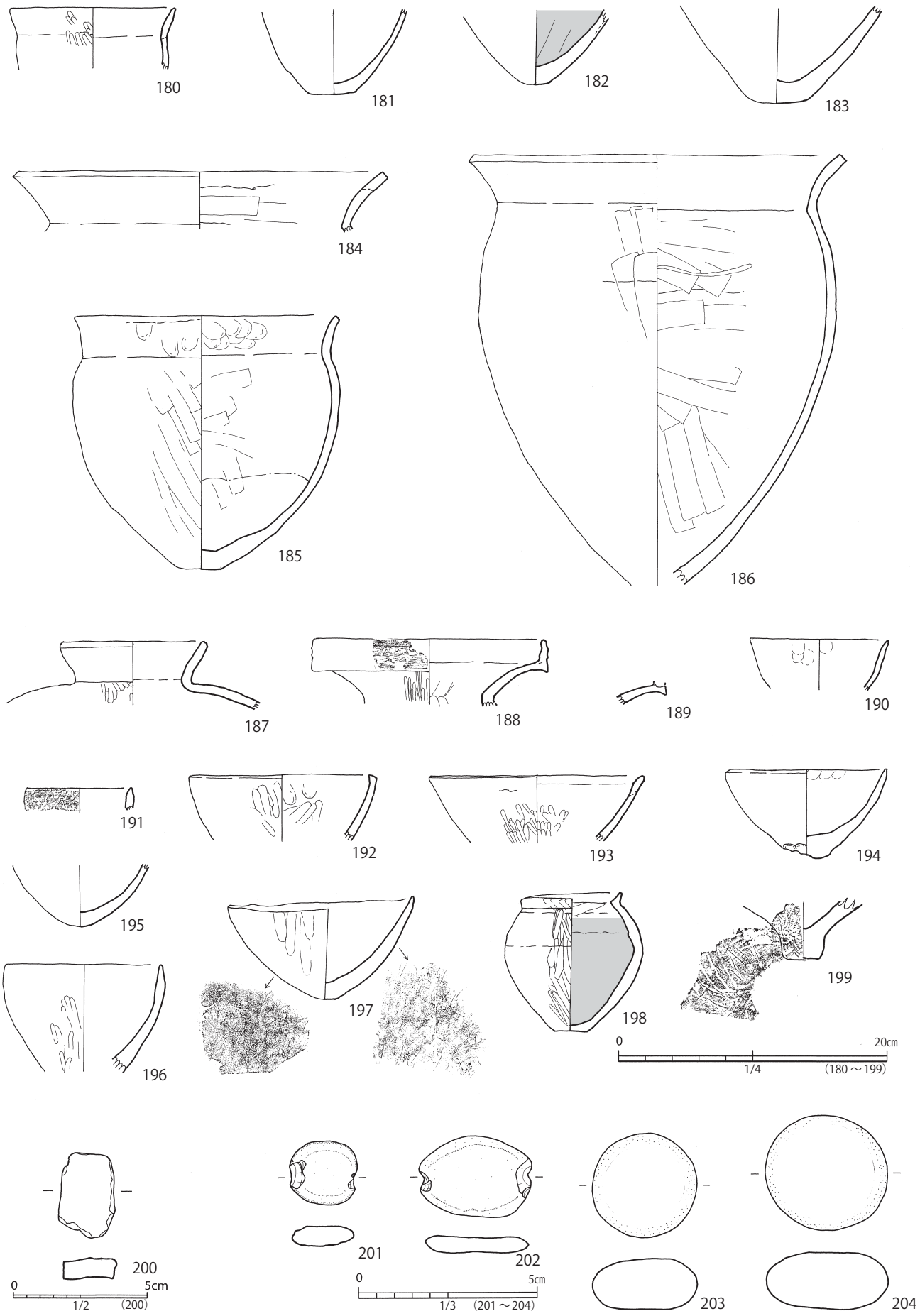
第34図　　2号竪穴建物跡出土遺物実測図（2）



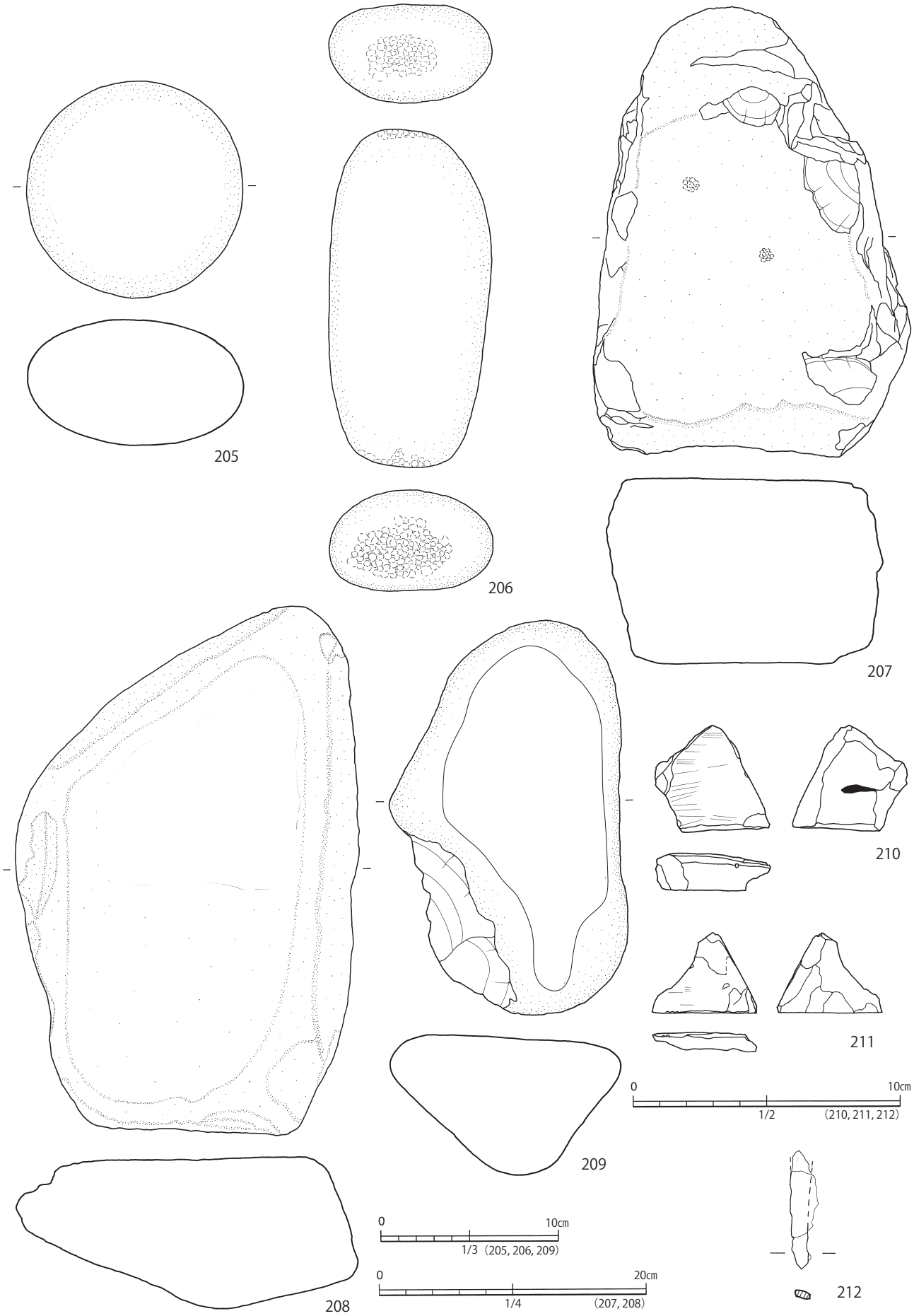
SA3埋土注記

1	黒色土	Hue2.5YR2/1	しまりなし、サラサラとしている。
2	黒褐色土	Hue2.5Y3/2	ややしまる、1㎜～2㎜の褐色土ブロックを少し含む、5㎜程のK-Ahブロックを含む
3a	黒褐色土	Hue10YR3/1	ややしまる、2㎜程の褐色土ブロックをわずかに、炭化物を少し、5㎜程度のK-Ahブロックを含む。
3b	黒褐色土	Hue10YR3/1	しまりあり、炭化物とK-Ahを僅かに含む。
3c	黒色土	Hue10YR1.7/1	しまりあり、水分を多く含みねっとりしている。
4a	黒褐色土	Hue10YR2/3	しまりあり、5㎜～15㎜のK-Ahブロックを少し含む。
4b	黒褐色土	Hue10YR2/3	しまりが強い、5㎜～15㎜のK-Ahブロックを多く含む
5	黒褐色土	Hue10YR2/3	4よりしまりなし、炭化物を僅かに含み、サラサラしている。

第35図　　3号竪穴建物跡実測図



第36図　　３号竪穴建物跡出土遺物実測図（1）



第37図　　3号竪穴建物跡出土遺物実測図（2）

0.5m、主柱穴間の距離は長軸約3.0m、短軸2.5mである。

地床炉　竪穴部中央付近に堆積する炭化材を除去すると、炭化物を含む焼土面が検出された。長軸0.9m、短軸0.75mの不整な楕円形の平面形で、掘り込みは認められない。この焼土面は、竪穴建物の中心に位置するので地床炉とみなされる。

この地床炉内からはブドウ属の種子が１点とササゲ属子葉３点の炭化種実が回収された。

屋内土坑　SA3では土坑が２基検出された。

屋内土坑１はSA3の西壁付近に接する。直径約0.7mの円形プランで、0.1mの浅い掘り込みである。土坑底面より弥生土器鉢（194・197・198）が出土した。屋内土坑２は地床炉の東側に位置する。長軸約1.2m、短軸約1mの隅丸方形に近い平面プランであり、約0.23mの深い掘り込みである。土坑内には弥生土器甕（186）と磨石（205）が出土した。186の破片は土坑内から主柱穴（Ｐ４）付近の床面まで広範囲に分布する。

炭化材　主柱穴で囲まれた部分を中心に炭化材がまとまって出土した。床面から0.05～0.1m程度浮いた状態である。炭化材の方向性は、建物中心に向けて放射状や東西方向といった規則性が認められた。これら炭化材は屋根材といった建築部材と考えられ、SA3は焼失した竪穴建物とみなされる。

炭化材のうち、５点（第35図C6～C10）の樹種は、スダジイ・ツブラジイ・コナラ属アカガシ亜属との同定結果が得られた。照葉樹や落葉樹を建築部材として使用したことが判明した。また、炭化材C6のAMS年代はAD80～220（95.4％）との結果が得られた（第Ⅴ章）。

遺物の出土状況　屋内土坑出土遺物の他、床面直上の遺物は甕・壺・鉢等（182・185・187・191・193・195・197）や石皿（209）がある。これらは屋内土坑２の南側付近を中心にまとまって出土した。また甕（185）の内面底部付近には2㎜程の米粒状の炭化物が多数付着している。一方、SA3の南東隅コーナー付近には粘土塊や敲石（206）・台石（207・208）が落ち込んだように床面から約0.1～0.3m浮いた状態で出土した。

遺物　SA3出土遺物の総重量は約45ｋｇを測る。このうち、器種と器形が判明した40点を図化掲載した。

図化した遺物の内訳は、甕（180～186）、壺（187～190）、鉢（191～199）、土器片加工品（200）、石器は石錘（201・202）、磨石（203～205）、敲石（206）、台石（207・208）石皿（209）、砥石（210・211）である。

甕の底部は平底が基調で、接地面の広いもの（181・183）と狭いもの（182）がある。182には焼成破裂痕がある。複合口縁壺のうち、188は二次口縁部が垂直に立つ器形である。190は小型の広口壺と考えられる。鉢類は、体部が砲弾形（196）と逆三角形状（193・194・197）がある。198は口縁部の付け根が強く締まる器形である。182と198の内面は赤色顔料の可能性がある物質が付着。199の底部は、小さい円柱状であり特異な形状である。外面にタタキ調整の痕跡が認められる。200は土器片加工品である。甕の胴部を長方形に割り取り、その周縁を丁寧に研磨して面取りする。石錘（201・202）は砂岩製で長軸方向の両端部が打ち欠かれる。磨石（203～205）の石材は全て尾鈴山溶結凝灰岩である。敲石（206）はホルンフェルス製でずっしりと重い。両端部に敲打痕、両側面部に磨面が認められ、磨石としても使用される。石皿は砂岩製（209）で、台石は尾鈴山溶結凝灰岩製（207・208）である。砥石は三角形状を呈し、ホルンフェルス製（210）と砂岩製（211）がある。

４号竪穴建物跡（SA4）［第38～40図］

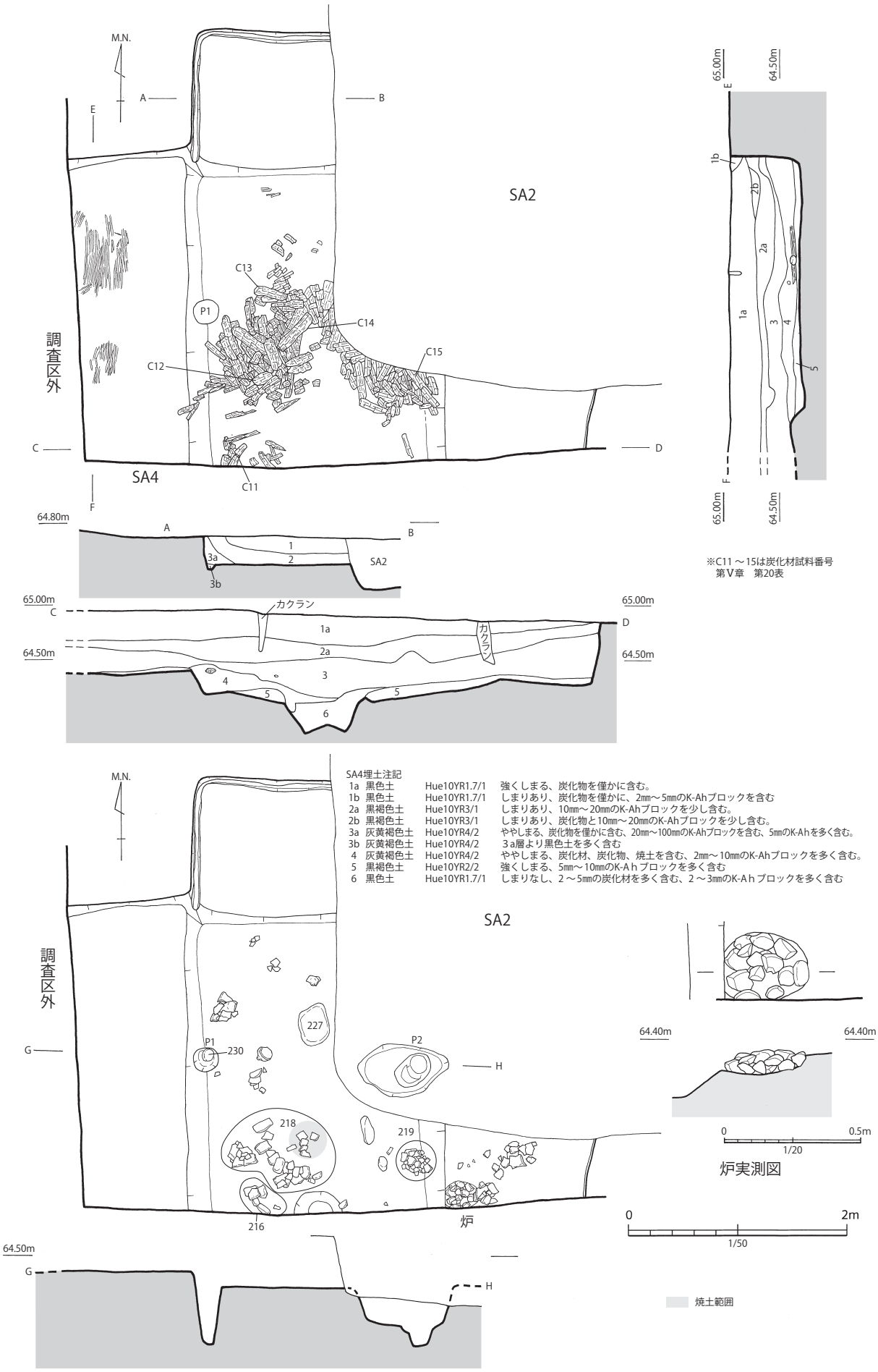
位置と規模　F1区の南側に位置する。方形の平面プランで、北側に張り出し部を有するが、建物平面の西・南側は調査区外に伸び、北・東側はSA2に切られるので全体の規模は不明である。

床面　竪穴部中央部分は幅約2mの方形に浅く掘り込まれ、その東西側は一段高いベッド状の床面となる。さらに北側壁には、長さ約1.2mの方形の張り出し部がつくので３段の床面構造となる。検出面からの深さは、それぞれ約0.5m、約0.4m、約0.3mである。

各床面は基本土層のⅥ層を水平に掘削し、掘削による窪みをK-Ahブロック土と黒色土の混合土（第38図5層）で硬く埋め戻されて形成される。

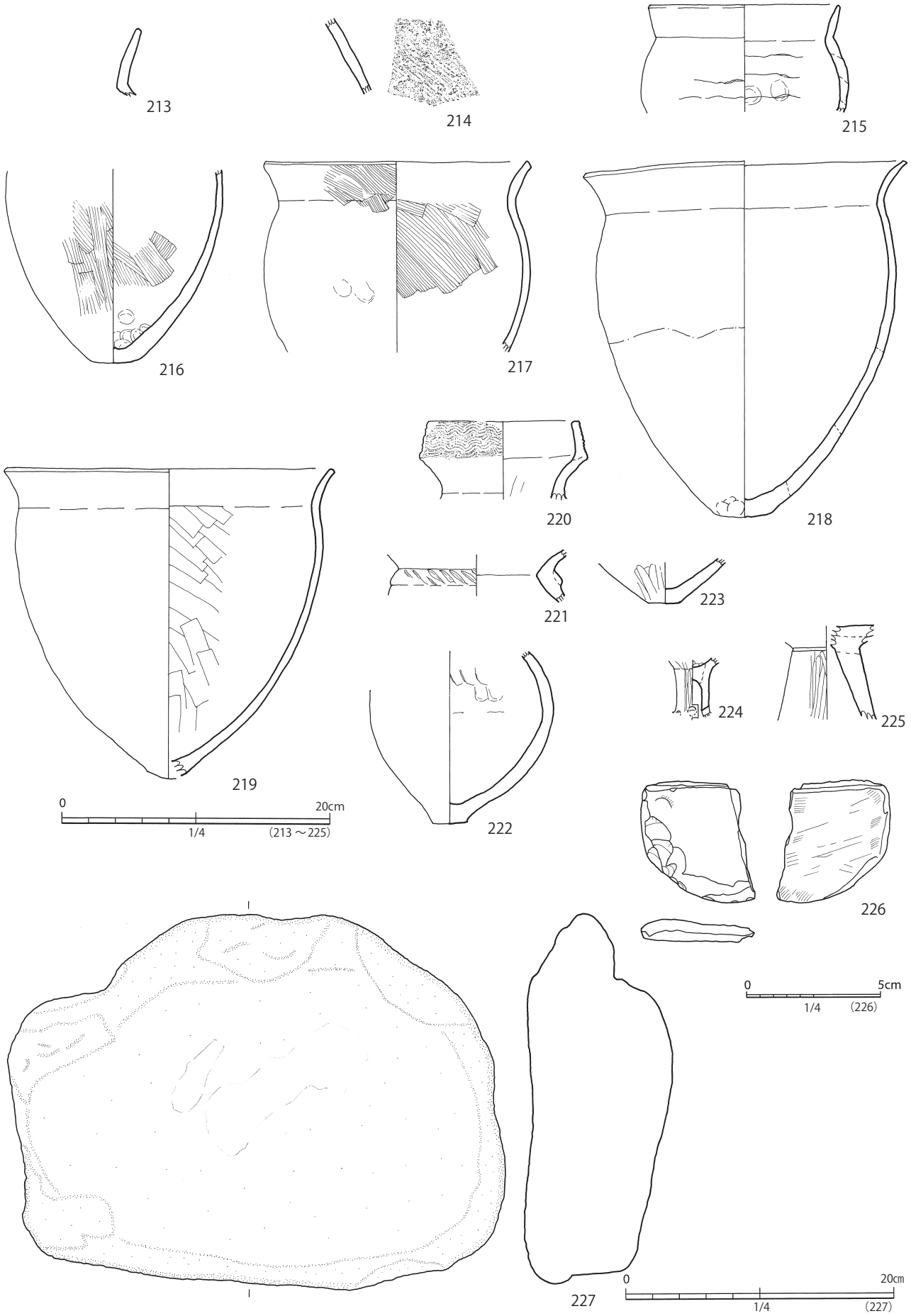
柱穴　確認できた主柱穴は２本（P1・P2）である。床面が段差となる部分に位置する。２本とも直径約0.2mで深さは約0.7mを測る。主柱穴間の距離は約2.0mである。P1・P2と屋内土坑の位置関係から、本来の主柱穴は４本であった可能性が高い。

なお、P1内に磨石（230）１点が落ち込んでいた。

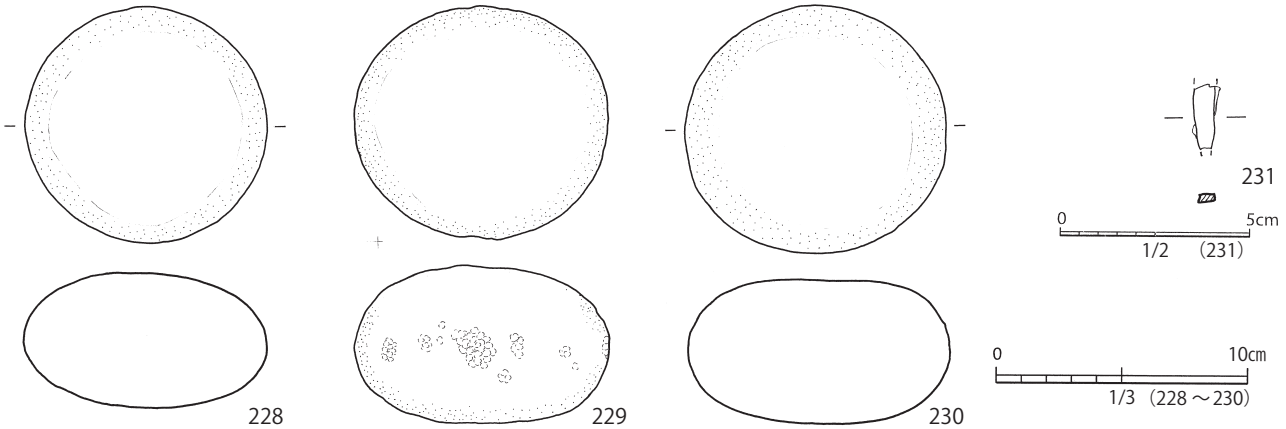


※C11～15は炭化材試料番号
第Ⅴ章　第20表

第38図　　４号竪穴建物跡実測図



第39図　　４号竪穴建物跡出土遺物実測図（1）



第40図　　４号竪穴建物跡出土遺物実測図（2）

炉　　P2の南側で掘り込みを持つ炉１基を検出した。長軸約0.7m、短軸約0.5m、深さ約0.2mの平面楕円形の掘り込みに尾鈴山溶結凝灰岩の拳大の円礫を13個敷き並べていた。円礫の表面は被熱による赤化や黒化が顕著で、構造から配石炉と捉えられる。

屋内土坑　　調査区南壁付近で土坑が１基検出された。南半分は調査区外となる。長軸約0.5m、深さ約0.5mの円形の掘り込みである。断面形は緩い「W」字形である。この屋内土坑は、恐らくSA4の中心付近に位置すると考えられる。なお、埋土を水洗選別したが、炭化種実等は回収されなかった。

炭化材（物）　　SA4の埋土下層は赤化したK-Ahブロック土や焼土塊を多く含む硬く締まった黒色土である（第38図4層）。これを除去すると、炭化材や炭化物が検出された。これらは竪穴部中央付近の床面と西側のベッド状床面の２箇所に分布する。竪穴部中央付近は、直径約10㎝、長さ約50㎝の棒状ないし柱状の炭化材が折り重なるように層厚0.3m程度に堆積していた。このうち５点（第38図C11～15）の樹種は、イヌガヤ・スダジイ・ユズリハ属・アワブキ属との同定結果が得られた。イヌガヤは針葉樹、スダジイは照葉樹、ユズリハ属は常緑樹である。アワブキ属は落葉樹もしくは常緑樹である。なお、炭化材C11のAMS年代はAD80～230（95.4％）との結果が得られた（第Ⅴ章）。一方、ベッド状床面部分では、草本類の炭化物（材）が２箇所検出された。茅のような中空で節がある管状の茎が炭化したものと考えられる（写真図版6-右下）。茎の方向は２箇所とも南北方向に揃う。

SA4の床面で検出された炭化材（物）は、出土状況や炭化材の特徴等から、垂木といった木本類とその上に葺いた草本類の屋根材であったと考えられる。さらに、炭化材（物）の上に堆積する層（第38図4層）は屋根を被覆していた土であった可能性がある。従って、SA4はいわゆる土屋根構造の竪穴建物と推測される。

なお、SA4の埋土下層の土を水洗選別したが微少な炭化物や焼土粒のみ検出された。この炭化物をAMS年代測定すると、BC2,480～2,300（95.4％）の結果が得られた。SA4出土のC11の年代よりもかなり古くなる。

遺物の出土状況　　床面直上の遺物は弥生土器の甕・鉢等（213・214・215～218・222・224）や台石（227）がある。甕は押し潰されたような状態であった。

遺物　　SA4出土遺物の総重量は約30kgを測る。このうち18点を図化掲載した。

弥生土器は甕（213・214・216～219）、壺（220～222）、鉢（223）、高坏（224・225）、石器は磨石（228～230）、石庖丁（226）、台石（227）。鉄器は鉄鏃（231）がある。

弥生土器甕の口縁部付け根の締まりは弱まり、緩く外反する（218・219）。底部は丸みを帯びた平底（216）である。214の外面にはタタキ調整の痕跡が残る。

複合口縁壺（220）の二次口縁部はわずかに内傾する。224は高坏としたが、杓子形土製品の把手部分の可能性もある。磨石は尾鈴山溶結凝灰岩製（228・230）と砂岩製（229）がある。229の端部は潰打痕が認められるので、敲石としても使用されている。磨石はSA3出土分と同様に片面のみを磨面とする場合が多い。石庖丁（226）は頁岩製で穿孔や抉りはないが、表面に粗い研ぎ面が残る。背面は擦り切り技法で折り取られる。粗製品か未製品と考えられる。台石（227）は尾鈴山溶結凝灰岩製で上面に潰打痕や磨面を認める。

231は鉄鏃の茎部分とみなされる。

５号竪穴建物跡（SA5）［第41～42図］

位置と規模等　F3区の南側に位置する。SA5の大部分は後世の耕作等で失われ、辛うじて隅角部が１箇所残存していた。SA5は、隅角部の状況から方形プランの平面形と考えられる。主柱穴等は確認できなかった。また、遺構検出の状況と層位的関係からSA5の廃絶後にSC1とSD1が掘り込まれたと判断される。

遺物　埋土中からは甕（232･233）、甑（234）、器台（235）、鉢（236）と石庖丁（237）が出土した。

232･233の底部は上げ底状であるが、232は胴部が直線的、233は逆三角形と器形に差異がある。234は鉢形の底部に円孔が３箇所穿たれたものである。円孔の直径は約5㎜と狭く、蒸器として使用されたかは不明である。

237は頁岩製の方形石庖丁で打製である。両端に抉りが入る。刃部形成の調整は粗雑である。

１号土坑（SC1）［第41図］

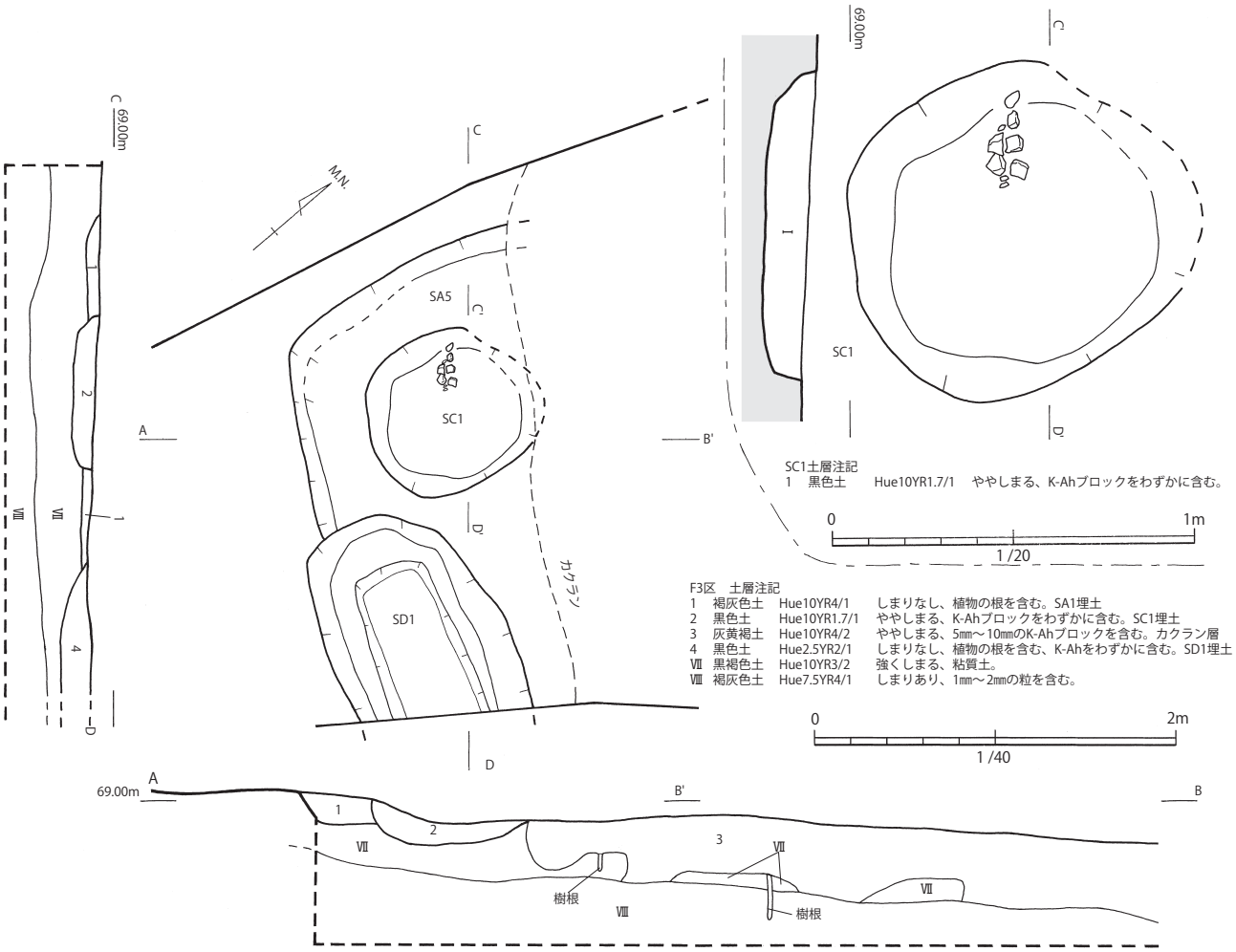
SC1はF3区に位置する。直径約0.9mの円形の平面プランで、断面形は箱形である。検出面からの深さは約0.1mで、SA5の埋没後に掘り込まれる。遺物は壺形土器（238）で焼成破裂痕が認められる。

２号土坑（SC2）［第43図］

SC2はF1区に位置し、SC3の東側にある。直径約0.7mの円形プランで、断面形は箱形、検出面からの深さは約0.15mを測る。遺物は、土器の小片が出土した。

３号土坑（SC3）［第43図］

SC3はF1区に位置し、SC2の西側にある。SC3の北側にSC5、南西側にSC4が存在する。SC3は長軸約1.3m、短軸約1.2mの不整な楕円形プランである。断面形は箱形で、検出面からの深さは約0.2mを測る。埋土中からは、人頭大や拳大の円礫が５個出土した。



第41図　F3区遺構分布図

４号土坑（SC4）［第41図］

SC4はF1区に位置し、SC3の南西側にある。一辺約0.65mの不整な方形プランである。断面形は箱形で、検出面からの深さは約0.1mを測る。遺物の出土はない。

５号土坑（SC5）［第43図］

SC5はF1区に位置し、SC3の北側にある。長軸約0.7m、短軸約0.65mの不整な楕円形プランである。断面形は箱形で、検出面からの深さは約0.1mを測る。遺物は土器片や礫が数点出土したが、図化に堪えなかった。

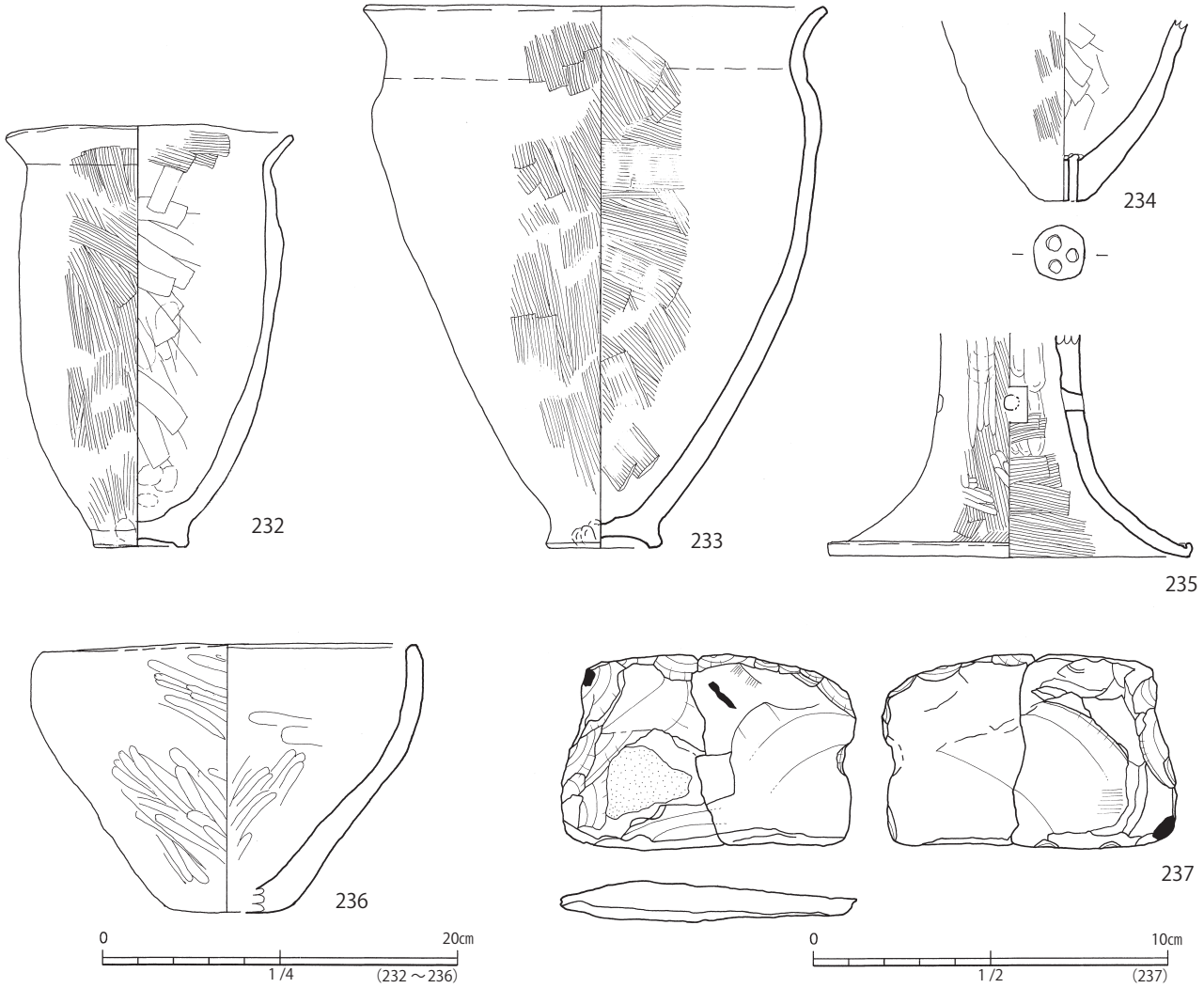
１号土坑墓（SD1）［第43図］

SD1はF3区に位置し、SA5の埋没後に掘り込まれる。東側は削平を受けている。土坑墓の構造は、不整な隅丸方形の掘り方（長軸約1.3m、短軸約１m、検出面からの深さ約0.1m）の底面にさらに方形の掘り込み（長軸約１m、短軸0.5m、深さ約0.1m）がなされる２段構造である。２段目の掘り込みが浅いので木蓋土坑墓と考えられる。

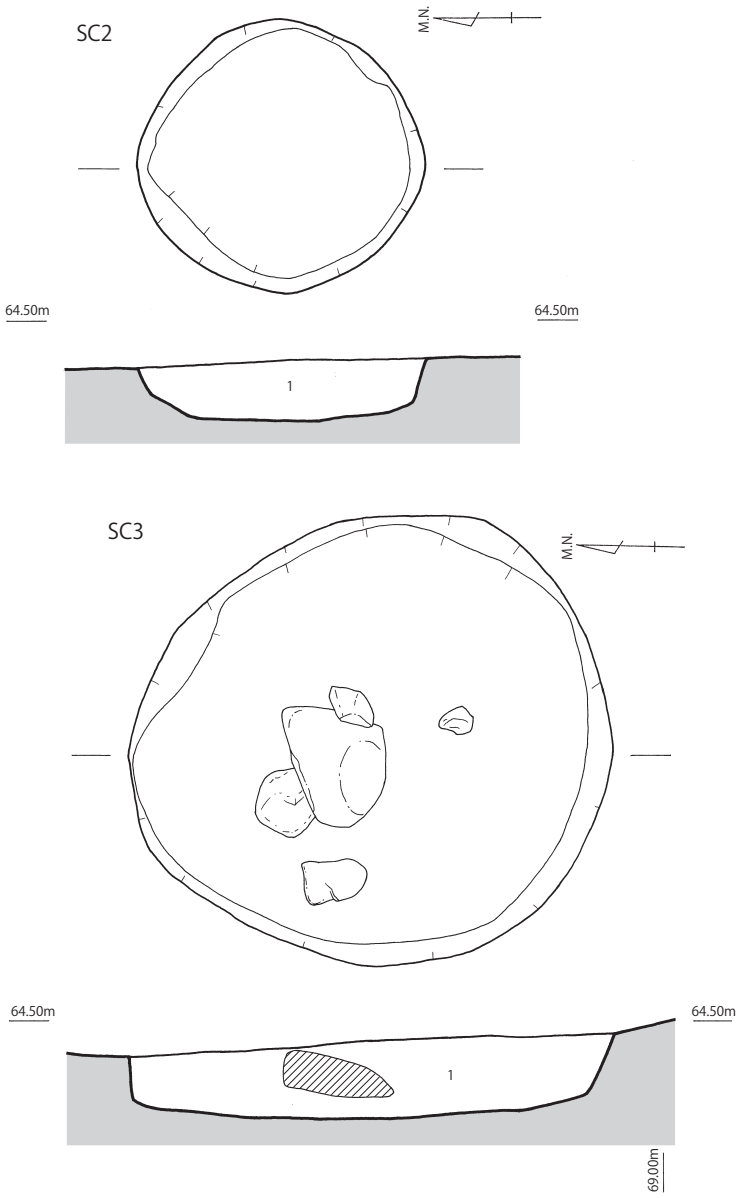
遺物は弥生土器の壺（239 ～ 242）と高坏（243 ～ 245）とミニチュア土器（246）と尾鈴山溶結凝灰岩の扁平礫が埋土の上層中（第43図1層）で散乱した状態で出土した。被葬者に伴う副葬品は認められなかった。

弥生土器は破片化が顕著で、特に高坏（243 ～ 245）は脚部の接合部分が意図的に打ち壊される。

また、243と244･245とは坏部の形態に差異が認められた。243は在地系の系譜を引くが、244･245は、口縁部が大きく外反しその端部は平坦となる特徴を備える。この特徴は、川南町東平下1号円形周溝墓出土の装飾高坏（宮崎県教委1986）の坏部形態と類似する。



第42図　　５号竪穴建物跡出土遺物実測図



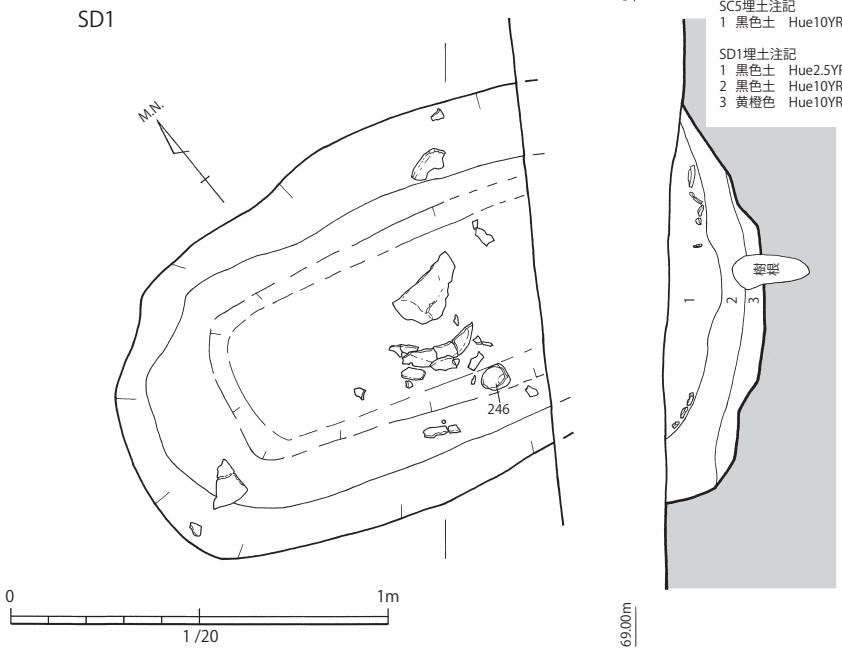
SC2埋土注記
1 黒色土 Hue10YR1.7/1 しまりなし、K-Ahブロックを少し含む

SC3埋土注記
1 黒色土 Hue10YR1.7/1 しまりなし、炭化物をわずかに、K-Ahブロックを少し含む。

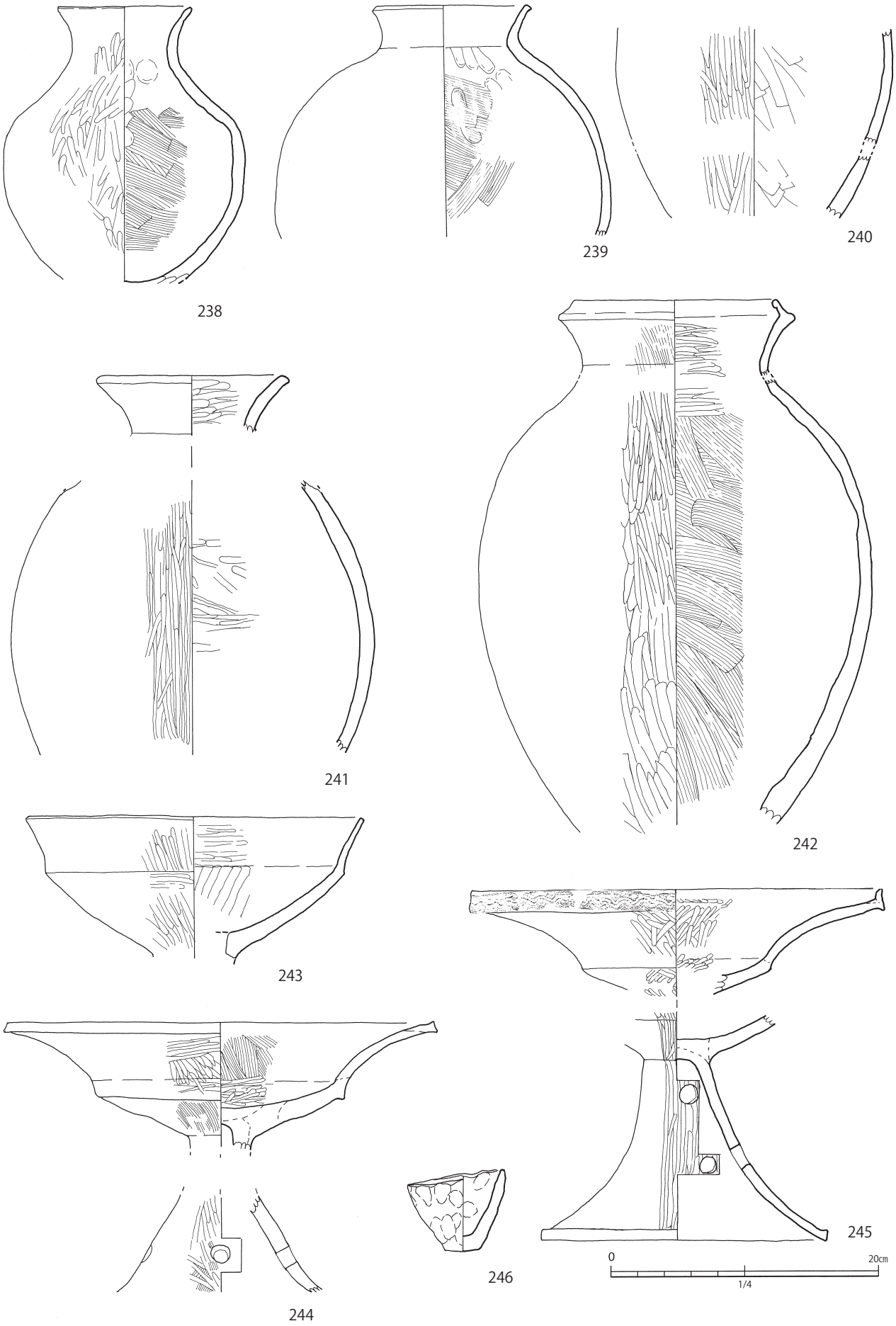
SC4埋土注記
1 黒色土 Hue10YR1.7/1 しまりなし、炭化物をわずかに含む、K-Ahブロックを少し含む。

SC5埋土注記
1 黒色土 Hue10YR1.7/1 しまりなし、K-Ahブロックを少し含む。

SD1埋土注記
1 黒色土 Hue2.5YR2/1 しまりのある箇所と、無い箇所がある。木の根を多く含む砂質土
2 黒色土 Hue10YR2/1 1層よりしまりあり、K-Ahをわずかに含む砂質土
3 黄橙色 Hue10YR7/8 K-Ah ブロックに黒色土が混じる、黒色部分にはしまりがある。



第43図　土坑・土坑墓実測図



第44図　　1号土坑墓出土遺物実測図

第６節　遺物包含層等の遺物

(1)　１号溝状遺構（SE1）［第45図］

Ｂ区で検出された近代の溝状遺構（SE1）から出土した弥生土器のうち、図化掲載可能な12点（247～258）を掲載した（第45図）。器種は甕・壺・高坏・器台がある。竪穴建物出土土器の器形と共通している。

(2)　遺物包含層［第46図］

F1区の遺物包含層（基本土層のⅢ層）で出土した遺物のうち、図化掲載可能な弥生土器20点（259～278）及び石鏃（279・280）・鉄鏃（281）を掲載した（第46図）。

弥生土器の内訳は甕（259～264）、壺（266～269・272～275）、鉢（265・270・271）と高坏（277）がある。

265は器壁が薄く丁寧なヘラミガキ調整が施される。267は広口壺で口縁部付け根の締まりが強い。268は無頸壺の口縁部で胎土は赤褐色と他の土器胎土とは発色が異なる。269は円形浮文を有する壺の口縁部と考えられるが、高坏の口縁部とも考えられる。277は高坏の脚柱部及び脚裾部である。石川悦雄氏の高坏Ｂ類に相当する（石川1998）。279・280は安山岩製の局部磨製石鏃であり、280は先端部が欠損している。

(3)　造成土［第47～48図］

F1～3区の造成土（基本土層Ⅱ層）で出土した遺物のうち、図化掲載可能な14点（282～294）を一括して掲載する。284は須玖式系の壺口縁部である。291は頁岩製の有肩打製石斧、294は砂岩製の磨石である。これらの石器は弥生時代の遺物に含まれるか不明確である。

(4)　採集遺物［第49図］

F1区の西側にある耕作地で採集された弥生土器である。旧土地所有者が耕作中に出土した土器も含まれる。これらの弥生土器は、F1区周辺の河岸段丘面上にも弥生時代の遺構が存在する可能性を強く示す。

298の鉢はSA3出土の193に、300の鉢は同じくSA3出土の198に類似する。甕（295・296）も竪穴建物跡出土の甕と同様な形態的特徴を有する。

第7節　その他の時代の遺構と遺物

Ｂ区において1号溝状遺構（SE1）が検出された（第３図）。幅0.5m、深さ1.5mで、垂直に掘り下げられる。

溝は、Ｂ区の南側から北側に向けて延伸する。出土遺物は弥生土器（第45図）と銅版転写の肥前系染付碗（第50図304・305）が出土した。304・305の年代からSE1は明治20年代以降の近代に掘削されたものと考えられるが、溝状遺構の機能や性格等は不明である。

303はＢ区5Trで出土した焙烙の口縁部である。近世の遺物と考えられる。

第9表　弥生～古墳時代土坑観察表

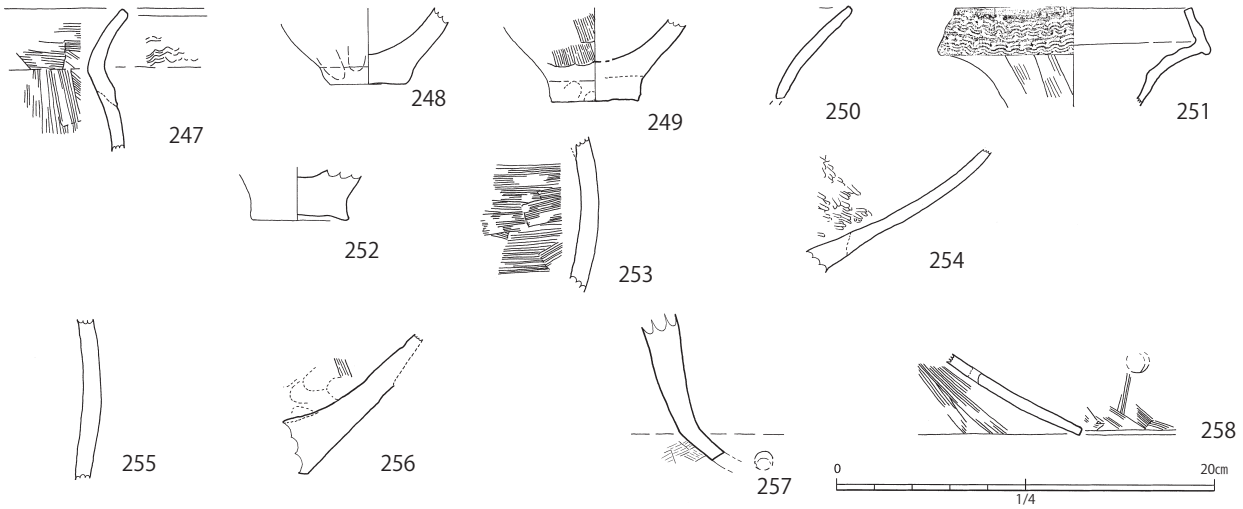
	出土位置	検出面	検出面規模〔m〕			平面形態	遺物
	〔区〕	〔層〕	長軸	×短軸	×深さ		
1号土坑	F3	-	0.9	×0.9	0.10	円	土器片
2号土坑	F1	Ⅳ	0.7	0,7	0.15	楕円	土器片
3号土坑	F1	Ⅳ	1.3	×1.2	0.20	楕円	礫
4号土坑	F1	Ⅳ	0.65	×0.65	0.10	方形	-
5号土坑	F1	Ⅳ	0.7	×0.65	0.10	楕円	土器片

第10表　弥生～古墳時代竪穴建物跡観察表

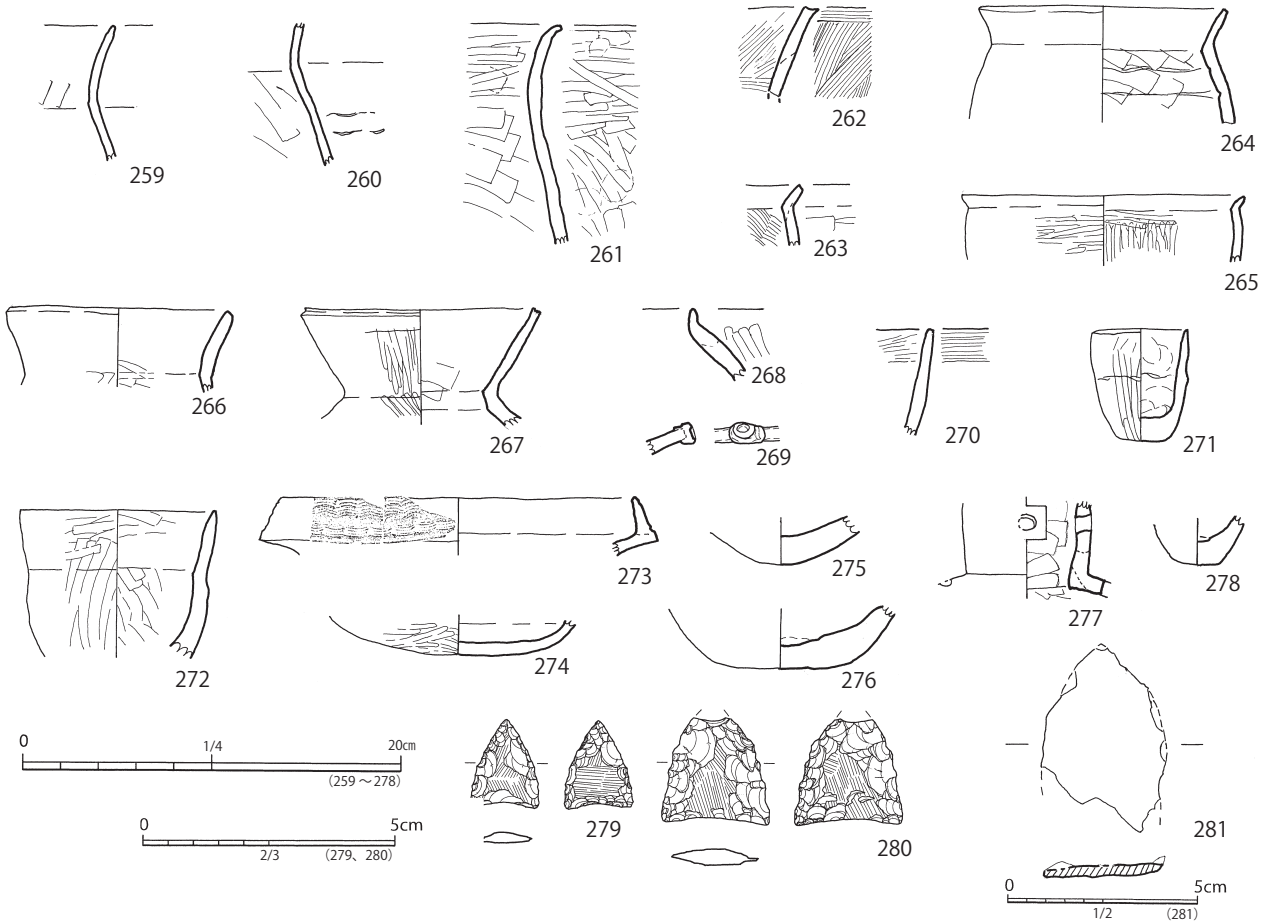
	出土位置	検出面	検出面規模〔m〕			構造（推定）	プラン	面積〔㎡〕	張り出し			炭化材	備考
	〔区〕	〔層〕	長軸	×短軸	×深さ					位置	面積〔㎡〕		
1号竪穴建物跡	A2	Ⅳ	6.0	×3.5	0.30	2　(4)	方形	12.5	有り	東側	0.85	有り	北半は削平
2号竪穴建物跡	F1	Ⅳ	5.1	×5.0	0.50	4	方形	24.5	無し	-	-	有り	-
3号竪穴建物跡	F1	Ⅳ	5.9	×5.6	0.50	4	方形(間仕切り)	39.5	無し	-	-	有り	北端は削平
4号竪穴建物跡	F1	Ⅳ	4.6	×4.0	0.50	2　(4)	方形	10.0	有り	北側	1.6	有り	SA2に切られる
5号竪穴建物跡	F3	Ⅳ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	無し	ＳＤ１・ＳＣ１に切られる。

第11表　弥生～古墳時代土坑墓観察表

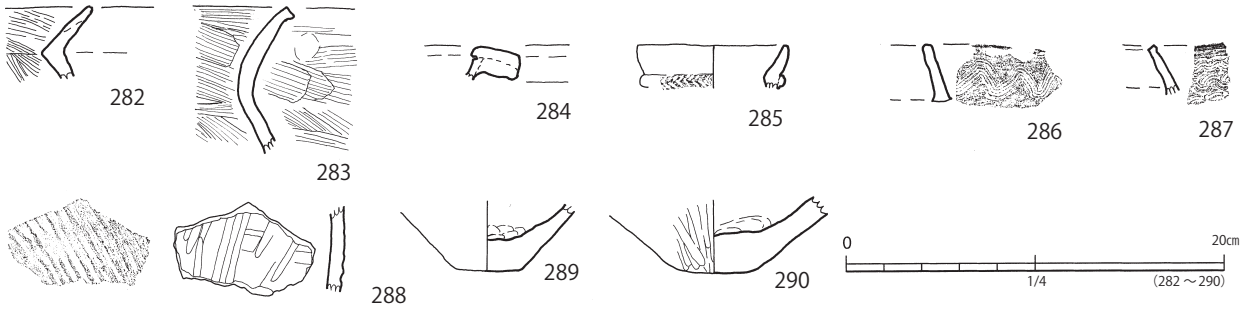
	出土位置	検出面	検出面規模〔m〕			平面形態	遺物
	〔区〕	〔層〕	長軸	×短軸	×深さ		
1号土坑墓	F3		1.3	×1.2	0.20	隅丸方形	土器



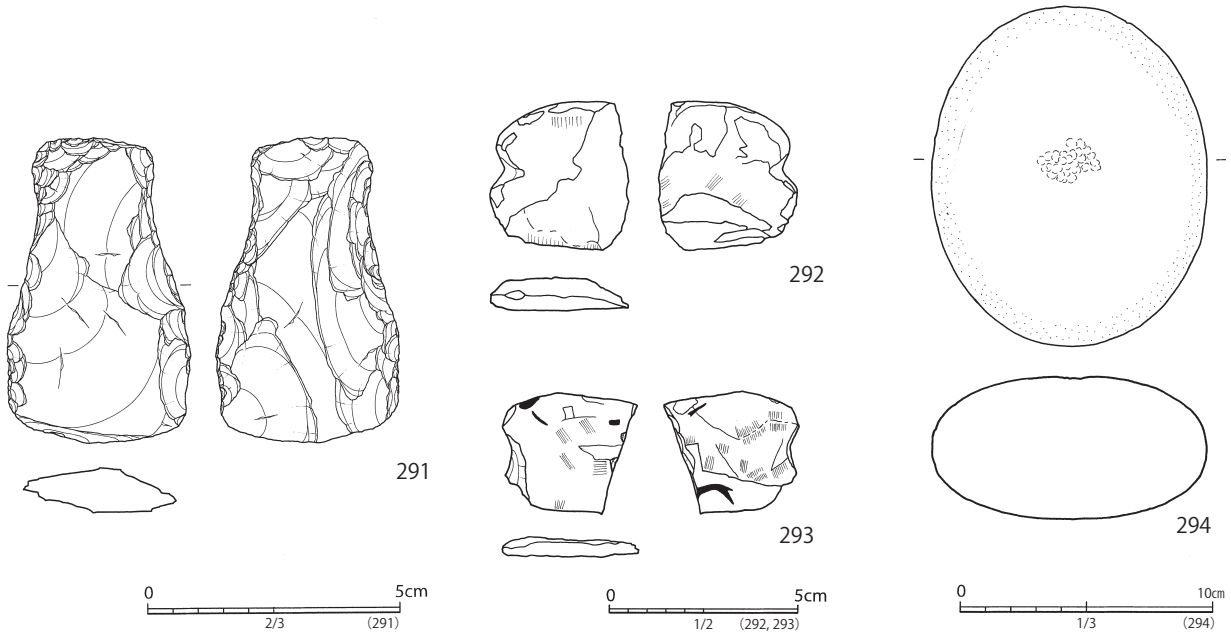
第45図　　1号溝状遺構出土遺物（弥生時代）実測図



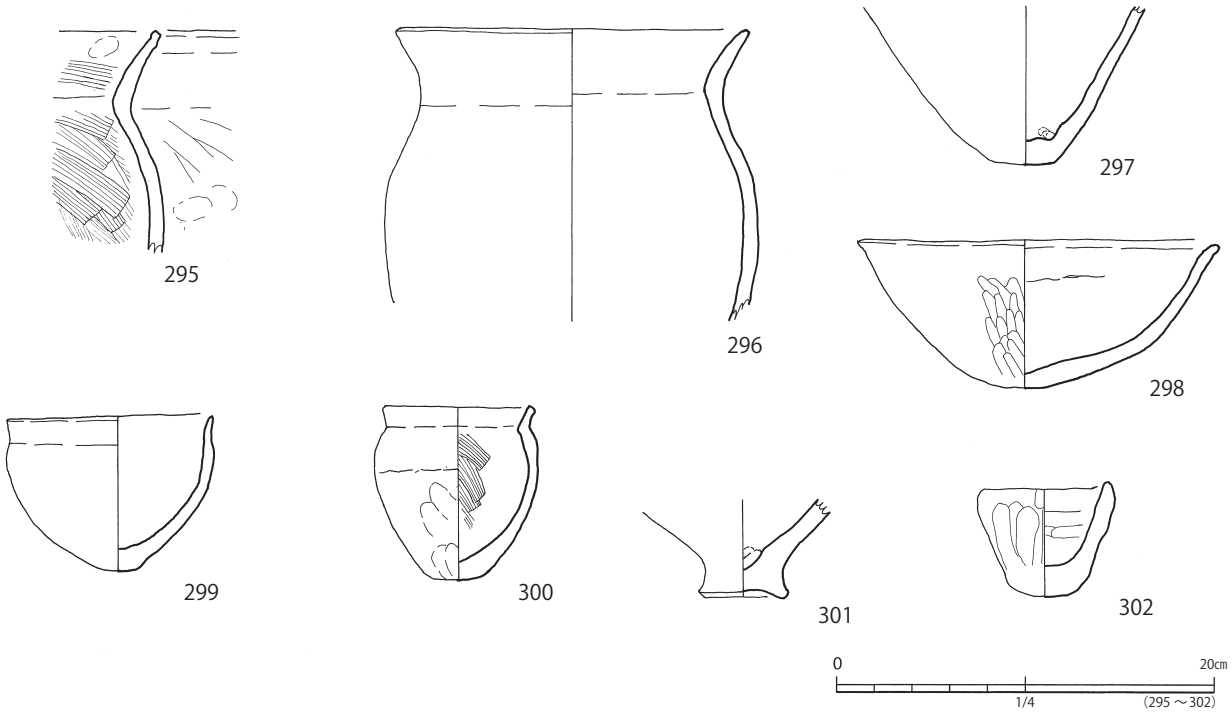
第46図　　遺物包含層出土遺物実測図



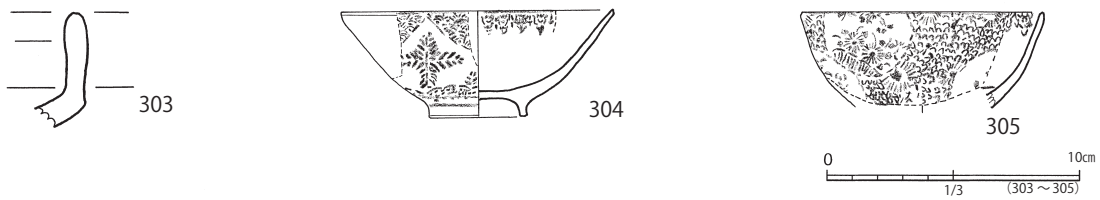
第47図　　Ⅱ層出土遺物実測図（1）



第48図　　Ⅱ層出土遺物実測図（2）



第49図　　採集遺物実測図



第50図　　1号溝状遺構遺物（近世～近代）実測図

第12表　弥生土器観察表　(1)

掲載№	器種	部位	出土地点	法量 cm（ ）は推定 口径	底径	器高	手法・調整・文様 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考	残存率	焼成
126	甕	口縁部	SA1				横ナデ、一部指押さえ	横ナデ、ハケ目	にぶい黄橙 (10YR7/3)	浅黄橙 (10YR8/4)	3mm以下の褐灰粒・2mm以下の褐粒・明褐灰粒をわずかに含む			
127	甕	口縁部	SA1	25			横ナデ、縦のハケ目のち横ナデ、斜位のハケ目	ハケ目後横ナデ、縦ハケ目、指押さえ、斜位ハケ目	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR4/7)	3mm以下の灰白粒・橙粒をわずかに含む、2mm以下の黒色光沢粒を含む		約1/5	良好
128	甕	口縁部～底部	SA1	5.2		19.6	横ナデ、ハケ、指頭圧痕	指押さえ、ハケ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/5)	6mm以下の灰白粒・4mm以下の褐灰粒をわずかに、5mm以下の明赤褐粒を多く含む	ハケ目（風化の為不明瞭）	約1/3	良好
129	甕	口縁部～胴部	SA1	25			横ナデ、斜め方向の工具ナデ	ナデ、指押さえ、斜め方向のハケ目	橙 (7.5YR7/6)	浅黄橙 (10YR8/4)	1～3mmの赤色粒・1～2mmの白色粒を多く含む		約1/6	良好
130	甕	完形	SA1	17.0	17.5	22.2	縦方向のハケ	指押さえナデ、工具ナデ、指押さえ、左斜め方向のナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	黄橙 (10YR8/4)	3.5mm以下の粒を含む	底部付近は上部に向かってハケ目を施したと思われる。	完形	良好
131	甕	口縁部～胴部	SA1	22.3			ハケ、横ナデ	指押さえ、ハケ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/5)	1～4mmの白色粒を多く含み、1mm以下の灰色粒、2mm以下の赤色粒を少し含む。		約1/3	良好
132	甕	口縁部～胴部	SA1	20.7	6.2	27.85	指押さえ、横ナデ、ハケ	指押さえ後ハケ、ハケ	浅黄橙 (10YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR4/6)	3mm以下の赤褐と4mm以下の灰白と2.5mm以下の透明の粒を多く含む		口縁1/3 底完 胴2/3	良好
133	甕	胴部～底部	SA1		6.7		縦方向工具、ハケ、指押さえ後ナデ	指でナデあげ、工具ナデ	橙 (5YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/6)	4mm以下の灰色と黒の粒と、2mm以下の灰白と透明の粒を含む。		底部完形 胴部3/5	良好
134	長頸壺	口縁部～頸部	SA1				ナデ（横方向）、ミガキ	ナデ、ミガキ	にぶい赤褐 (5YR5/4)	橙(7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む、2mm以下の白色砂粒をわずかに含む。	一部赤彩		良好
135	壺	口縁部	SA1				指ナデ	ナデ、ハケ目	橙 (2.5YR6/6)	橙 (2.5YR7/8)	1mm程度の白色粒をわずかに含む	口縁部にスス付着。		良好
136	壺	口縁部	SA1				ナデ	ミガキ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	2mm以下の灰色粒わずかに含む			良好
137	高坏	坏部	SA1				ミガキ	ミガキのち横ナデ	橙 (2.5YR6/8)	橙 (2.5YR6/8)	4mm以下の灰白粒を含む、2mm以下の灰白粒・褐灰粒・透明光沢粒を多く含む			良好
138	高坏	接合部	SA1				ナデ、はくり	ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 5YR6/6)	1mm以下の灰色粒を多く含む1mm以下の黒色光沢粒、微細な光沢粒をわずかに含む			良好
139	鉢	口縁部	SA1				ナデ、ハケ目	ハケ目、指押さえ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/3)	2mm程度の褐色砂粒を多く含む			良好
140	高坏	裾	SA1				指横ナデ、ハケ目（風化）	横ナデ、ハケ目	明褐 (7.5YR5/8)	橙(7.5YR6/8)	2mm以下の褐色・灰白色粒を多く含む。			良好
141	器台	裾部	SA1		33		縦方向ハケ目	縦方向のハケ目	橙 (5YR6/6)	明赤褐 (5YR5/6)	1mm以下の灰色粒をわずかに含む。		約1/6	良好
142	高坏	裾部	SA1				縦方向のミガキ、横ナデ	縦方向のミガキ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)	2mm以下の茶色粒を少し含む			良好
146	甕	頸部～胴部	SA2 ユカ				縦方向のハケ目、斜方向のハケ目	斜方向のハケ目、横ナデ	暗褐色 7.5YR3/3 黒褐色 7.5YR3/1	にぶい黄橙 10YR7/3	1mm以下の灰白の粒を含む	外面全体にスス付着	頸部～胴部 約1/4	良好
147	甕	口縁	SA2	(23.6)			指頭痕あり、スス付着	横ナデ、ヘラミガキ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3	1mm以下の黒い砂粒を多く含む。1mm以下の光沢のある小粒を多く含む	外面にスス付着	約1/6	良好
148	甕	胴部下半～底部	SA2				丁寧なナデ	ナデ	暗褐色 (7.5YR3/3)	黒褐 (7.5YR3/1)	2mm以下の肌色・褐色・黒色の粒、棒状に黒く光る粒を含む。			良好
149	甕	口縁～底部付近	SA2				不定方向のハケ目	指押さえ、斜方向のハケ目、縦方向のハケ目、（黒斑あり）	にぶい黄橙 10YR7/3	灰白 10YR8/2 にぶい黄褐 10YR5/3	2mm以下の灰白の粒と1mm以下の黒の粒を含む	外面に厚みのあるスス付着 内面に接合痕、スス付着		
150	甕	口縁～底部	SA2 ユカ ハリユカ	23.3	2.9	28.2	平行タタキ、部分的にケズリ・ナデ、いびつな平底	縦方向に工具によるナデ、底部に指頭痕あり	にぶい褐色 7.5YR5/4	にぶい褐色 7.5YR6/6	2mm以下の白色・褐色・黒色の粒、ガラス質で透明に光る粒を含む	内面・外面にススが付着	ほぼ完形	良好
151	壺	胴部下半～底部付近	SA2				粗いナデ	ナデ、黒斑	にぶい褐 (7.5YR5/3) 明黄褐 (7.5YR5/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	棒状に黒く光る粒、2mm以下の肌色、灰色、黒、褐、白色の粒を含む	外面一部剥落(風化か)		良好
152	甕	胴部～底部	SA 2				ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	灰黄褐 (10YR4/2)	2mm以下の灰と灰白の粒を含む	外面にスス付着 内面全体黒変		良好
153	壺	頸部～底部	SA2 ユカ	頸部径 12.3		底径 3.9	底部付近は風化・摩耗 ミガキ	指頭痕、ナデの後ミガキ ナデ・指押さえ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	2mm以下の灰色・肌色・白色・褐色の粒、黒く光る柱状の粒を少し含む			良好
154	甕	口縁	SA2 ハリユカ				横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR7/3	1mm以下の灰白の粒を含む粒を含む	外面全体にスス付着 内面一部にスス付着		
155	壺	口縁	SA2	(19.0)			横方向のナデ	横方向のナデ、ミガキ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下の灰白、黒、無色透明の粒、1mm程度の黒の柱状の光沢粒を含む	櫛描波状文 内面に接合痕		良好
156	壺	口縁 二重口縁	SA2 ハリユカ	(16.5)			横ナデ	横ナデ	明灰黄 (2.5Y5/2)	灰黄 (2.5Y6/2)	微細な灰白の粒と1mm程度の粒を含む	櫛描波状文 内面に接合痕	約1/9	良好
157	壺	口縁	SA2				暗文状のミガキ、ナデ	暗文状のミガキ、横ナデ	褐 (7.5YR4/6)	明褐 (7.5YR5/6)	3mm以下の橙色の粒を含む 1mm以下の黒い光沢粒・乳白色の粒を含む	櫛描波状文 粘土の接合不良		
158	壺	頸部	SA2				斜方向のナデ、縦方向のナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	灰黄 (2.5YR7/2)	1mm以下の灰白・黒の粒と、無色透明の光沢粒を含む	外面に接合痕		
159	高坏	口縁	SA2				横方向のナデ、横方向へのハケ目	調整不明	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下の灰白・灰・褐の粒を含む	内面にスス付着		
160	壺	頸部～胴部	SA2				横、斜方向に工具ナデ、ミガキ	工具痕、指頭痕、工具による横ナデ	にぶい褐 (7.5YR5/4) 明赤褐 (5YR5/6)	にぶい褐 (7.5YR5/4) にぶい黄褐 (10YR5/4)	2mm以下の茶・黒色粒、光沢のある白色粒を少し、1mm以下の黒色砂粒を多く含む	接合痕	約1/3	良好
161	壺	頸部～底部	SA2	頸部径 8.2	1.8	(11.4)	ミガキ、黒斑	ミガキ、ナデ、黒斑	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3) にぶい黄褐 (10YR5/3)	2mm以下の白色・肌色・灰色・黒色・褐色の粒を含む	ややいびつな平底 外面は全体的に風化 全体的に丁寧なつくり		良好
162	鉢	口縁部	SA2	(11.0)			ナデ	横方向のナデ	橙 (2.5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下の白色・肌色・黒色・褐色の粒、ガラス状に光る微粒を含む、きめ細か			
163	壺	頸部～胴部	SA2				横ナデ、縦方向、斜め方向ナデ	横ナデ、指押さえ	灰黄褐色 (10YR5/3)	褐色 (10YR4/1) 灰黄褐 (10YR6/2)	1.5mm以下の黒色粒多数2mm以下の光沢のある黒色粒少量含む		約1/4	良好
164	高坏	坏部	SA2 ハリユカ				横方向ナデ、丁寧なナデ、縦方向のミガキ	丁寧なナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	2mm以下の白色・肌色・灰色・褐色の粒を含む			良好
165	鉢	口縁	SA2				ミガキ、横ナデ	横ナデ	橙 (2.5YR6/8)	明赤褐 (5YR5/8)	4mm以下の白い粒、1mm以下の黒色、灰色、ガラス状の粒をわずかに含む			良好
166	鉢	口縁	SA2				ヨコナデ、ミガキ、黒斑	横ナデ、ミガキ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下の白い粒と灰色と黒い粒をわずかに含む			良好
167	壺	底部	SA2				接合部分に刻み目、ミガキ	ナデ	浅黄 (2.5YR7/3) 黄褐 (2.5YR5/3)	淡黄 (2.5YR8/3)	1mm以下の灰と灰白の粒を含む	底部はほぼ完		良好
168	小型土器	胴部下半～底部	SA2				ナデ	ナデ	にぶい黄褐 (10YR5/3)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	2mm以下の肌色・黒色・褐色の粒、透明に光る粒を含む	平底		良好
169	小型鉢	完形	SA2	9.8	3.5	9.2	横方向のナデ、縦方向の粗いミガキ、ナデ	横方向のナデ、丁寧なナデ、ミガキ、指頭痕あり	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	1mm以下の褐・灰白の粒を含む		完形	良好
170	壺	頸部～胴部	SA2				ミガキ、板ナデ	ミガキ	明褐 (7.5YR5/6)	明褐 (7.5YR5/6)	2mm以下の暗赤褐・1mm以下の光沢粒を含む			良好
171	鉢	口縁～底部	SA2	(21.8)	15.2	1.9	横方向のナデ、ミガキ	ナデ、横方向のナデ、一部黒斑	にぶい橙 (2.5YR6/4)	浅黄橙 (10YR8/3)	5mm以下の白い粒と、2mm以下の黒と灰色の粒を含む	外面全体にスス付着 内面底部に黒斑 いびつな粘土押さえ	1/2以上	良好
180	鉢	口縁～胴部	SA3	(12.4)			横方向のナデ、ナデの上をミガキ、ミガキ	横方向のナデ、ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下の褐色・灰白・黒の粒を多く含む	外面に黒斑あり		良好
181	甕	底部 ほぼ完形	SA3		3.2	残存高 6.2	ナデ	工具ナデ、指押さえ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm程度の淡褐色粒を含む			
182	壺	胴部～底部	SA3 ユカ		2		丁寧なナデ	工具による粗いナデ	明赤褐 (2.5YR5/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下の灰白・灰の粒を含む	全体に赤色顔料付着 接合痕、焼成破裂痕あり 打ち欠きか	底部付近 約3/4	良好
183	鉢	胴部～底部	SA3		4.8		工具による粗いナデ		にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	5mm以下の灰白・黒色粒を少し含む、2mm以下の光沢のある灰白色粒を多く含む		底部完形	良好
184	甕	口縁部	SA3	(28.0)			横ナデ	横方向の板ナデ	にぶい赤褐 (5YR5/4) にぶい褐 (7.5YR6/3)	黄褐 (2.5YR5/3)	5mm以下の灰色粒と1mm以下の白い粒を少し含む、ガラス状の粒を含む	外面全体にスス付着	口縁の約1/6	良好
185	甕	口縁～底部	SA3 ユカ		2.6	(18.0)	指押さえ、ハケ	指押さえ、黒斑	暗赤褐 (2.5YR3/3)	灰黄褐 (10YR5/2)	6mm以下の橙色、赤褐色、灰白色の粒を多く含む、1mm以下の無色の光沢粒を少し含む	外面全体的にスス付着、内面に炭化物が多く付着	約1/2	良好
186	甕	口縁～底部付近	SA3	(28.0)			頸部に打ち込み、ハケ目？、横ナデ、縦方向の工具ナデ	横方向のナデ、ナデ	にぶい赤褐 (5YR4/3) にぶい褐 (7.5YR6/3)	赤褐 (5YR6/4) にぶい黄褐 (10YR6/4)	5mm以下の灰白と褐の粒、2mm程度の黒の粒を含む	外面にスス付着 内面黒斑		良好
187	壺	口縁～胴部	SA3 ユカ	(11.0)			工具による横方向のナデ、ミガキ	横方向のナデ、丁寧なナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4) にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下の灰白と黒の粒を含む			良好
188	壺	口縁部	SA3	(17.4)			横方向のナデ、暗文状のミガキ	横方向のナデ、工具による横方向のナデ、工具の打込痕	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下の灰白と黒の粒を含む	櫛描波状文	頸部で約1/4	良好
189	壺	口縁部	SA3				横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	黒色・肌色・白色・黒く光る微粒を含む			良好
190	壺	口縁部	SA3	(10.0)			ナデ、指頭痕、黒斑	ナデ、指頭痕	にぶい黄橙 (10YR6/4) 灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄橙 (10YR6/4) にぶい黄褐 (10YR5/4)	1mm以下の黒色、褐色粒をすこし含む			良好
191	壺	口縁部	SA3	(7.9)			ナデ	ヨコナデ	明黄褐 (10YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下の灰白、黒の粒を含む	櫛描波状文	約1/4	良好
192	鉢	口縁部	SA3				横ナデ、斜め方向の粗いナデ	横ナデ、ミガキ、丁寧なナデ	明褐 (7.5YR5/6) にぶい黄橙 (10YR7/4)	橙 (7.5YR6/6) にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下の黒色の砂粒を多く含む、2mm以下の光沢のある黒色粒を少し含む		口縁で約1/5	良好
193	鉢	口縁～胴部	SA3	(16.0)			横方向のナデ、縦方向のミガキ	横方向のナデ、一部にミガキ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	2mm以下の褐色、灰白の粒を多く含む、5mm程度の灰色の粒を1ヶ含む	外面スス付着 内面黒斑		良好
194	鉢	口縁～底部	SA3	(11.9)		6.5	粗いナデ、強い指押さえ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	2mm以下の褐色、肌色、灰色、白色、黒色の粒を含む	底部は粗雑な整形でいびつ		良好
195	鉢	底部	SA3 ユカ		1.5		工具ナデ	ハケ目	橙 (5YR6/6) 灰白 (10YR7/4)	橙 (5YR6/6) にぶい黄橙 (10YR7/4)	3mm以下の褐色の粒 1mm以下の灰白、黒の粒を含む	風化著しく調整不明瞭		良好
196	鉢	口縁～胴部	SA3	(11.6)			横方向のナデ、ミガキ	横方向のナデ、丁寧なナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下の灰白・黒の粒を含む		胴部径で約1/6	良好
197	鉢	口縁～底部	SA3 ユカ	(13.8)	1.1	7.9	横ナデ、ミガキ、線刻	横ナデ、縦斜め方向のナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	3mm以下の光沢の黒色粒、2mm以下の明黄褐色粒、透明の粒を少し含む	外面スス付着 内面黒斑	ほぼ完形	良好

第13表　弥生土器観察表　(2)

掲載№	器種	部位	出土地点	法量 cm（ ）は推定 口径	底径	器高	手法・調整・文様 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考	残存率	焼成
198	鉢	口縁～底部	SA3	7.5	2.4	10.2	ミガキ、丁寧なナデ、口唇にかけて工具ナデ	横ナデ、ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)褐灰(7.5YR4/1)	にぶい橙(7.5YR7/4)	1㎜以下の肌色・黒色・褐色の粒、きめ細か	ミガキの下に接合痕、赤色顔料付着		
199	鉢	底部	SA3				ナデ、線刻、斜め方向の刻み	黒斑、ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	黒褐(10YR3/1)	3㎜以下の灰白・無色透明の粒が含まれる			
200	土器片加工品		SA3	3.2	2.1	0.8	周辺を打ち欠き丁寧に面取り		にぶい橙(7.5YR6/4)	橙(7.5YR6/6)	1㎜以下の黒・灰白の粒を多く含む			良好
213	甕	口縁	SA4					横、斜方向のナデ	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR5/4)	1㎜以下の黒色粒、光沢のある黒色粒を多数含む	外面厚みのあるスス付着		良好
214	甕	胴部	SA4				平行タタキ	ナデ	褐灰(10YR4/1)	橙(7.5YR6/6)	5㎜以下の灰白粒を含む 1㎜以下の光沢粒を多く含む 2㎜以下の灰白粒を多く含む	外面ススが濃い		良好
215	鉢	口縁～胴部	SA4	(13.0)			横ナデ、斜方向のナデ、工具痕	横ナデ、工具痕、指押さえ	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR6/3)	2.5㎜以下の灰褐色・褐色粒を少し含む、1.5㎜以下の黒色粒を少し含む	外面ススス、内面炭化物付着 接合痕	口縁で約1/4	良好
216	甕	胴部～底部	SA4		3		縦方向のナデ	横・斜ナデ、指押さえ	にぶい黄褐(10YR5/3)灰黄褐(10YR6/2)	灰黄褐(10YR5/2)	6㎜以下の明赤褐・黒・乳白色粒を少し、1.5㎜以下の褐灰色粒を多く含む	外面スス付着 内面炭化物付着		良好
217	甕	口縁～胴部	SA4	19.2			ナデ、指頭圧痕	ナデ、ハケ目	橙(7.5YR7/6)	赤褐(5YR4/6)	4㎜以下の淡橙粒を含む 2㎜以下の光沢粒を多く含む 1㎜以下の淡橙・黒色粒を多く含む		約1/2	良好
218	甕	口縁～底部	SA4	24.0	3.7	26.6	ナデ、指押さえ	ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	にぶい黄橙(10YR6/4)	3㎜以下の灰白の粒を含む	外面厚みのあるスス付着 内面炭化物付着	ほぼ完形	良好
219	壺	口縁～底部	SA2 SA4				斜め方向のタタキのち縦、斜方向への板ナデ	ヨコナデ、斜、縦方向への板ナデ	橙(7.5YR6/6)	にぶい橙(10YR6/3)	3㎜以下の乳白・茶褐・灰色粒を含む	内面黒斑		
220	壺	口縁	SA4	(11.2)			横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい橙(7.5YR7/4)	1㎜程の灰白粒を含む	櫛描波状文		良好
221	壺	頸部	SA4				ナデ	ナデ	淡黄(2.5YR8/3)	淡黄(2.5YR8/3)黄灰(2.5YR4/1)	3㎜以下の灰白・灰色の粒を含む	刻み目突帯付 一部黒斑	頸部で約1/4	良好
222	壺	頸部付近～底部	SA4		2.6		ナデ、横ナデ	横ナデ、指頭痕、粘土のしぼり	黄橙(7.5YR7/8)褐灰(7.5YR4/1)	にぶい黄橙(10YR7/4)	2㎜以下の肌色・灰色・褐色・黒色・キラキラ光る粒を含む	外面黒斑・スス付着、内面一部黒斑	2/3程	良好
223	鉢	底部付近～底部	SA4 ユカ		2.2		ミガキ		明黄褐(10YR7/6)黒(10YR2/1)	明黄褐(10YR7/6)	3㎜以下の灰色の粒と1㎜以下の白い粒、ガラス状の透明粒をわずかに含む	内面は風化		良好
224	高坏	脚部	SA4				ミガキ、穿孔	ミガキ	にぶい黄橙(10YR7/3)黒褐(10YR3/1)	灰黄褐(10YR3/1)黒褐(10YR3/1)	2㎜以下の肌色・灰色・褐色・白色・黒色の粒を含む	内外面接合痕	基部上部完形	良好
225	高坏	脚部	SA4				ミガキ、ヨコナデ	ナデ	にぶい橙(7.5YR7/3)	にぶい橙(5YR6/4)	2㎜以下の白色・肌色・黒色・褐色の粒、6㎜大のキラキラ光る粒を含む		基部径の1/5	良好
232	甕	口縁～底部	SA5	16.1	5.2	23.7	縦、斜のハケ目、指押さえ	斜のナデ、ハケ目、指押さえ	橙(7.5YR7/6)	橙(5YR6/6)	2㎜以下の灰・白・褐・茶色・透明に光る粒を含む。		ほぼ完形	良好
233	甕	口縁～底部	SA5	(26.1)	6.5	30.5	工具による横、斜方向ハケ目	横方向のハケ指押さえ	にぶい褐(7.5YR5/3)	にぶい黄褐(10YR7/2)	7㎜以下の乳白色粒を少し、5㎜以下の赤褐色粒、白色粒を多く含む		ほぼ完形	良好
234	甑	胴部～底部	SA5		2.8		縦方向のハケ目 底部ナデの後３箇所穿孔	斜、縦方向のハケ目なで	橙(7.5YR6/6)にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄褐(10YR7/4)	1㎜以下の灰白・灰・褐色の粒を多く含む			良好
235	器台	脚部	SA5	(20.2)		12.5	ハケのち縦方向のミガキ指押さえ	縦、横、斜方向のハケ目	浅黄橙(10YR8/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	2㎜以下の暗褐色粒、赤褐色粒を少し、2㎜以下の赤褐色、黒色粒を多く含む		約1/3	良好
236	鉢	ほぼ完形	SA5	20.9	7.1		ミガキ、指押さえ	ミガキ	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	4㎜以下の橙粒を含む 3㎜以下の褐灰粒を多く含む 3㎜以下の赤褐粒を含む		ほぼ完形	良好
238	壺	口縁～底部付近	SC1	(10.0)			横方向のナデ、縦方向のミガキ	横ナデ、斜方向のハケ目、指押さえ	橙(2.5YR6/8)赤褐(2.5YR4/8)	橙(2.5YR6/8)	2㎜以下の灰白の粒、微細な透明の光沢粒を含む	焼成破裂痕あり（打欠か）	口縁部約1/3	良好
239	壺	口縁～胴部	SD1				ナデ（風化のため不明瞭）	ナデ、指頭痕	にぶい橙(7.5YR7/4)	浅黄色（10YR8/4）褐灰(10YR5/1)	5㎜以下の赤褐色の粒と灰色と白の粒を少し含む		約1/4	良好
240	壺	胴部	SD1				縦方向のミガキ	縦方向のハケ目	にぶい黄橙(10YR7/3)	灰黄(2.5YR6/2)	2㎜以下の褐色・灰白・黒の粒を含む		胴部径で約1/4	良好
241	壺	胴部	SD1				ミガキ	ナデ後ミガキ	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/8)	2㎜以下の灰色・白色・黒色・褐色の粒を含む			良好
242	壺	頸部～底部付近	SD1	(15.0)			縦方向のミガキ、縦方向のハケ目、横方向のナデ	粗いナデ、横方向のミガキ、縦・横方向のハケ目	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR6/3)	2㎜以下の褐色と灰の粒を多く含む	外面一部スス付着（打欠か）	口縁で約1/5 胴部で約1/4	良好
243	高坏	坏部	SD1	(25.2)			横ナデ、縦方向のミガキ、横方向のミガキ	横方向のミガキ、縦方向の工具痕、丁寧なナデ	橙(2.5YR6.8)にぶい橙(5YR7/4)	橙(5YR6/6)にぶい黄橙(10YR5/3)	1㎜以下の灰白・褐・灰の粒を含む	外面一部スス付着	坏部で約1/2	良好
244	高坏	坏部～脚部	SD1	31.8			横ナデ、横・縦方向のミガキ、ハケ目、透し	縦・斜方向のハケ目ミガキ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	2㎜以下の灰白・灰・褐色の粒を含む	透しあり		良好
245	高坏	坏接合部～脚部	SD1				ミガキ、横方向のナデ、穿孔	指ナデ、ナデ、横方向のナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	2㎜以下の褐色・黒色・肌色・灰色の粒を含む	穿孔２段、上４・下４箇所、外面から内面に穿ち、内面粘土の返り		
246	小型鉢	口縁～底部	SD1	7.2	2.5	7.0	ナデ、指押さえ多数	粗い横ナデ、指押さえ	灰黄褐(10YR4/2)	黒褐(10YR3/2)	2㎜以下の灰白・灰の粒を多く含む	外面一部黒変、内面一部黒斑	ほぼ完形	良好
247	甕	口縁	SE1				ナデ	横方向のハケ目	にぶい褐(7.5YR5/4)	明赤褐(2.5YR5/6)	1㎜以下の白色粒、灰色粒を多く含む、1㎜以下黒色光沢粒を少し含む	接合痕、波状文		良好
248	甕	底部	SE1		4.0		指押さえ	ナデ　指押さえ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	1～2㎜の白色粒を多く含む、2㎜程の灰色粒、赤色粒を少し含む			良好
249	甕	底部	SE1				縦方向にハケ目　指ナデ	ナデ	にぶい黄褐(10YR5/4)	黒褐(10YR3/1)	4㎜以下のにぶい黄橙粒を多く含む、2㎜以下の灰白粒をわずかに含む、1㎜以下の透明光沢粒をわずかに含む			良好
250	壺	口縁部	SE1						橙(7.5YR7/6)	にぶい橙(7.5YR6/4)	4㎜以下の褐灰粒、3㎜以下のにぶい黄褐粒をわずかに含む	風化著しく調整不明		良好
251	壺	口縁部	SE1	12.4		残存高5.2cm	波状文　ハケ目　横ナデ		明赤褐色(5YR5/6)	橙(5YR6/6)	2～6㎜の無色透明・灰・黄白色のレキを多く、1㎜以下の透明・黒・灰色の粒を含む	風化著しい		良好
252	甕	底部	SE1		4.9		ナデ　横ナデ	指ナデ　指押さえ	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	1㎜いかの灰色粒、白色粒を多く含む 微細な光沢粒をわずかに含む	黒斑		良好
253	壺	胴部	SE1				縦方向に丁寧な工具ナデ、黒斑	横方向にハケ目　剥離	にぶい赤褐(5YR5/4)	明赤褐(5YR5/6)	1～2㎜の白色粒を多く含む、1㎜以下の黒色粒を少し含む。微細な光沢粒をわずかに含む			良好
254	高坏	坏部	SE1				ミガキ　縦方向工具ナデ	斜め方向のミガキ	にぶい褐(5YR5/3)	明赤褐(5YR5/6)	1㎜以下の黒色粒を多く含む、2㎜以下の白色粒をわずかに含む	風化著しい		良好
255	壺	胴部	SE1				一部工具ナデ、ハケ目	剥離あり	赤褐(5YR4/8)	明赤褐(5YR5/6)	1～2㎜の白色粒、1～3㎜の灰色粒を多く含む	風化著しい		良好
256	壺	底部付近	SE1				調整不明	上から下へ指頭圧痕 斜め方向にハケ目	浅黄橙(7.5YR8/4)	明赤灰(2.5YR3/1)	3㎜以下のにぶい黄橙粒2㎜以下の灰白粒、1㎜以下の透明光沢粒を多く含む	風化著しい		良好
257	高坏	高坏脚部	SE1				調整不明	ハケ目	浅黄橙(7.5YR8/6)	明赤褐(2.5YR5/6)	5㎜以下の赤粒、3㎜以下の黒粒、1㎜以下の透明光沢粒をわずかに含む	風化著しい		良好
258	高坏	椀部	SE1				透し　斜め縦方向のハケ目が一部見られる　圧痕あり	縦方向のハケ目	明赤褐(2.5YR5/6)	橙(2.5YR6/6)	1㎜以下の灰色粒を少し含む			良好
259	甕	口縁～頸部	F1区Ⅲ層				横方向のナデ、工具痕あり	横方向のナデ	橙(5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	3㎜以下の灰と灰白の粒を含む			良好
260	甕	頸部～胴部	F1区Ⅲ層				横方向のナデ	横方向のナデ、斜方向のハケ目	にぶい褐(7.5YR5/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	3㎜以下の灰・灰白の粒を含む			良好
261	甕	口縁～胴部	F1区Ⅲ層				横・斜・縦方向の工具痕、押さえ、横ナデ	横方向の工具痕	にぶい黄橙(10YR6/3)	黒褐(10YR3/2)	2㎜以下の灰白の粒、4㎜程の褐色の粒を含む	接合痕		良好
262	甕	口縁	F1区Ⅲ層				横ナデ、斜方向のハケ目	斜方向のハケ目、横方向のハケ目	灰黄褐(10YR5/2)	にぶい黄橙(10YR7/3)	5㎜以下の灰白の粒、微細な光沢粒を含む	接合痕 内面、外面一部スス付着		良好
263	甕	口縁～頸部	F1区Ⅲ層				横方向のナデ、工具痕あり	横方向のナデ、斜方向のハケ目	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	2㎜以下の灰・黒の粒、透明の微細な光沢粒を含む	接合痕		良好
264	甕	口縁～胴部	F1区Ⅲ層	(13.2)			横ナデ、粗いナデ、粘土のつなぎ	横ナデ、斜方向のハケ目	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR6/3)	2㎜以下の灰白・灰の粒を含む	接合痕		良好
265	鉢	口縁～胴部	F1区Ⅲ層				横方向のナデ、横方向のミガキ	横方向のナデ、縦方向のち上部を横方向のミガキ	にぶい褐(7.5YR5/4)	橙(7.5YR6/6)	1㎜以下の灰白・黒の粒と微細な透明の光沢粒を含む			良好
266	壺	口縁～頸部	F1区Ⅲ層				横方向のナデ、工具の打ち込みあり	横方向のナデ、横方向のミガキ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	1㎜以下の灰白・黒の粒を多く含む、3㎜程の褐色の粒を含む			良好
267	壺	口縁～頸部	F1区Ⅲ層	(12.6)			縦・横・斜方向のミガキ、横方向のナデ	横方向のナデ、斜め方向のハケ目、粗いナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	1㎜以下の灰白・黒の粒を含む、5㎜程の灰白の粒を1個含む			良好
268	壺	口縁～胴部	F1区Ⅲ層				横方向のナデ	ナデ	明赤褐(2.5YR5/6)	明赤褐(2.5YR5/6)	1㎜以下の灰白・黒の粒、微細な光沢粒を含む			
269	壺	口縁部	F1区Ⅲ層				ナデ	ナデ	淡黄(2.5Y8/3)	灰黄(2.5Y7/2)	1㎜以下の灰と褐の粒を含む	装飾付		良好
270	鉢	口縁部	F1区Ⅲ層				横ナデ、横方向のナデ、ナデ	横方向のナデ、ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄(2.5YR6/3)	2㎜以下の灰白、黒の粒を含む			良好
271	コップ状	完形	F1区Ⅲ層				縦方向のミガキ、ナデ	丁寧な指ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	1㎜以下の灰白の粒を多く含む	内面・外面に接合痕		良好
272	壺	口縁～胴部	F1区Ⅲ層	(10.4)			横方向・縦方向の工具痕横ナデ	横・縦方向の工具ナデ、ナデ、	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい褐(7.5YR6/4)	2㎜以下の灰白の粒を含む			
273	壺	口縁部	F1区Ⅲ層	(18.6)			横方向のナデ、横方向のナデ	横方向のナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	灰白と無色透明の微細な粒を含む	櫛描波状文		良好
274	壺	底部	F1区Ⅲ層		(11.2)		横方向のミガキ	ナデ	明赤褐(2.5YR5/6)にぶい黄橙(10YR6/4)	橙(2.5YR6/6)	5㎜以下の灰白の粒、2㎜以下の灰の粒を含む			良好
275	壺	底部	F1区Ⅲ層		1.9		ナデ	ナデ	にぶい褐(7.5YR5/4)	にぶい黄橙(7.5YR6/4)	5㎜以下の灰白の粒を含む	内面に一部炭化物付着		良好
276	甕	底部	F1区Ⅲ層				ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	2㎜以下の灰白・灰、微細な黒と透明のガラス状の粒を含む	外面にスス付着		良好

第14表　弥生土器観察表　(3)

掲載No.	器種	部位	出土地点	法量 cm（ ）は推定 口径	底径	器高	手法・調整・文様 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考	残存率	焼成
277	高坏	脚～裾部	F1区 Ⅲ層				ナデ	ナデ、横方向の工具痕	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	2mm以下の灰白・灰・褐色の粒を含む	脚・裾とも透かしあり		良好
278	小型	胴部～底部	F1区 Ⅲ層		2.6		ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	2mm以下の灰白の粒、5mm程度の灰白の粒１個含む	外面一部黒斑		良好
282	壺	口縁～頸部	F区 Ⅱ層				ナデ	ハケ目	淡黄 (2.5Y8/3)	淡黄 (2.5YR8/3) にぶい黄橙 (10YR5/4)	2mm以下の褐色・灰白の粒を含む			良好
283	甕	口縁	F区 Ⅱ層				横方向のナデ、ハケ目、斜め方向のハケ目、指押さえ	横方向のハケ目	黒褐 (10YR3/1)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	1mm以下の灰白と無色透明の粒が含む			良好
284	壺	口縁部	F区 Ⅱ層				横方向のナデ、横ナデ	ナデ、指ナデ	橙 (7.5YR6/6)	浅黄橙 (10YR8/4)	2mm以下の灰・黒の粒を含む			良好
285	壺	口縁～頸部	F区 Ⅱ層	(8.1)			横方向のナデ、刻み目突帯	横方向のナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	1mm程の褐色と灰白の粒を含む			良好
286	壺	口縁部	F区 Ⅱ層				横方向のナデ	指押さえ、横方向のナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下の灰白・灰の粒、無色透明・黒の柱状の光沢粒を含む	櫛描波状紋		良好
287	壺	口縁～頸部	F区 Ⅱ層				横方向のナデ、刻み目突帯	横方向のナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm程の灰白の粒と無色透明の微細な粒を含む	傾き不明、黒斑あり		良好
288	甕	胴部	F区 Ⅱ層				タタキ	ナデの後ミガキ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	2mm以下の灰白の粒を含む			良好
289	壺または甕	底部	F区 Ⅱ層				ナデ、ケズリ状の板ナデ	ナデ、指押さえ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	4mm以下の灰白と1mm以下の透明の粒が含まれる			良好
290	壺または甕	底部	F区 Ⅱ層				縦方向のミガキ、ミガキ	ナデ、指押さえ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	3mm以下の灰白・灰褐の粒を含む			良好
295	甕	口縁～胴部	採集				ナデ、横ナデ、指押さえ	横・斜方向のハケ目、指押さえ	淡黄 (2.5Y8/3) にぶい黄 (2.5YR6/3)	黄褐 (2.5YR6/3)	2mm以下の灰白・灰の粒を含む			良好
296	甕	口縁～胴部	採集				工具痕、ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/2) にぶい黄褐 (10YR5/3)	明黄褐 (10YR7/2) 灰黄褐 (10YR6/2)	5mm以下の灰褐色粒、黒褐色粒、3mm以下の灰黄色粒、にぶい橙を多く含む			良好
297	甕	胴～底部	採集		3.1	残存高 8.7	縦位のハケ目	指押さえ	黄灰 (2.5YR5/1)	灰黄褐 (10YR6/29	1mm以下の黒色砂粒を含む			良好
298	鉢	口縁～底部	採集		2.1	7.6	ミガキ、ナデ	横ナデ、ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/3) にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3) にぶい橙 (5YR6/4)	3mm以下の黒・赤褐・褐灰色粒を多く、1mm以下の赤褐・黒色粒を多く含む		約1/4	良好
299	鉢	口縁～底部	採集		1.8	8.1	ナデ	ナデ	にぶい黄褐 (10YR5/3) 灰白 (2.5YR8/2)	灰白 (2.5Y8/2)	2mm以下の灰の粒を含む	風化のため調整不明瞭		良好
300	鉢	口縁～底部	採集	7.5		9.2	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR5/4)	4mm以下の褐灰、3mm以下の黄・黒粒を含む		ほぼ完形	良好
301	壺	底部付近～底部	採集		(4.1)		ナデ	ナデ、指押さえ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	3mm以下の褐色と灰白の粒を含む		底部で1/4	良好
302	小型	口縁～底部	採集	6.6	3.3	6.0	全体に縦方向の指ナデ	横方向の指ナデ	明赤褐 (2.5YR5/6) 明黄褐 (10YR6/6)	明赤褐 (2.5YR5/6) 明黄褐 (10YR6/6)	2mm以下の灰白・灰の粒を含む			

第15表　弥生～古墳時代石器計測表

掲載No.	器　種	石　材	出土地点	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重　量(g)	備考
145	石庖丁	頁岩	SA1	5.7	2.4	0.6	9.0	
172	石斧	頁岩	SA2	12.7	4.2	3.8	359.2	
173	管玉	緑色頁岩	SA2	1.0	0.25	0.25	0.1	
174	管玉	緑色頁岩	SA2	1.0	0.35	0.35	0.1	
175	管玉	碧玉	SA2	0.9	0.32	0.32	0.2	
201	石錘	砂岩	SA3	3.5	3.8	1.1	24.5	
202	石錘	砂岩	SA3	4.5	6.3	0.95	43.8	
203	磨石	尾鈴山溶結凝灰岩	SA3	5.9	5.9	2.85	148.9	
204	磨石	尾鈴山溶結凝灰岩	SA3	6.5	6.8	3.2	214.5	
205	磨石	尾鈴山溶結凝灰岩	SA3	12.3	12.1	7.0	1,477.5	
206	敲石	ホルンフェルス	SA3	19.0	9.1	5.65	1,496.5	
207	台石	尾鈴山溶結凝灰岩	SA3	33.7	23.7	13.9	1,850.0	
208	台石	尾鈴山溶結凝灰岩	SA3	39.5	24.7	11.3	1,775.0	
209	石皿	砂岩	SA3	23.5	13.35	7.9	276.9	
210	砥石	ホルンフェルス	SA3	3.9	4.3	1.4	26.3	
211	砥石	砂岩	SA3	3.0	3.9	0.7	6.2	
226	石庖丁	頁岩	SA4	4.6	4.25	0.85	17.1	擦り切り技法で折り取り
227	台石	尾鈴山溶結凝灰岩	SA4	37.0	28.0	11.0	1,750.0	
228	磨石	尾鈴山溶結凝灰岩	SA4	9.3	9.6	5.3	688.5	
229	磨石	砂岩	SA4	10.1	9.25	6.25	853.2	
230	磨石	尾鈴山溶結凝灰岩	SA4	9.8	10.4	5.7	885.9	
237	石庖丁	頁岩	SA5	5.5	8.75	1.2	60.6	
279	石鏃	安山岩	F1区	16.4	13.4	2.0	0.5	局部磨製
280	石鏃	安山岩	F1区	19.9	21.2	3.2	1.5	局部磨製
291	石斧	頁岩	F1区	60.5	36.2	8.9	20.6	
292	石庖丁	頁岩	F1区	3.9	3.6	0.8	15.5	
293	石庖丁	頁岩	F3区	3.1	3.6	0.5	6.8	
294	磨石	砂岩	F3区	13.4	10.9	5.6	1,280.5	

第16表　弥生～古墳時代鉄器計測表

掲載No.	器　種	部位	出土地点	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重　量(g)	備考
143	摘鎌		SA1	2.6	1.6		2.4	
144	不明		SA1	2.3	1.5		1.8	
176	不明	茎部	SA2	3.1	0.9		1.5	下半に有機質由来のサビ
177	鉄鏃	刃先	SA2	2.5	2.0		3.6	柳葉？、サビふくれあり
178	不明	茎部	SA2	1.7	0.5		0.3	全体に有機質由来のサビ
179	鉄鏃		SA2	7.9	1.7		7.2	ほぼ完形
212	鉄鏃	茎部	SA3	4.4	1.0		3.4	有機質由来のサビ
231	不明	茎部	SA4	1.7	0.5		0.8	全体に有機質由来のサビ
281	鉄鏃	鏃身部	F1	3.9	3.1		6.0	

第17表　陶磁器観察表

掲載No.	器種	部位	出土地点	法量 cm（ ）は推定 口径	底径	器高	手法・調整・文様 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考	焼成
303	焙烙	口縁部	B区 5Tr	(16.9)				横ナデ	明褐 (7.5YR5/6)	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下の褐、白、灰色の粒を含む、2mm大の茶・無色透明のレキを少し含む	残存高(4.4cm)	良好
304	碗	口縁～底部	SE 1 & Tr	(10.7)		4.2	釉ケズリ	ハマ痕（四ツ足）				銅板プリント、明治以降	
305	碗	口縁～胴部	SE 1 & Tr	(9.5)								銅板プリント、明治以降	

第Ⅴ章　自然科学分析の結果

はじめに

本遺跡の竪穴建物跡の床面からは多くの炭化材が出土し、焼土も確認された。また微細な遺物を検出するため床面の土をサンプルした。これらをフローテーション作業し種実を回収した。この遺物を分析することで当時の遺跡周辺の環境を復元することの手がかりとする目的から種実同定を行った。また、当時の木材利用状況や近隣森林の植生を推定するため炭化材の樹種同定を行い、これらの試料について年代測定をした。

第１節　放射性炭素年代測定

１．試料と方法

測定試料の詳細と放射性炭素年代測定の前処理・調整法および測定法を第18表に示す。

AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

２．測定結果

加速器質量分析法（AMS）によって得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素（^{14}C）年代および暦年代（較正年代）を算出した。第19表にこれらの結果を示し、第51図に暦年較正結果（較正曲線）を示す。

（１）^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料のδ^{13}C値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正する。

（２）放射性炭素（^{14}C）年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、現在（AD1,950年基点）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は5,730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。統計誤差（±）は１（68.2％確率）である。^{14}C年代値は下１桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下１桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

（３）暦年代（Calendar Age）

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中^{14}C濃度の変動および^{14}Cの半減期の違いを較正することで、放射性炭素（^{14}C）年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な^{14}C測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 09、較正プログラムはOxCal 3.1である。

暦年代（較正年代）は、^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により1σ（68.2％確率）と2σ（95.4％確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の1σ・２σ値が表記される場合もある。（　）内の％表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

３．所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、№１（SA1土器）では1,945±20年BP（２σの暦年代でAD1～90, 100～120年）、№７（SA3焼土）では3285±20年BP（BC1620～1500年）、№10（SA4焼土）では3920±20年BP（BC2480～2300年）、№12（SA1床面）では1945±20年BP（AD1～90, 100～130年）、№16（SA3床面）では1865±25年BP（AD80～220年）、№21（SA4床面）では1855±20年BP（AD80～230年）の年代値が得られた。

文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon,37(2), p.425-430.

Bronk Ramsey C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.

Paula J Reimer et al., (2009) IntCal 09 and Marine 09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, p.1111-1150.

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代, p.3-20.

第２節　炭化材の樹種同定

1. 試料

試料は、竪穴建物跡（SA １、SA ２、SA ３、SA ４）の床面から採取された炭化材15点である。試料の詳細を分析結果表（第20表）に示す。

２．方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50 ～1,000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

３．結果

第20表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

イヌガヤ　*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch　**イヌガヤ科**［第52-1図］　仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は非常に狭く樹脂細胞が散在する。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はトウヒ型で1分野に1～2個存在する。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。樹脂細胞が散在する。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で1～10細胞高ぐらいである。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。樹脂細胞が多く見られる。以上の形質よりイヌガヤに同定される。イヌガヤは、岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の低木または小高木で、高さ10～15m、径20 ～30㎝である。材は、やや堅硬で木理は緻密であるが不整でしばしば波状を呈する。建築、器具、土木、ろくろ細工、薪炭などに用いられる。

スダジイ　*Castanopsis sieboldii* Hatusima　**ブナ科**［第52-2図］　横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。以上の形質よりスダジイに同定される。スダジイは本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。

ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata* Schottky　**ブナ科**［第52-3・4図］　横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は単列のものと集合放射組織が存在する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。

コナラ属クヌギ節　*Quercus* sect. Aegilops　**ブナ科**［第52-5図］　横断面：年輪のはじめに大型の道管が１～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60㎝に達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　**ブナ科**［第52-6図］　横断面：中型から大型の道管が1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

ユズリハ属　*Daphniphyllum*　**ユズリハ科**［第52-7図］

横断面：小型で角張った道管がほぼ単独で密に散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～50本である。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅である。以上の形質よりユズリハ属に同定される。ユズリハ属にはユズリハ、ヒメユズリハ、エゾユズリハなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木または低木である。

アワブキ属　*Meliosma*　**アワブキ科**［第52-8図］　横断面：小型の道管が単独ないし２～４個放射方向にむかって複合して散在する散孔材であるが、その複合部に１～２個の柔細胞をはさんでいるものが見られる。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なく10本前後である。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～４細胞幅である。以上の形質よりアワブキ属に同定される。アワブキ属は本州、四国、九州に分布する。アワブキ、ヤマビワ、ミヤマホウソなどがあり、落葉または常緑の低木から高木である。

４．所見

樹種同定の結果、ツブラジイ５点、スダジイ３点、イヌガヤ２点、コナラ属クヌギ節２点、コナラ属アカガシ亜属１点、ユズリハ属１点、アワブキ属１点が同定された。ツブラジイとスダジイは、暖地の山野に生育する常緑高木であり、照葉樹林の主要素であるが二次林要素でもある。スダジイは沿海地に、ツブラジイは内陸部に多いが、しばしば生育場所が接触し混成していることがある。イヌガヤは、森林下の谷側などに生育する常緑の低木または小高木で、適潤性の土壌を好む。コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、山林や乾燥した台地、丘陵地に生育する落葉高木で二次林要素でもある。コナラ属アカガシ亜属は、一般にカシと総称されるが、イチイガシ、アラカシなど多くの種があり、イチイガシは自然度が高いが、アラカシは二次林性でもある。ユズリハ属は山地や暖地の海岸沿いに生育する常緑の小高木から高木である。アワブキ属にはアワブキ、ヤマビワなどの種があり、アワブキは山地に生育する落葉高木、ヤマビワは暖地の常緑林内に生育する常緑小高木である。いずれの樹種も当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。

文献

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．文永堂出版，290p.

島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣，296p.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史．植生史研究特別１号．植生史研究会，242p.

第３節　炭化種実同定

１．試料

試料は、竪穴建物跡（SA 1、SA 2、SA 3、SA 4）の床面や焼土などから採取された選別済みの種実類（炭化物）である。試料の詳細を分析結果表に示す（第21表）。

２．方法

種実類は肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

３．結果

（１）分類群

種実同定の結果、樹木１、草本３の計４分類群が同定された。第21表に同定結果を示し、主要な分類群について写真を示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載し、写真に示したものはサイズを記載した。

〔樹木〕ブドウ属　*Vitis*　**種子**　**ブドウ科**　長さ×幅：2.40㎜×2.45㎜

黒褐色で卵形を呈し先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。

〔草本〕イネ　*Oryza sativa* L.　**果実**　**イネ科**　長さ×幅：4.77㎜×3.21㎜、4.60㎜×2.42㎜

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

コキンバイザサ　*Hypoxis aurea* Lour.　**種子**（完形・破片）　**キンバイザサ科**　長さ×幅：1.35㎜×1.23㎜

暗灰褐色で広楕円体を呈し粗面。基部の片側に下方へ曲がる突起があり、へそはその先端部にある。

ササゲ属　Vigna　**子葉**（破片）　**マメ科**

黒色で楕円形を呈す。全て破片である。ササゲ属にはリョクトウ、アズキ、ササゲなどの栽培植物が含まれるが、現状では識別は困難である。

その他　炭化材片、不明炭化物（種実以外）

（2）種実群集の特徴

1）SA 1（試料1～4）　試料2土器（132）内では**コキンバイザサ（2個）**が認められた。試料1土器（130）、試料3（床面3区）、試料4（床面4区）では種実類は認められなかった。

2）SA 2（試料5、6）　試料5（床面）と試料6（床面NW）では、**イネ**（1個）が認められた。

3）SA 3（試料7、8）試料7（焼土NE）では樹木種実の**ブドウ属**（1）、草本種実の**ササゲ属**（3）が認められた。試料8（焼土NW）に種実類は認められない。

4）SA 4（試料9、10）試料9（焼土）と試料10（焼土）では、種実類は認められなかった。

5．所見

種実同定の結果、SA 1の土器内№17ではコキンバイザサ、SA 2の床面ではイネ、SA 3の焼土ではブドウ属とササゲ属が認められた。

栽培植物ではイネがあり、ササゲ属にも栽培植物が含まれる。コキンバイザサは日当たりのよい山林内に生育し、比較的自然度が高い草本である。当時の周囲の植生が反映されたと考えられるが、炭化していることから何らかの形で利用されていた可能性も考えられる。ブドウ属は野生のものが採取されたと考えられる。

文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.

笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第2巻生業，雄山閣　出版，p.131－139.

南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276－283.

第18表　測定試料詳細

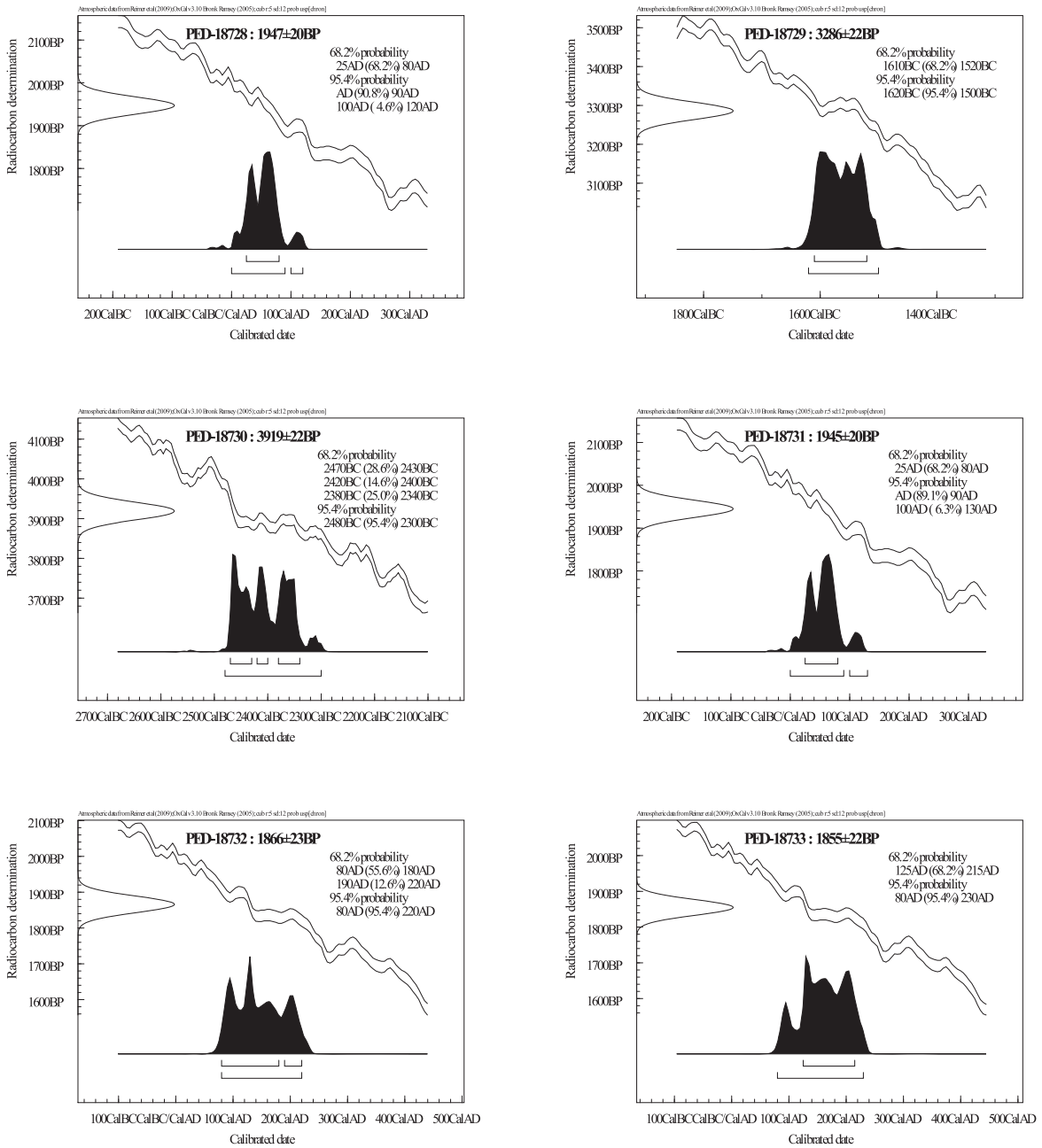
試料No	地点	出土位置	種類	前処理・調整法	測定法
1	ＳＡ１	土器（132）内	炭化物	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	ＡＭＳ
7	ＳＡ３	焼土	炭化物	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	ＡＭＳ
10	ＳＡ４	焼土	炭化物	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	ＡＭＳ
12	ＳＡ１	床面	炭化材（ツブラジイ）	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	ＡＭＳ
16	ＳＡ３	床面	炭化材（スダジイ）	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	ＡＭＳ
21	ＳＡ４	床面	炭化材（イヌガヤ）	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	ＡＭＳ

第19表　放射性炭素年代測定結果

試料№	測定番号 PED-	δ^{13}C (‰)	暦年較正用年代(年BP)	^{14}C年代 (年BP)	暦年代（較正年代）	
					1σ（68.2%確率）	2σ（95.4%確率）
1	18728	-28.81±0.22	1,947±20	1,945±20	AD25-80(68.2%)	AD1-90(90.8%) AD100-120(4.6%)
7	18729	-29.18±0.16	3,286±22	3,285±20	BC1,610-1,520(68.2%)	BC1,620-1,500(95.4%)
10	18730	-25.57±0.16	3,919±22	3,920±20	BC2,470-2,430(28.6%) BC2,420-2,400(14.6%) BC2,380-2,340(25.0%)	BC2,480-2,300(95.4%)
12	18731	-27.82±0.16	1,945±20	1,945±20	AD25-80(68.2%)	AD1-90(89.1%) AD100-130(6.3%)
16	18732	-28.37±0.28	1,866±23	1,865±25	AD80-180(55.6%) AD190-220(12.6%)	AD80-220(95.4%)
21	18733	-28.17±0.19	1,855±22	1,855±20	AD125-215(68.2%)	AD80-230(95.4%)

第20表　樹種同定結果

番号	遺構	出土位置	備考	結果（学名／和名）	
11	ＳＡ１	床面	C1	*Castanopsis cuspidata* Schottky	ツブラジイ
12	ＳＡ１	床面	C2	*Castanopsis cuspidata* Schottky	ツブラジイ
13	ＳＡ２	床面	C3	*Quercus sect. Aegilops*	コナラ属クヌギ節
14	ＳＡ２	床面	C4	*Castanopsis cuspidata* Schottky	ツブラジイ
15	ＳＡ２	床面	C5	*Quercus sect. Aegilops*	コナラ属クヌギ節
16	ＳＡ３	床面	C6	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ
17	ＳＡ３	床面	C7	*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
18	ＳＡ３	床面	C8	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ
19	ＳＡ３	床面	C9	*Castanopsis cuspidata* Schottky	ツブラジイ
20	ＳＡ３	床面	C10	*Castanopsis cuspidata* Schottky	ツブラジイ
21	ＳＡ４	床面	C11	*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch	イヌガヤ
22	ＳＡ４	床面	C12	*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch	イヌガヤ
23	ＳＡ４	床面	C13	*Daphniphyllum*	ユズリハ属
24	ＳＡ４	床面	C14	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ
25	ＳＡ４	床面	C15	*Meliosma*	アワブキ属

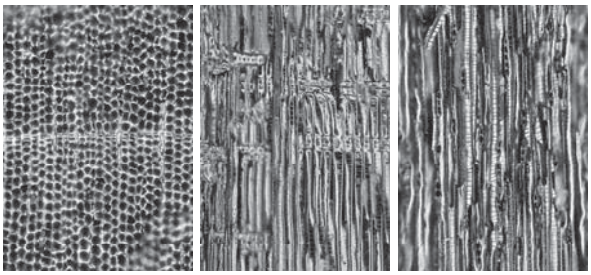


第51図　暦年較正結果

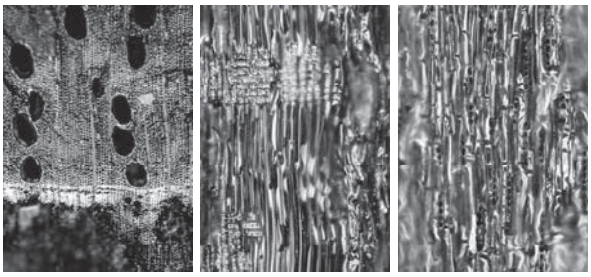
第21表　炭化種実同定結果

番号	遺構	出土位置	分類群（学名／和名）		部位	個数	備考
1	SA1	土器(132)内	Unknown	不明炭化物（種実以外）		116	炭化材片1
2	SA1	土器(130)内	*Hypoxis aurea* Lour. Unknown	コキンバイザサ 不明炭化物（種実以外）	果実 (破片)	1 1 2	
3	SA1	床面3区	Unknown Unknown	不明 不明炭化物（種実以外）		1 3	
4	SA1	床面4区	Unknown	不明炭化物（種実以外）		6	
5	SA2	床面NW	*Oryza sativa* L. Unknown	イネ 不明炭化物（種実以外）	果実	1 16	
6	SA2	床面NE	*Oryza sativa* L. Unknown	イネ 不明炭化物（種実以外）	果実	1 29	
7	SA3	焼土	*Vitis* *Vigna* Unknown	ブドウ属 ササゲ属 不明炭化物（種実以外）	種子 子葉(破片)	1 3 7	他に炭化材片2
8	SA3	焼土	Unknown	不明炭化物（種実以外）		2	他に炭化材片2
9	SA4	焼土	Unknown	不明炭化物（種実以外）		2	
10	SA4	焼土	Unknown	不明炭化物（種実以外）		7	

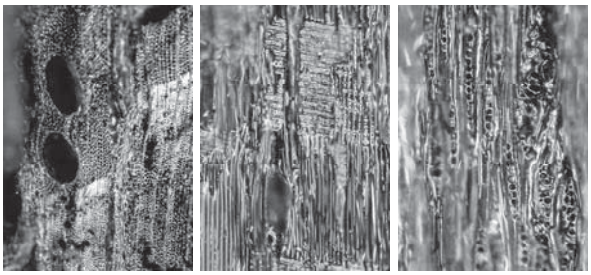
木戸平第2遺跡の炭化材



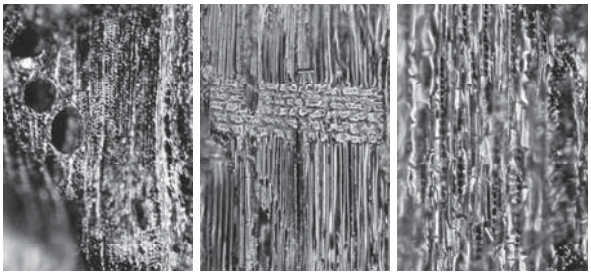
横断面 ：0.2㎜　放射断面 ：0.2㎜　接線断面 ：0.2㎜
1．22　SA4　床面　№3　イヌガヤ



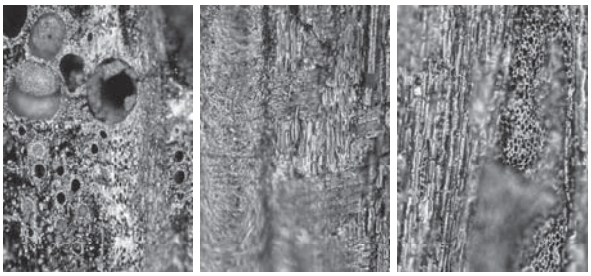
横断面 ：0.4㎜　放射断面 ：0.2㎜　接線断面 ：0.2㎜
2．16　SA3　床面　SW　C7　スダジイ



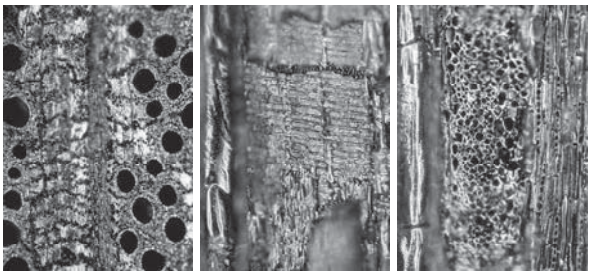
横断面 ：0.4㎜　放射断面 ：0.2㎜　接線断面 ：0.2㎜
3．19　SA4　床面　NE　C30　ツブラジイ



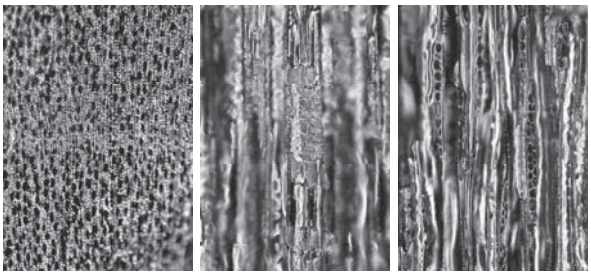
横断面 ：0.4㎜　放射断面 ：0.2㎜　接線断面 ：0.2㎜
4．20　SA3　床面　SW　C52　ツブラジイ



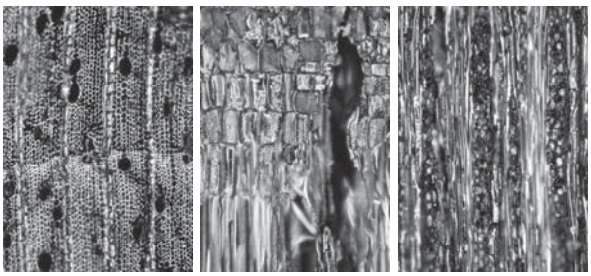
横断面 ：0.4㎜　放射断面 ：0.2㎜　接線断面 ：0.2㎜
5．13　SA2　床面　SE　C2　コナラ属クヌギ節



横断面 ：0.4㎜　放射断面 ：0.2㎜　接線断面 ：0.2㎜
6．17　SA3　床面　NW　C37　コナラ属アカガシ亜属

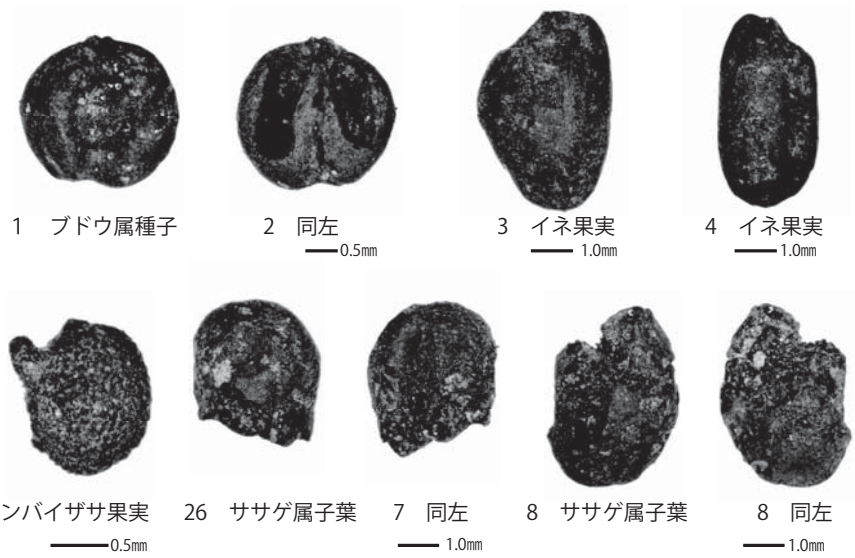


横断面 ：0.4㎜　放射断面 ：0.2㎜　接線断面 ：0.2㎜
7．23　SA4　床面　№5　ユズリハ属



横断面 ：0.4㎜　放射断面 ：0.2㎜　接線断面 ：0.4㎜
8．25　SA4　床面　№9　アワブキ属

木戸平第2遺跡の炭化種実



1　ブドウ属種子　2　同左 0.5㎜　3　イネ果実 1.0㎜　4　イネ果実 1.0㎜

5　コキンバイザサ果実 0.5㎜　26　ササゲ属子葉　7　同左 1.0㎜　8　ササゲ属子葉　8　同左 1.0㎜

第52図　炭化材・炭化種実

第Ⅵ章　総括

木戸平第２遺跡の発掘調査では、後期旧石器時代の遺構・遺物をはじめ、縄文時代早期・晩期の遺物や弥生～古墳時代の竪穴建物跡や遺物が多数確認された。

本章では、時代順に木戸平第２遺跡の調査成果について検討を加えることで総括とする。

１　後期旧石器時代

後期旧石器時代はAT上位が大きく二つの時期に分かれる。このうち、第Ⅰ期では、礫群４基（SI1 ～4）が検出された。礫群を構成する35個の石材は全て尾鈴山溶結凝灰岩であった。単一素材を選択し使用している状況から、尾鈴山溶結凝灰岩に対する強い選択性を見出せる。石器は、ナイフ形石器や剥片尖頭器等を含む405点が出土した。これら石器の出土状況や接合資料の分布状況からは、石器製作の場であったと窺える。石器相は、近隣の俵石第１遺跡での後期旧石器文化期Ⅲ～Ⅳ期に相当すると考えられる。第Ⅱ期は、細石刃や細石刃核といった石器33点が出土した。

２　縄文時代早期

縄文時代はA2区Ⅴ層から縄文土器が出土し、F1区では結節縄文の施された平栫式土器が出土したことから早期中葉頃に位置すると考えられる。石器は黒曜石、チャート、安山岩、水晶、珪質頁岩等の豊富な素材で作られた石鏃が22点出土した。F1区では白色系チャートの石鏃１点とチャートの剥片や砕片120点が集中する石器ブロックの範囲が検出された。ここでは微細な剥離調整を必要とする石鏃等を製作していた可能性が高い。

これらA2・F1区では遺構は確認されず、石鏃の多さや石器製作箇所の検出に特徴付けられる。この様な調査結果から、縄文時代早期においては、生活の場ではなく狩猟の場や狩猟・採集活動に伴う石器製作の場として営まれていたと考えられる。

３　縄文時代晩期

土器はわずかに出土したが、遺構は検出されず遺物包含層もなかった。後期旧石器時代や縄文時代早期に比べて小規模な活動であったと考えられる。（徳留）

４　弥生～古墳時代

（１）遺構の時期と変遷過程

竪穴建物（SA1 ～5）や土坑墓（SD1）出土の土器は、概ね弥生時代後期～古墳時代前期にかけての土器群と考えられ、甕をはじめとして壺・鉢・高坏等と種類も多い。

特に甕には形態的な差異があり、土器の型式（時期）差が存在するとみられる。この項では、出土土器群のうち、主に甕の形態的特徴について検討を加えることで各遺構の時期を導くこととする。

出土遺物と遺構の時期　SA1で出土した甕の底部形態は、円盤状で僅かに上げ底となるもの（①類:128・130・132）と端部が外方へ張り出す（②類:133）の二者がある。この①・②類は、石川悦雄氏による宮崎平野部における弥生土器編年（石川1998）の、Vcないし Vd期（上げ底）とⅥ期（接地面の広い平底）に位置づけられる甕の中間的な形態となるので、①・②類の甕は弥生時代終末期でも初頭の時期と考えられる。SA1の所属時期はその頃と考えられる。なお口縁部の屈曲が弱い127・129はSA2 ～4出土甕の形態に近い。

このSA1出土の甕は、川南町尾花Ａ遺跡三次調査区S107や都農町尾立第２遺跡SZ1出土資料と類似する。

鉄器には摘鎌（143）、石器では石庖丁（145）があり、鉄製・石製の二者による穂摘み具が認められた。

SA2の出土土器群のうち、甕は底部が接地面の小さい平底で底面と側面の境が明瞭なもの（③類:150）と尖底（④類:152）のものが床面直上で出土した。150の口縁部は緩く外反している。これにコップ状の鉢（169）や広口の鉢（171）が伴う。これらは日向市板平遺跡の土器編年でいうⅠ期ｂ段階（松田・今塩屋2011）に位置づけられる。つまり、SA2は弥生時代終末期でも後半の時期と考えられる。

出土した石器には、特に注目される遺物が認められた。抉り入りの柱状片刃石斧（172）と管玉（173 ～175）である。172はSA2の貼床内出土であるので明確な所属時期は不明であるが、後述する集落の変遷過程からすると弥生時代終末期の石器とみなしてよい。瀬戸内方面との地域間交流を考える上での鍵となる資料の一つといえる。管玉３点は、碧玉・緑色頁岩

製でかなり小さい。県内の類例には高千穂町古城遺跡の竪穴建物（SA22～24）の弥生時代後期の出土品があるが、弥生時代の管玉は調査事例に比してかなり少ないようである（藤木2009）。

鉄器は鉄鏃が４個体分出土した。調査された竪穴建物跡群のうち、集中的な保有のあり方を示していた。

SA3では、甕の底部は③類（182･185）のものが出土している。甕の全体形はSA2･4と変化しない。これに大型壺（187）や体部が逆三角形状の鉢類（192～197）等の新しい様相の器形が伴う。つまり、これらの土器群は板平遺跡のⅠ期ｂ段階～Ⅱ期a段階に位置づけられ、弥生時代終末期の後半から古墳時代前期の初頭頃の存続幅が考えられる。それはSA3の存続時期でもある。

一方、内面に赤色物質が付着した土器（182･198）には赤色顔料が保管されていたと考えられる。

川南町赤坂遺跡SA17では赤色顔料の付着した磨石が出土している。

なお、SA3の埋土中でまとまって出土した磨石・石皿・台石（206～209）は一括投棄された可能性が高く、道具の組み合わせを示す資料と考えられる。

SA4で出土した甕の底部形態は、接地面の小さい平底で底面と側面の境が丸みを帯びる⑤類（218）と④類（219）がある。SA2との切り合い関係からSA4はSA2よりも古い時期、つまり弥生時代終末期でも中頃と位置づけられる。なお、焼土内から出土した炭化物の自然科学分析結果と異なるが、SA4内の炉は建物跡の床面に掘り込みがある事と、配石の上からも弥生土器が出土していることから建物に伴う遺構である。

SA5で出土した甕の底部には、①類（232）と②類より上げ底となるもの（⑥類:233）がある。⑥類はSA1の②類よりも型式的に先行するので、SA5の出土土器群は石川氏のVc･ｄ期に相当すると考えられる。すなわち、SA5は弥生時代後期後葉の時期と位置づけられる。川南町赤坂遺跡SL1出土遺物と類似した土器群である。

なお、SA5には底部に穿孔のある土器（234）が出土した。焼成前に穿孔が施される点から蒸器すなわち甑として報告した。都農町俵石第２遺跡のSZ1や川南町尾花Ａ遺跡二次調査区2-S9等に類例があり、これらは弥生時代後期～古墳時代前期に所属する。これら「底部有孔土器」は、畿内を中心に東西に広がる（佐原1996）という。宮崎平野部にも波及したことが確認されたが、その用途や使用法等については不明な点が多い。

SD1からは、大型壺（239～242）と在地系譜の高坏（243）に伴って坏部が装飾的な高坏（244･245）が出土した。在地系高坏（243）や壺（239・242）は形態的特徴から板平遺跡のⅠ期ｂ段階に相当する。従ってSD1の出土土器群は弥生時代終末期の中頃～後半と位置づけられる。

SD1の出土遺物は、壺や高坏のみで構成される祭祀儀礼のための土器群であり、打ち欠きや破砕（写真図版14参照）は土器を用いた儀礼行為の一端を伺わせる。244･245の坏部形態は、川南町東平下１号円形周溝墓出土の瀬戸内（吉備）系装飾高坏の影響を受けたもので、在地系譜の高坏脚部と融合したものといえる。

弥生時代終末期になると宮崎平野部でも北部地域（児湯郡）では、装飾高坏の模倣品や在地系高坏との融合した形態が土器様式内に取り込まれる。前者は新富町城ノ下遺跡、川南町中ノ迫Ａ遺跡・南原Ａ遺跡・赤坂遺跡・銀座第１遺跡があり、後者は都農町木戸平第１遺跡や俵石第２遺跡等が挙げられる。先述の都農町新別府下原遺跡例は前者または後者と考えられる。

遺構の変遷　路線内のみの調査という限定された部分ではあるが、荒崎山の山裾と河岸段丘面との境付近（A2・F3区）で弥生時代後期後葉段階（SA5）に本遺跡の集落形成が開始したと考えられる。

続いて終末期初頭段階のSA1が出現するが、中～後半段階になると、集落の立地は都農川河畔の河岸段丘面（F1区）に大きく移動して（SA2･4）、古墳時代前期初頭（SA3）までは続くことが確認される。SA3は床面積40㎡を測る大型の建物跡であり、集落内の中心的役割であったと理解される。なお、F区の隣接部分では弥生時代終末期を中心とした遺物（第49 図）も出土したので、都農川南側河畔に沿って集落が展開していた可能性は極めて高い。また、SA2の埋土中から出土した小型丸底壺（163）は古墳時代前期段階まで継続した集落形成の可能性を示唆している。

河岸段丘面（F区）に集落が移動した後のA2･C区（山裾）は、土坑墓（SD1）による墓域となる。弥生時代終末期に入ると集落よりも高い標高、すなわち集落を見下ろせる位置に墓域が設定されたことが読み取れる。

（2）まとめ

本遺跡周辺では明治時代に土器が出土しており、集落跡の存在が想定されていた（都農町教委1988）が、今回の発掘調査によって集落跡の存在を実証づけられた。現時点では、弥生時代後期後葉に出現し、古墳時代前期まで継続する集落跡と捉えることができる。

また、南九州特有である花弁状の間仕切りがある竪穴建物跡（SA3）の検出は都農町の初例であり、その空白域を埋める重要な調査事例となった。弥生時代の土坑墓の検出も初例であり、都農町における弥生時代像をとらえる上で大きな成果となった。

さらに、弥生時代終末期になると集落域と墓域が近接した位置に成立することが判明した。集落域と墓域の関係性が具体的に読み取れる数少ない調査例の一つとなった。弥生時代後・終末期における集落と墓域との関係性が明確な調査事例は、川南町赤坂遺跡や小林市大萩遺跡等があるが数少ない。古墳時代（前方後円墳築造開始）前夜の小地域における集団関係の実態解明につながる調査成果となったが、土坑墓（SD1）は集落の成員による集団墓の一部なのか、個人墓であったのかは判断しえず、さらに検討を進められなかった。今後の調査を待ちたい。

出土遺物のうち、装飾高坏の影響を色濃く残す高坏や、方形で抉りのある石庖丁や柱状片刃石斧の存在は、瀬戸内地域・豊後水道を介した地域間交流の具体的な表徴と理解される。さらに、管玉は北部九州系の要素が読み取れることから、他地域との活発な物的・人的交流がもたらされていたといえる。

弥生～古墳時代の土器については、甕底部の特徴と他器種とのセット関係から所属時期を推定する方法をとった。しかし、甕の底部形態が平底と尖底が遺構内で共伴する場合が認められ、時期（型式）差なのか機能（形式）差なのかは判別し難かった。この課題は、小丸川～都農川流域間の弥生時代後期～古墳時代前期における集落遺跡を視野においた土器相を捉えたうえで、再度検討することとしたい。

本遺跡をはじめとする、東九州自動車道建設関連の発掘調査等によって、小丸川～都農川の流域間においては弥生時代後期後葉～終末期を画期として集落遺跡数が急増することが明らかとなった。

台地上では川南町尾花Ａ遺跡のような長期継続かつ拠点的な大集落が成立し、１km内外の距離毎に衛星的な集落や１～２軒のみの小規模かつ短期的な集落跡が分布することが解明されつつある。

集落遺跡の増加現象は、台地上にとどまらず本遺跡のような山あいの狭隘地にも集落の分布が拡大する。集落遺跡の急増する背景は、生産活動の増大や向上による人口圧の上昇のみならず他地域からの物的・人的交流も考慮されるが、検討すべき課題は多い。

本遺跡における集落の成立は、少なくとも弥生時代後期後葉を画期とする人間活動域の広域的・積極的拡大がその背景にあったと意義付けられる。

集落遺跡の急増に歩調を合わせて、本遺跡や川南町赤坂遺跡や東平下周溝墓群等では、ランク差こそあれ造墓活動が顕在化・活発化する。これは県下有数の大規模古墳群形成へ連結する歴史的事象であり、本遺跡の土坑墓もそうした脈絡で評価されよう。　（今塩屋）

【引用参考文献】

宮崎県教育委員会1974「大萩遺跡（１）」『瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
宮崎県教育委員会1976「都農町岩山遺跡調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第18集
宮崎県教育委員会1985「川南町中ノ迫Ａ遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第28集
宮崎県教育委員会1986「川南町東平下円形周溝墓」『宮崎県文化財調査報告書』第29集
都農町教育委員会1988『都農町遺跡詳細分布調査報告書』
都農町教育委員会1990「新別府下原遺跡」『都農町文化財調査報告書』第３集
宮崎県教育委員会1994「城ノ下遺跡」『鬼付女川基地周辺障害防止対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
佐原真1996『食の考古学』東京大学出版会
石川悦雄1998「宮崎平野部弥生土器編年」『宮崎考古学会第36回例会発表資料』
宮崎県埋蔵文化財センター2003「布平遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第73集
宮崎県埋蔵文化財センター2007「赤坂遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第151集
宮崎県埋蔵文化財センター2008「尾立第２遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第169集
藤木晶子・藤木聡2009「宮崎県域における縄文の玉・弥生の玉」『国際交流展 玉と王権』宮崎県立西都原考古博物館
藤木聡2010「弥生時代日向における片刃石斧の変遷とその背景」『宮崎考古』第22号
宮崎県埋蔵文化財センター2011「銀座第１遺跡（五次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第194集
宮崎県埋蔵文化財センター2011「尾花Ａ遺跡Ⅱ」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第195集
松田博幸・今塩屋毅行2011「第Ⅶ章 総括」〔板平遺跡（第３・４次調査）〕『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第199集
宮崎県埋蔵文化財センター2011「俵石第１遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第200集
宮崎県埋蔵文化財センター2012「俵石第１遺跡　俵石第２遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第216集

写　真　図　版

調査終了直前の平成23年1月26日（水）川南町湯牟田の県道から見た新燃岳の噴煙

木戸平第２遺跡上空から見た都農市街と日向灘

第３次調査区全景（遺跡上空から南を望む）

図版２　　後期旧石器時代の遺構

第３次調査区ー西からー　左からＳＩ２・ＳＩ３・ＳＩ１

ＳＩ１ー東からー

ＳＩ２ー東からー

ＳＩ３ー西からー

ＳＩ４ー東からー

１号竪穴建物跡　－西から－

１号竪穴建物跡　土器出土状況　－南から－

１号竪穴建物跡　土器出土状況　－西から－

Ｆ１区　弥生時代遺構全景

図版４　　弥生～古墳時代の遺構（２）

２号竪穴建物跡完掘状況　－東から－

遺構(SA2・SA4)検出状況　－Ⅳ層上面　東から－

２号竪穴建物跡遺物出土状況　－西から－

２号・４号竪穴建物跡完掘状況　－東から－

３号竪穴建物跡遺物・炭化材検出状況　－西から－

３号竪穴建物跡・完掘状況　－東から－

３号竪穴建物跡・土坑検出状況　－Ⅳ層上面　東から－

建物(SA3)内土坑１・遺物検出状況　－北から－

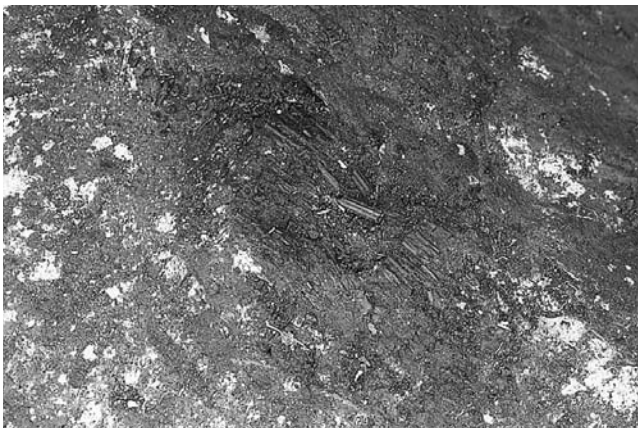
建物（SA3）内土坑2・遺物検出状況　－東から－

図版６　　弥生～古墳時代の遺構（４）

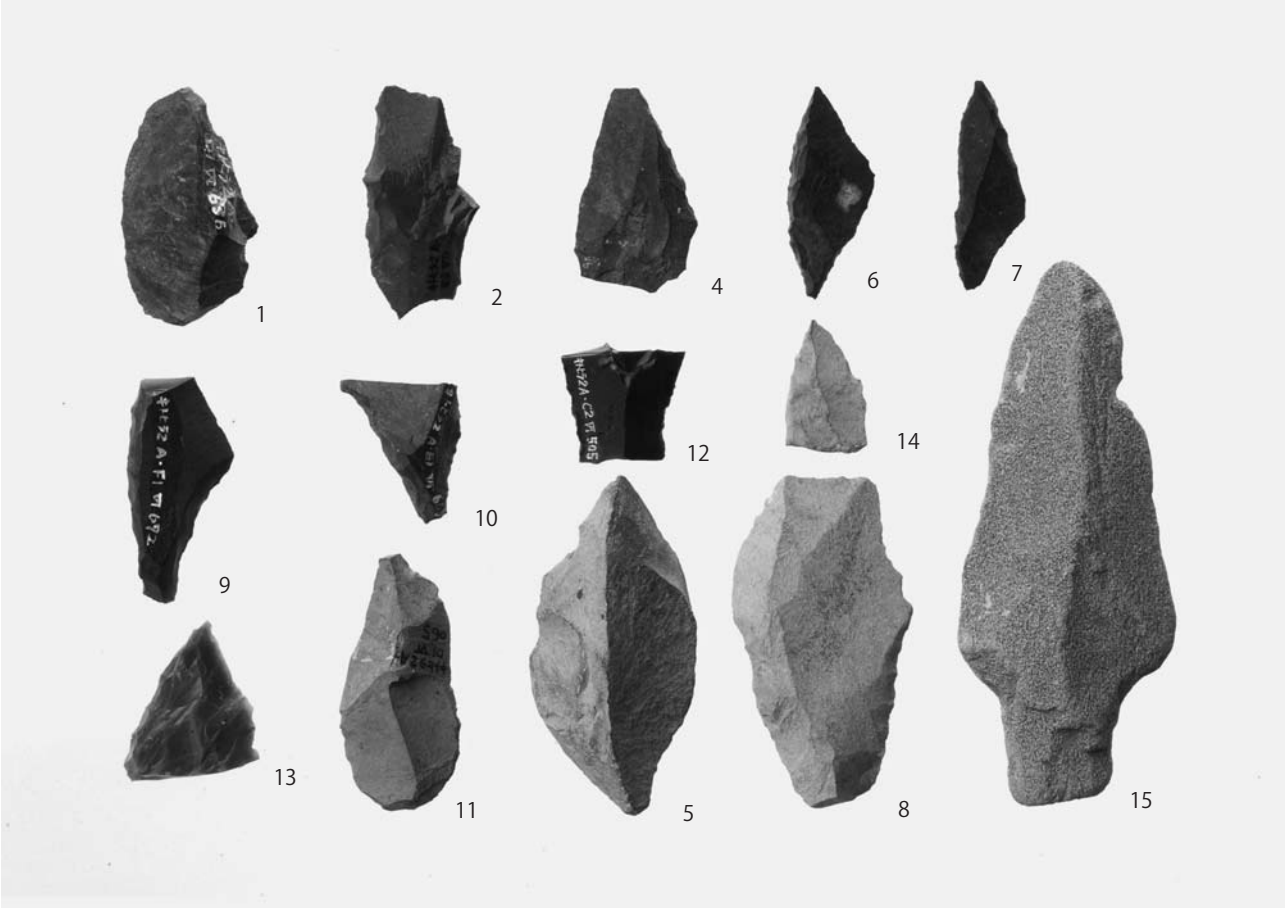
４号竪穴建物跡遺物・炭化材検出状況　－西から－

４号竪穴建物跡遺物出土状況　－東から－

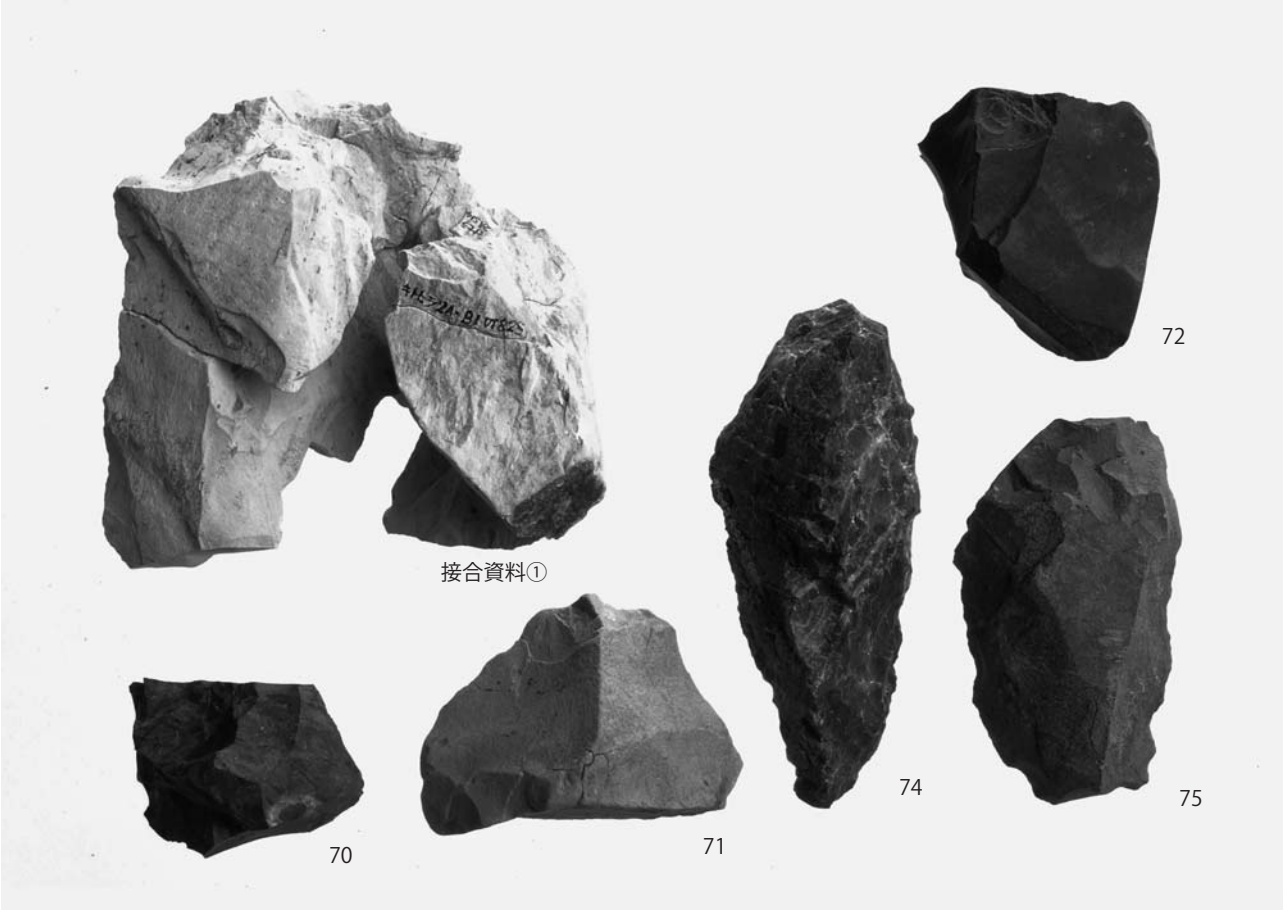
４号竪穴建物跡　炉



４号竪穴建物跡　炭化物



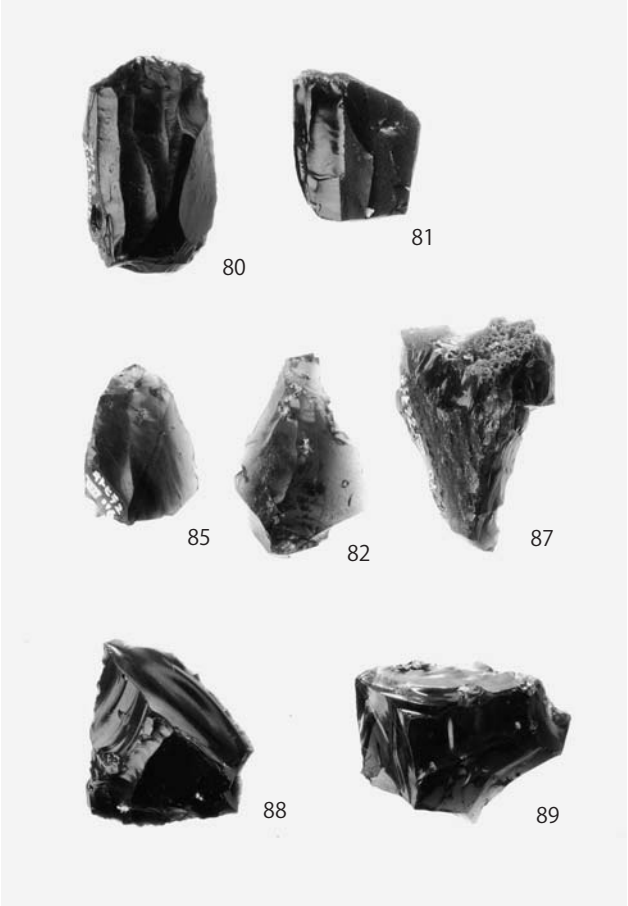
ナイフ形石器・剥片尖頭器



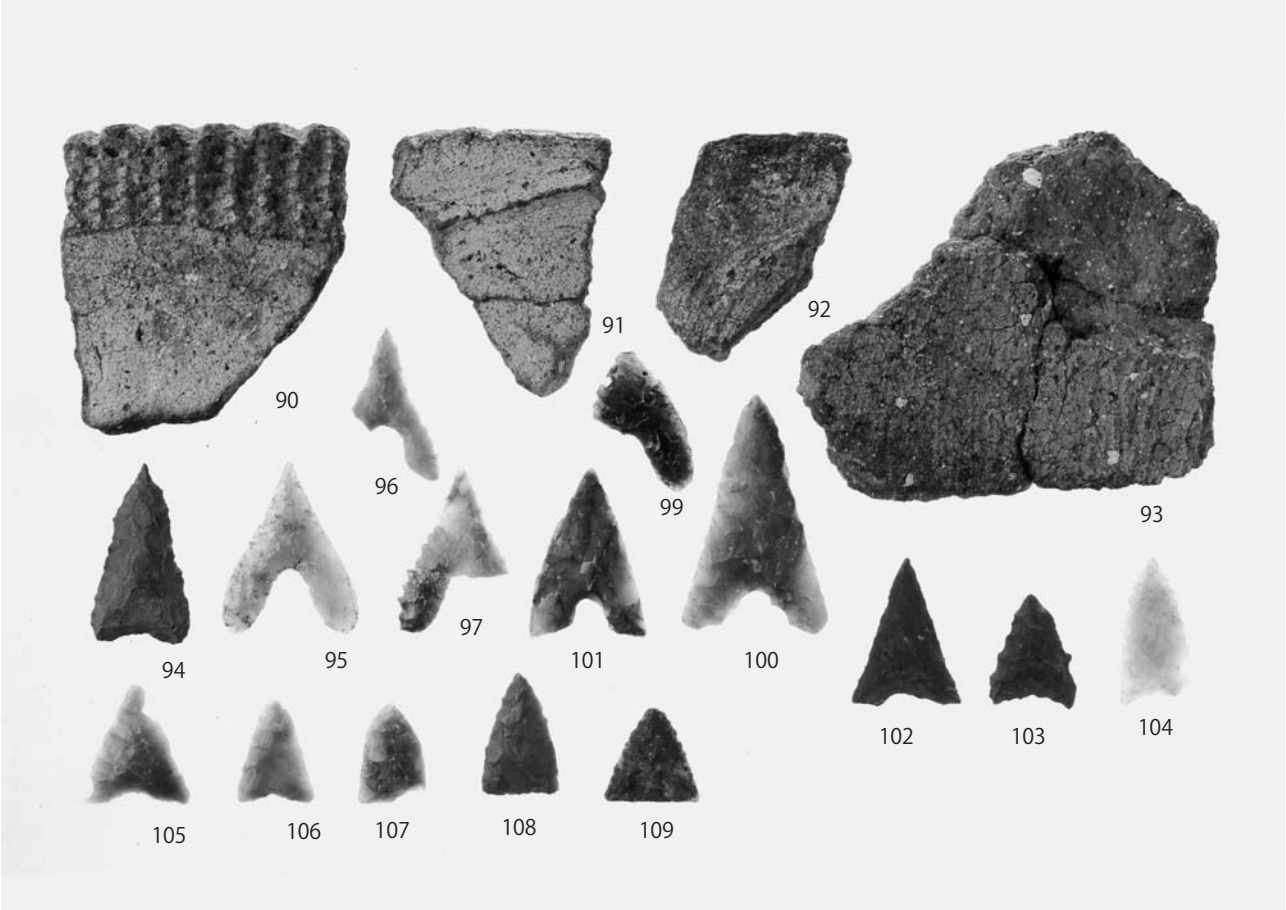
接合資料・石核・二次加工剥片・スクレイパー

図版８　　後期旧石器時代・縄文時代早期の遺物

敲石



細石刃核・スクレイパー・石核



縄文土器－早期－・石鏃

SA1-127

SA1-129

SA1-128

SA1-132

SA1-133

SA1-130

SA1-131

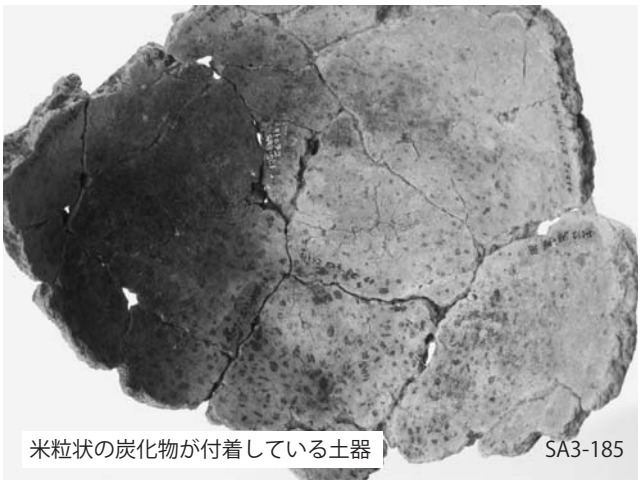
図版 10　　2 号・3 号竪穴建物跡出土遺物（1）

SA2-150

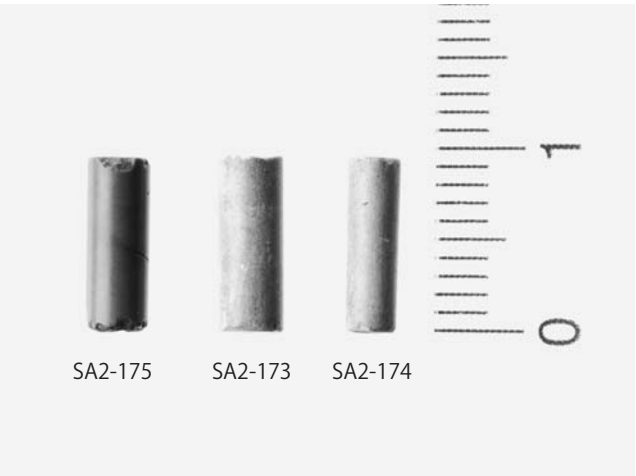
SA2-161

SA2-169

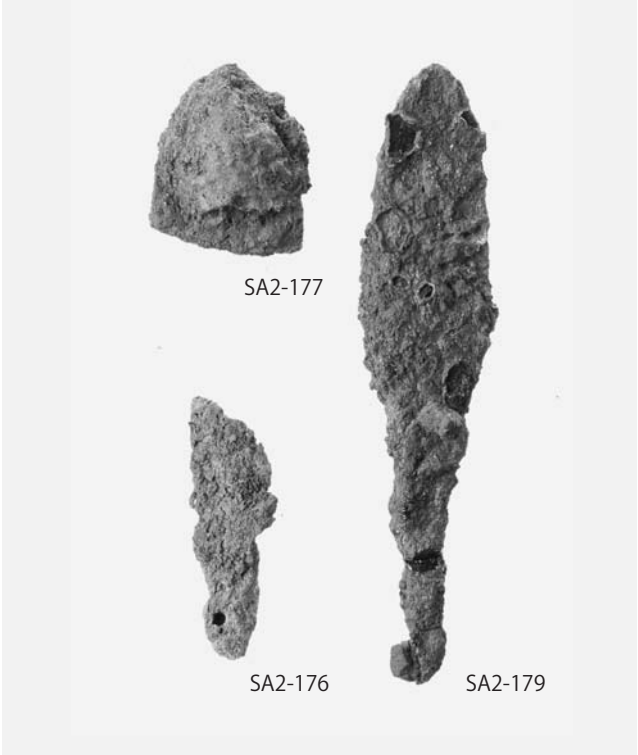
SA3-185


米粒状の炭化物が付着している土器
SA3-185

SA3-172



SA2-175　SA2-173　SA2-174

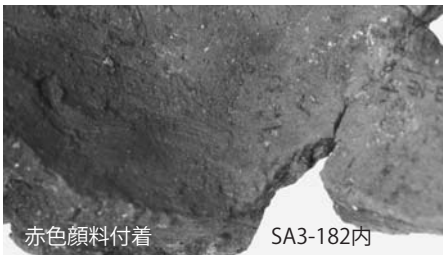

SA2-177
SA2-176
SA2-179

SA3-186

SA3-194

SA3-197

SA2-171


赤色顔料付着
SA3-182内

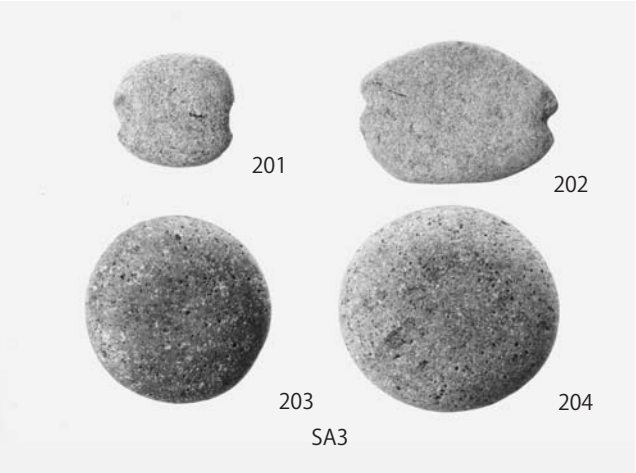
SA3-182

SA3-198

赤色顔料付着　SA3-198内

図版 12　　3 号・4 号竪穴建物跡出土遺物

SA3-206



SA3

SA4-217

SA4-218

SA4-219

SA4-226

SA4

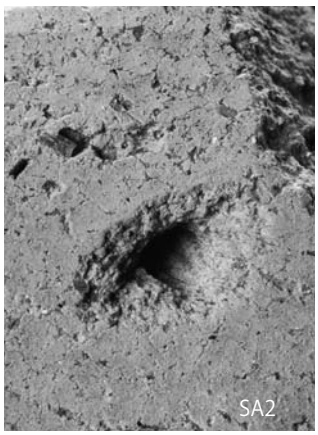
SA5-232

SA5-233

SA5-236

SA5-234底

SA5-237


SA2

SA3

圧痕土器（未掲載資料）

図版 14　　土坑・土坑墓・その他の遺構出土遺物

SC1-238

SD1-239

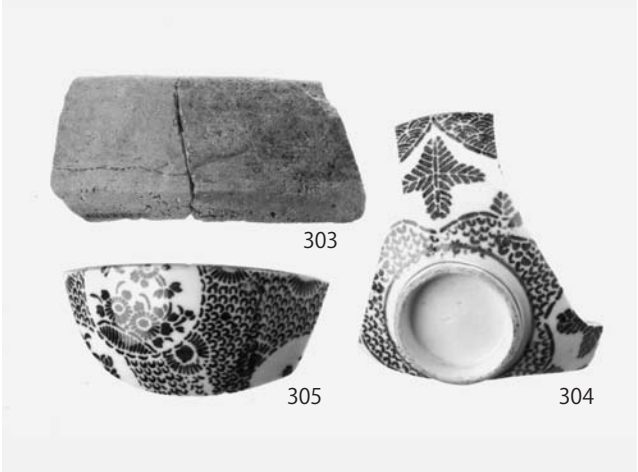
SD1-245（坏部）

SD1-242

SD1-245（脚部）

SD1-244

292
293


303
305
304

報 告 書 抄 録

ふりがな	きとのひらだいにいせき
書名	木戸平第２遺跡
副書名	東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第215集
執筆・編集担当者名	徳留洋志・今塩屋毅行　（下線は編集者）
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒880-0212　宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地
発行年月日	2012年２月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
木戸平（きとのひら） 第２遺跡（だいに）	宮崎県（みやざきけん） 児湯郡都農町（こゆぐんつのちょう） 大字川北（おおあざかわきた） 字木戸平（あざきとのひら） 11074番地他（ばんちほか）	45204 6	1025	32度 16分 10秒	131度 31分 59秒	第１次調査 平成21年1月6日～ 1月14日 第２次調査 平成21年7月13日～ 9月2日 第３次調査 平成21年10月13日～ 平成22年1月18日 第４次調査 平成22年10月18日～ 平成23年1月31日	2,880㎡	記録保存 調査

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	後期旧石器時代	礫群４基	ナイフ形石器、剥片尖頭器、細石刃、細石刃核、スクレイパー	焼失建物跡４軒を含む竪穴建物跡５軒が検出された河岸段丘面上の弥生集落
	縄文時代早期		縄文土器（深鉢）、石器（石鏃・剥片）	
	縄文時代晩期		縄文土器（深鉢・浅鉢）	
	弥生時代後期～古墳時代前期	竪穴建物跡５軒 土坑５基 土坑墓１基	土器（甕・壺・高坏・鉢・甑・器台）、石器（石斧・石鏃・石庖丁・管玉）、鉄器（鉄鏃・摘鎌）	
	近世以降	溝状遺構１条	土器、陶器、磁器	

要　　約

木戸平第２遺跡は、児湯郡都農町の都農川南岸に位置する。遺跡は荒崎山から延びる東向きの緩やかな斜面から北へ広がる河岸段丘面上に立地する。

後期旧石器時代では礫群が４基検出され、ナイフ形石器・剥片尖頭器・細石刃等が出土した。

縄文時代早期の遺物は石鏃を中心とし、石器製作に伴う剥片や砕片が集中する箇所が検出された。

弥生時代～古墳時代の遺構は、竪穴建物跡5軒や土坑５基、土坑墓１基がある。遺跡内で集落域と墓域が分離した状況が確認された。特に、都農町で初例となる花弁形の間仕切り壁を持つ竪穴建物跡は注目される。弥生時代の竪穴建物跡内で出土した管玉の類例は県内でも３例程度であり貴重である。土坑墓からは、破砕・供献された土器が出土し、瀬戸内地方と交流を示す高坏も含まれる。

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第215集

木　戸　平　第２遺　跡

東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書7

2012年２月

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212　宮崎市佐土原町下那珂4019番地

TEL 0985(36)1171　　FAX 0985(72)0660

印　刷　株式会社イースト朝日　宮崎支店

〒880-0024　宮崎市祇園２丁目117番地

TEL 0985(72)5055　　FAX 0985(72)5054